

594-92



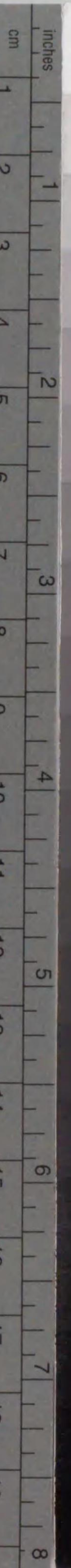
\*1200700045754\*

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

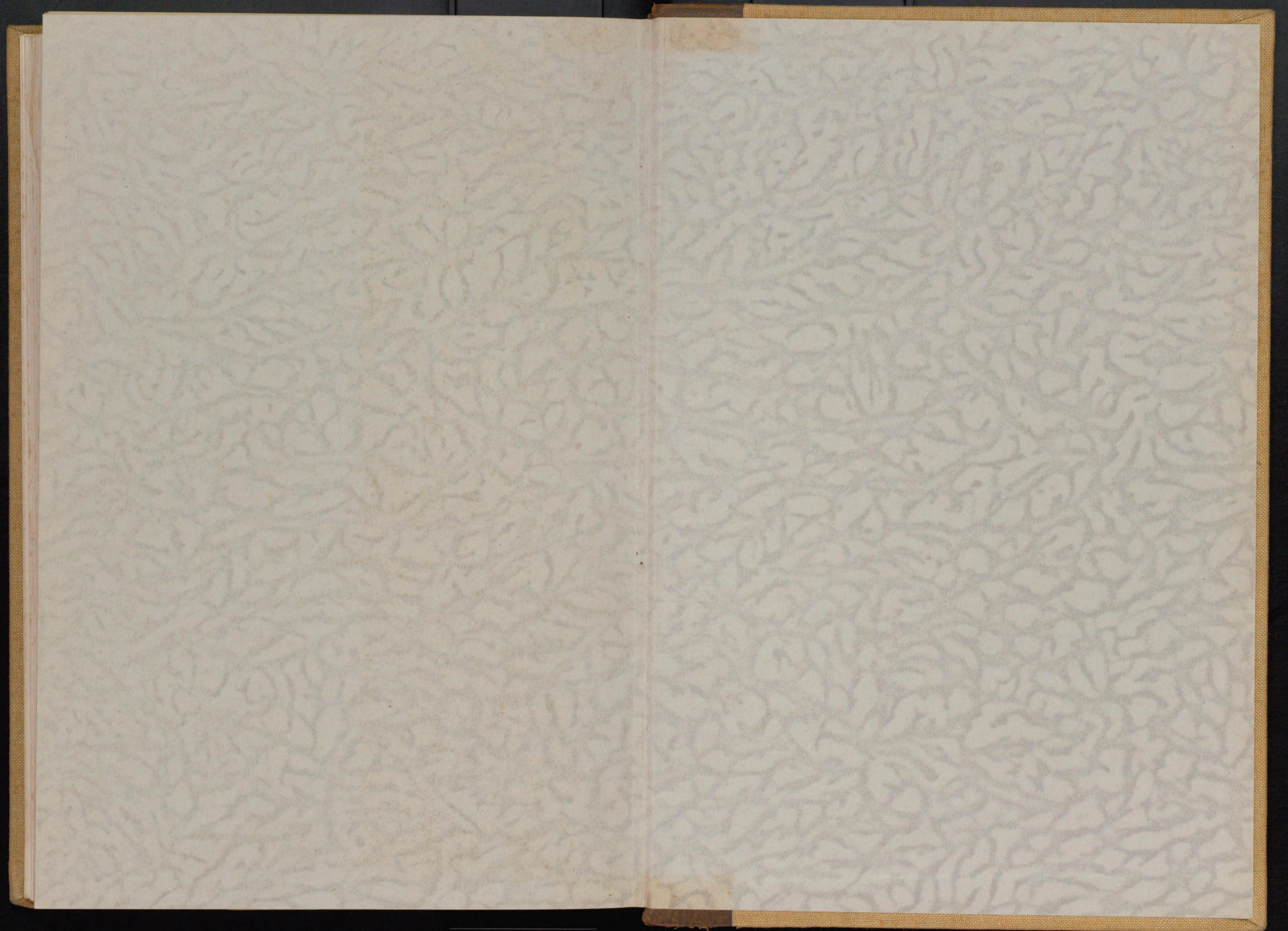


# Kodak Color Control Patches

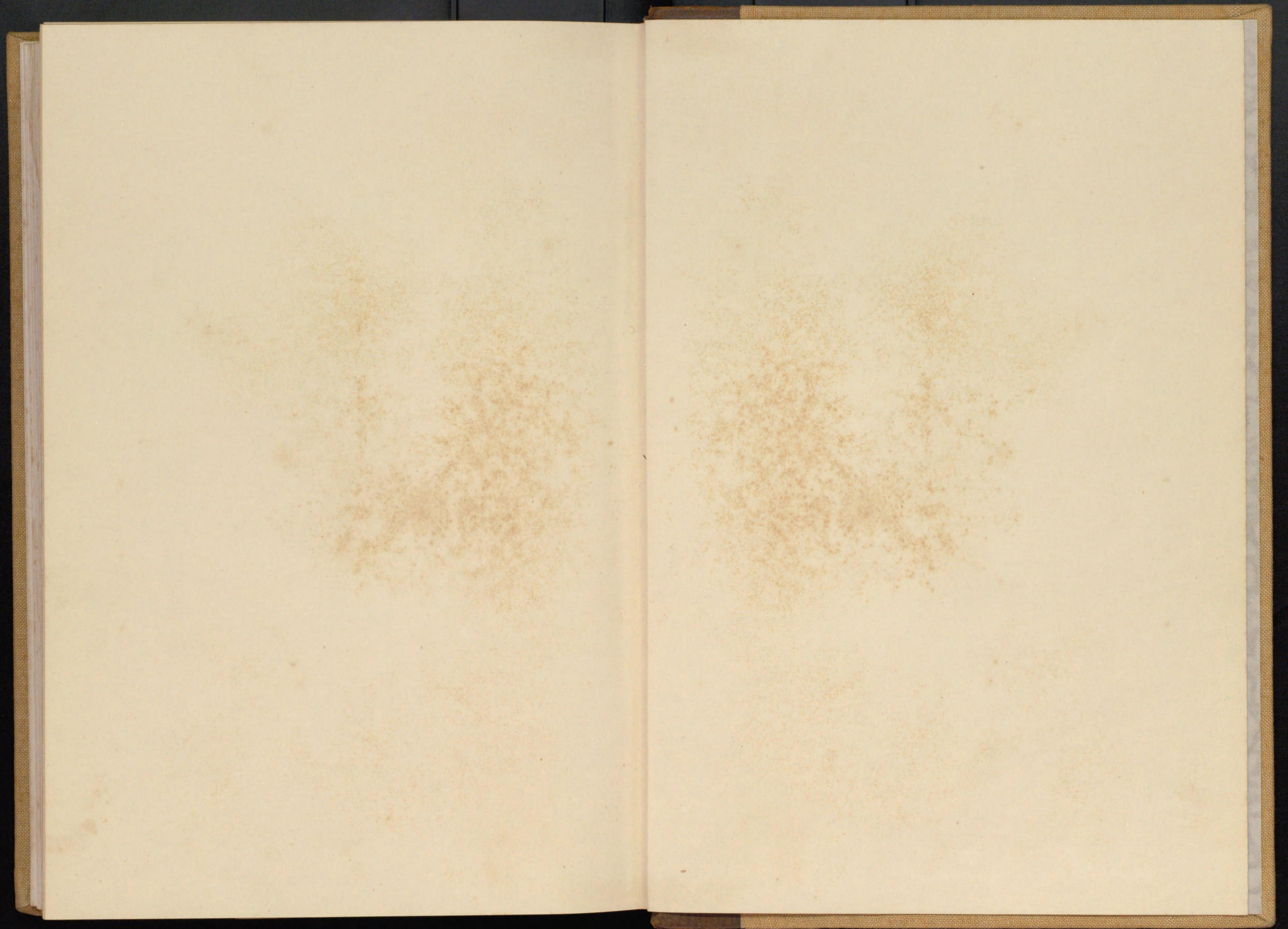
© Kodak, 2007 TM: Kodak









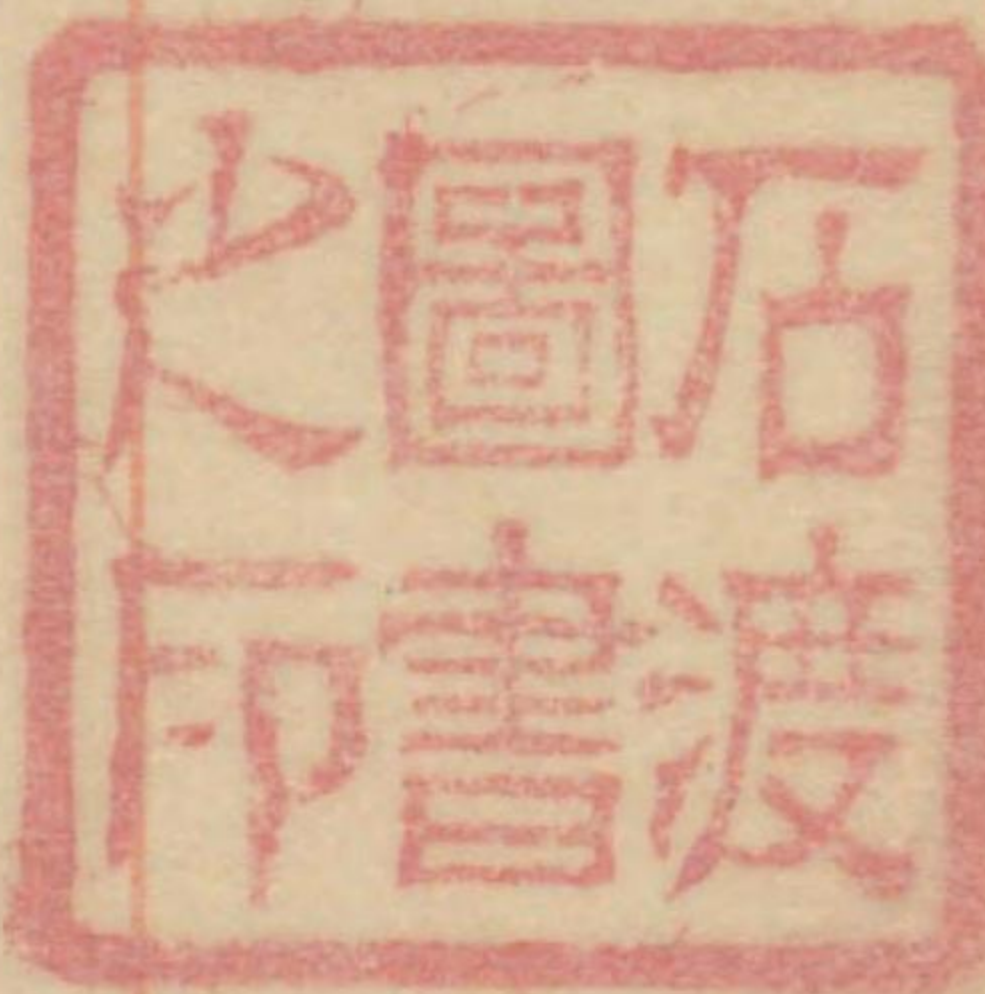




大禮記念刊行

新編

志苑風土記



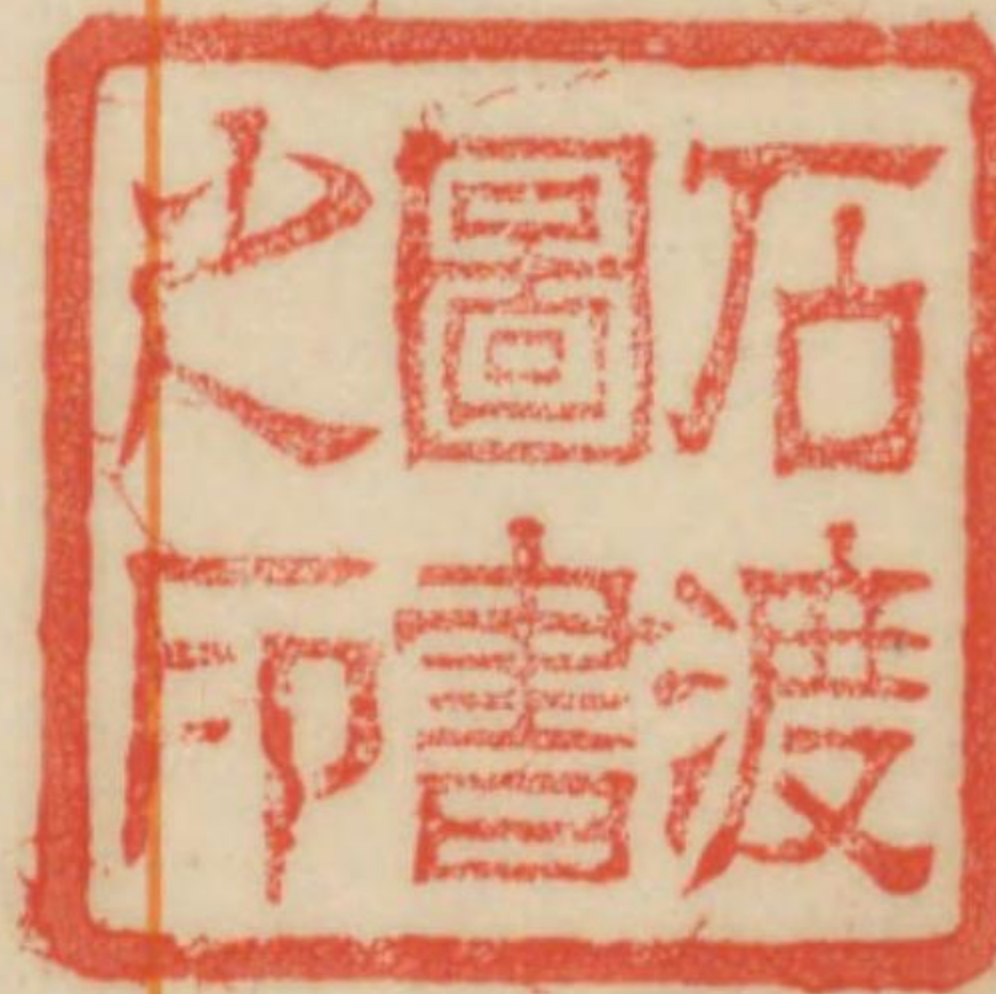
相武史料刊行會



大禮記念刊行

新編

志苑風土記



相武史料刊行會



594

92

序

畏くも 一昨秋 今上天皇陛下萬世一系の大統を嗣がせ給ひ御即位の大典を挙げさせ給ふや蒼生舉げて至歡至悅奉祝の誠を敷き、聖壽の無疆と國運の隆昌を祈り奉らざるなし。

此の千載一遇の盛儀に膺り吾が神奈川縣學生協會は之が永劫の記念に資すべく、天保年間幕府の編纂に係る「新編相模風土記」及び「新編武藏風土記」なる縣史文獻の刊行を企畫し神奈川縣學生協會長井上篤太郎君を會長として相武史料刊行會を組織せられ、同郷有志諸賢相呼應して該事業の達成に盡力せらる。

序



I種  
W



\*1200700045754\*



其の時宜に適ひ、其の事業の美なる單に大禮記念事業としてのみならず亦世に裨益するところ鮮少ならざるべきを信ず。

爾來茲に三星霜幸にして同郷有志諸賢の後援と會長以下各役員の犠牲的努力に依り斯る難事業を茲に完結し得たるは、我郷土空前の快舉にして寔に歡喜に堪へざるところなり。

余は衷心の至情と滿腔の感謝を表し、聊か所感を述べて祝辭に代ふ。

昭和五年十一月

相武史料刊行會顧問  
神奈川縣學生協會顧問

鈴木喜三郎識

序

凡そ歴史の貴ぶべきは、其の生命とする所が啻に文化史的記述たる事に止まらず、人間生活の全體的記述なるが故なり。即ち歴史の眞價は生命の源泉として、人類を規範し、社會を繩墨する所に存す。古代文字の未だ發達せざる時代に於ける神話、傳説の如く、口碑に傳へられたる幾多の史實が多年人口に膾炙せられ、玩味せられて、或は之が一世の指針となり、或は人生問題解決の資料となりし類例は枚舉に遑あらず。是れ實に歴史が文化史的意義に於て、一世の指導者たると同時に、人間生活の態度



に基軸を與ふる所以の證左に外ならず。

惟ふに日本三千年の歴史は宇内に冠絶し炳乎として日月の如く燦たり。唯だ夫れ絢爛たる文化の連鎖なるの故に非ず。其間人生幾多の經驗的史實が織り込まれたるを以て貴しとなす。明治文化の先驅をなすものは江戸文化であり、江戸文化の徵象は遠く奈良、桃山の文化に胚胎せり。斯くして日本三千年の文化と歴史とは、之を繞ぐる象多の人生と共に、連綿として後昆に傳承せられ、國家民生の將來にとりて眞に啓導の材たるを得べし。

由來吾が神奈川縣は、源賴朝公の鎌倉に覇府を開きしより七

百餘年の間、日本中興文化發祥の地として、肇國宏遠の理想に貢獻する所頗る多し、其の文に於て、其の武に於て、將又其の宗教及び藝術等に於て、國內を風靡したるは夙に世人の知る所なり。之を以て日本史を研究し、大和民族暢展の跡を探索せんとせば、先づ相模・武藏の文物、制度、人情、風俗等に通曉するを要す。固より鎌倉を中心とせる相模・武藏に關する歴史的記述必ずしも尠しとせず。然れども其の多くは表面的記述に流れて、事實の眞相に徹せざるの感なきを保せざるなり。

此の秋に當り、多年史家の筐底を埋藏せられて門外に出でざりし「新編相模風土記」及び「新編武藏風土記」が、圖らずも大禮記念



の爲め神奈川縣學生協會の手に依り、剗腕に附せられたるは單に相武二州の歴史竝に傳説を世に紹介せしに止まらずして、一面歴史的考古學的に貢獻する所偉大なるものと共に、他面動もすれば輕躁に流れんとする現下人心の趨向に一の緊張味を與ふる好個の材料たるべく、必ずや世人を裨益すること尠少なからざるべきを信じて疑はず。

余は茲に最終篇の上梓に際し、斯る大業を完成せる青年諸士の熱誠と、本事業の性質をよく認識され終始絶大なる御贊助を齎まれざりし同郷の有志諸賢に満腔の敬意を表し、聊か蕪言を敘し序に代ふ爾云。

昭和五年十一月

相武史料刊行會顧問  
神奈川縣學生協會顧問

小泉又次郎誌



## 序

美なる哉山河の形勝、相武の地武以て用ふ可く、文以て可するに足る。覇業一たび鎌倉に起りてより再遷して江戸三百年の治平を致し、三遷して明治大帝の遷都となり、國運隆起帝道蕩々遂に雄を世界に争ふに至る、亦盛なりと云ふ可し。

蓋し歴史は治亂興亡の迹を語り、舊聞史蹟の實を告げ、世道人心を嚮導涵養するの大なるものあり。況んや七百年來多くは國家文運の重心たりし相武の史實は、更に日本國民と學界との實鑑たるを疑はず。



頃者相武史料刊行會は爰に見る所あり、御大典記念事業として新編相武風土記の出版を企畫し、刻苦三星霜遂に鬱として其實鑑の大成を見るに至れり。其功寔に偉なりと云ふ可し。

同郷の士此書を読む者希くは治亂興亡の迹、舊聞史蹟の實に鑑み、互に奮勵協調以て吾等祖先の遺風を發揚せられんことを。聊か一言を述べて序となす。

昭和五年十一月

相武史料刊行會顧問  
神奈川縣學生協會顧問

三 溪 原 富 太 郎 識

序

制度に藝術に絢爛たる華を開きたる鎌倉文化は、實に我湘南の地に發祥し、相武一帯は其の中心を爲す。斯道に志す者來りて山川に昔を語り古跡に當時を偲ぶ、其の多きを見るや洵に所以ありと謂ふべきか。而して彼の新編相模・武藏兩風土記は是等の史實を盛りて餘蘊なく絶好の資料たるは言を要せざる所にして、天保年間官儒の編修に係り明治初年之が出版を見たるも、惜らくは部數少く且つ烏回兔轉するに従ひ今や百金を投ずるも尙ほ得難しとす。



神奈川縣學生協會茲に見る所あり、大禮記念事業として郷土史の刊行を企て相武史料刊行會を興し、爾來三星霜幾多の難關に屈せず撓まず克く新編相武風土記全卷の刊行を了するに至る。惟ふに該風土記は獨り本縣文化に裨益するのみならず延て本邦文化の爲に貢獻すること洵に大なるものあるを信じて疑はず、茲に關係役員諸氏の勞を多とし蕪言を陳ね以て辯ず。

昭和五年十一月

神奈川縣知事 山縣治郎

誌

昭和三年十一月十日、曠古ノ大禮ノ舉行セラル、ヤ、朝野ヲ問ハズ、都鄙ヲ論ゼズ、奉賀奉祝ノ意ヲ表シ、府縣自治團體ヲ始メ各種ノ公私團體ハ、一齊ニ起テ之ガ千載ノ記念ニ資スベク、銘々ノ事業ヲ企畫セリ。

此ノ秋ニ當リ、我ガ神奈川縣學生協會モ亦、有意義ナル事業ヲ以テ盛典ヲ記念センコトヲ企圖シ、許多ノ參考資料ヲ集メテ縣史編纂ノ成案ヲ得、代表委員之ヲ携ヘテ會長井上篤太郎氏ヲ訪ヒ、該企畫ノ趣意ヲ縷述シテ、之ガ承認竝ニ其ノ著手ニ當リテ生ルベキ「相武史料刊行會」ノ會長就任ヲ切願セルニ、氏ハ其ノ趣意ヲ賛シテ、之ヲ快諾セラレタリ。

茲ニ會長ノ決裁ヲ經テ、事業部ヲ刊行、庶務及會計ニ分チ、各主任及委員ノ部屬ヲ定メ、一面在京神奈川人會、神奈川縣廳其ノ他文學博士沼田頼輔氏竝



ニ中山毎吉氏ヲ始メ、在京在郷ノ有志ノ後援ヲ得テ、漸ク本事業ノ陣容ヲ整フルニ至レリ。

抑モ此ノ「縣史編纂」ノ事業タル、名ハ縣史編纂ト稱スルモ、新ニ史料ヲ蒐集シテ之ヲ編修スルニハアラズ。幸ナル哉。我ガ神奈川縣ニハ、天保年間、徳川幕府ノ編纂ニ係ル「新編相模風土記稿」及「新編武藏風土記稿」ナル珍重ニシテ、而モ權威アル縣史關係ノ文獻アルアリ。由テ前者ニ加フルニ後者ノ一部ヲ以テシ、之ヲ全四卷三七七八頁ニ按配編修シテ、江湖ニ頒タントセルモノナリ。

而シテ、當初刊行期間ハ、昭和四年四月ヨリ十月迄、隔月ニ逐次刊行スル豫定ナリシニ、意外ノ難事業ノ爲メ所期ニ反シ、昭和四年七月ニ第一卷ヲ、同十二月ニ第二卷ヲ、昭和五年三月ニ第三卷ヲ出シ、而シテ今ヤ第四卷ノ刊行ヲ見ルニ至レリ。

由來郷土史刊行ノ業タル、研究ノ對象、資料ノ蒐集、總テ地域的ニ限界アリ、從テ斯カル事業ノ遂行ヲ期セントセバ、必然、日子、勞力、費用等ノ採算ヲ度外ニ措カザルベカラズ。近時刊行ヲ見タル滋賀縣史、福井縣史、静岡縣史等ハ、孰レモ府縣其ノ他地方團體ノ公力ニ須チシニ拘ラズ、尙且幾多ノ難關ニ逢著セリト言フ。斯カル事實ハ、能ク這般ノ真相ヲ物語リテ餘リアルベシ。

然ルニ相武史料刊行會ハ、神奈川縣學生協會ヲ中心トセル私的團體ニ過ギズ、而モ克ク此ノ難事業ヲ完了シ得タル、偏ニ井上會長ノ絶大ナル犠牲ヲ惜シマレザリシニ因ル。會長ノ誠意ニ基ク鞭撻ハ、終始我等ノ感激トナリ、刺戟トナリ、戮力協心、三星霜ノ難關ヲ突破シテ、此ノ成果ヲ見ルニ至レリ。

願レバ本事業ハ會長ノ熱誠ト會員諸賢ノ御指導御後援ニヨリテ完成セルモノ、我等ハ唯其ノ局ニ當リテ纔ニ責ヲ果セルニ過ギズ、今事業ノ完了ニ際シ、謹デ滿腔ノ謝意ヲ表スルト共ニ、聊カ本事業ノ顛末ヲ誌シテ記念トナ



誌

昭和五年十一月三日

四

鈴木俊行  
 安東正臣  
 井上貞藏  
 藤牧玄雄  
 倉田八十八  
 昭和三年度 神奈川縣學生協會委員  
 昭和四年度 神奈川縣學生協會委員  
 昭和五年度 神奈川縣學生協會委員

# 新編 武藏風土記

(橋樹郡 久良岐郡 都筑郡)

## 目次

卷百二十六	橋樹郡 一	郡圖 總說	一頁
卷百二十七	同 二	金程村。細山村。菅村。高石村。	九
卷百二十八	同 三	上菅生村。下菅生村。天真寺新田。五段田村。登戸村。	二七
卷百二十九	同 四	宿河原村。長尾村。上作延村。下作延村。堰村。久地村。二子村。溝口村。	五二
卷百三十	同 五	久本村。末長村。平村。土橋村。馬絹村。有間村。梶ヶ谷村。上野川村。下野川村。	六
卷百三十一	同 六	久末村。清澤村。子母口村。明津村。蟹ヶ谷	七

目次

一



村。井田村。岩川村。今井村。新城村。 . . . . . 九  
卷百三十二 同 七 新作村。坂戸村。諏訪河原村。北見方村。

宮内村。小杉村。上平間村。上丸子村。中丸子村。 . . . . . 一九  
卷百三十三 同 八 上小田中村。下小田中村。荻宿村。木月村。

鹿島田村。市坪村。南加瀬村。北加瀬村。矢上村。上駒林村。中駒林  
村。下駒林町。駒ヶ橋村。 . . . . . 二四三

卷百三十四 同 九 南綱島村。北綱島村。大曾根村。樽村。上  
駒岡村。中駒岡村。下駒岡村。箕輪村。上末吉村。下末吉村。鶴見村。  
生麥村。 . . . . . 二七三

卷百三十五 同 十 獅子ヶ谷村。古師岡村。新師岡村。西寺尾村。  
東寺尾村。北寺尾村。東子安村。西子安村。新宿村。馬場村。菊名村。  
大豆戸村。太尾村。篠原村。 . . . . . 二〇四

卷百三十六 同 十一 岸根村。三枚橋村。鳥山村。小机村。羽  
澤村。和田村。坂本村。佛向村。 . . . . . 二六

卷百三十七 同 十二 下星川村。保土ヶ谷宿「保土ヶ谷町。神戸町。  
岩間町。帷子町。」芝生村。 . . . . . 二六四

卷百三十八 同 十三 神奈川宿「青木町。神奈川町。」六角橋村。  
神太寺村。白旗村。片倉村。下菅田村。 . . . . . 二八一

卷百三十九 同 十四 市場村。菅澤村。潮田村。下新田。渡田  
村。小田村。大島村。池上新田。堀之内村。大師河原村。川中島村。  
稻荷新田。中島村。 . . . . . 三三

卷百四十 同 十五 川崎宿「小土呂町。砂子町。新宿町。久根崎  
町。」南河原村。戸手村。小向村。古川村。矢向村。江ヶ崎村。小倉村。  
塚越村。下平間村。 . . . . . 三四三

卷百四十一 久良岐郡一 郡圖 總説 . . . . . 三七三

卷百四十二 同 二 社家分村。寺分村。平分村。洲崎村。泥龜  
目次



新田廢金澤新田。町屋村。

三八一

卷百四十三 同

三 寺前村。

四〇六

卷百四十四 同

四 谷津村。柴村。富岡村。宿村。坂本村。赤

赤

井村。水取澤村。宮ヶ谷村。金井村。宮下村。吉原村。 . . . . . 四三二

卷百四十五 同

五 本郷村。北方村。横濱村。中村。堀之内村。

四三二

根岸村。戸部村。尾張屋新田。

四七四

卷百四十六 同

六 瀧頭村。磯子村。岡村。吉田新田。太田村。

四九七

井戸ヶ谷村。蒔田村。

四九七

卷百四十七 同

七 上大岡村。下大岡村。森公田村。森雜色村。

五二五

森中原村。杉田村。中里村。矢部野村。峯村。栗木村。田中村。 . . . . . 五二五

卷百四十八 同

八 雜色村。松本村。關村。最戸村。久保村。

五二五

別所村。中里村。弘明寺村。永田村。引越村。 . . . . . 五四五

卷百四十九 都筑郡 一 郡圖 總說

五七九

卷百五十 同

二 今井村。今井新田。市野澤村。今宿村。鶴ヶ

鶴ヶ

峯新田今宿村枝郷。

白根村。川島村。三段田村。小高新田。岡津新田。 . . . . . 五八四

卷百五十一 同

三 二俣川村。密經新田。上星川村。猿山村。

六〇一

中山村。榎下村。臺村榎下村枝郷。十日市場村。西八朔村。北八朔村。 . . . . . 六〇一

卷百五十二 同

四 青砥村。本郷村。川向村。東方村。折本村。

六三五

大熊村。新羽村。吉田村。 . . . . . 六三五

卷百五十三 同

五 高田村。牛久保村。山田村。茅ヶ崎村。池邊

池邊

村。佐江戸村。恩田村。 . . . . . 六五三

卷百五十四 同

六 黒須田村。萬福寺村。古澤村。黒川村。栗

栗

木村。伍力田村。片平村。上麻生村。下麻生村。王禪寺村。上谷本村。

下谷本村。 . . . . . 六八三

卷百五十五 同

七 上菅田村。寺山村。鴨居村。川和村。荏田

荏田

村。勝田村。大棚村。上鐵村。中鐵村。下鐵村。石川村。早野村。奈



良村。新井新田。 . . . . . 七〇一

卷百五十六 同 八 久保村。市尾村。小山村。成合村。寺家村。

鴨志田村。長津田村。大場村。岡上村。川井村。上川井村。下川井村。

坂倉新田。 . . . . . 七三〇

圖版目次

一 正保年中改定圖 . . . . . 二一三

二 元祿年中改定圖 . . . . . 二一三

三 土器 . . . . . 一五

四 古鏡 . . . . . 六三

五 八幡社鰐口 . . . . . 一九

六 獅子木像青玉石及曲玉 . . . . . 一三〇

七 杉山社別當所所藏品 . . . . . 一九九

八 熊野社 . . . . . 二〇九

九 松蔭寺古圖 . . . . . 二一九

十 不動尊 . . . . . 二三四

十一 小机城蹟 . . . . . 二五五

十二 輕井澤眺望 . . . . . 二八三

十三 豐顯寺 . . . . . 二九八

十四 正保年中改定圖 . . . . . 三七四—三七五

十五 元祿年中改定圖 . . . . . 三七四—三七五

十六 四望亭眺望 . . . . . 三六五

十七 棟札 . . . . . 三六七

十八 獅子頭及拔頭面 . . . . . 三八八

十九 拔頭面裏及陵玉面 . . . . . 三八九

二十 長刀 . . . . . 三九四

二十一 稱名寺古圖 . . . . . 四〇八

二十二 稱名寺境内(一) . . . . . 四一〇

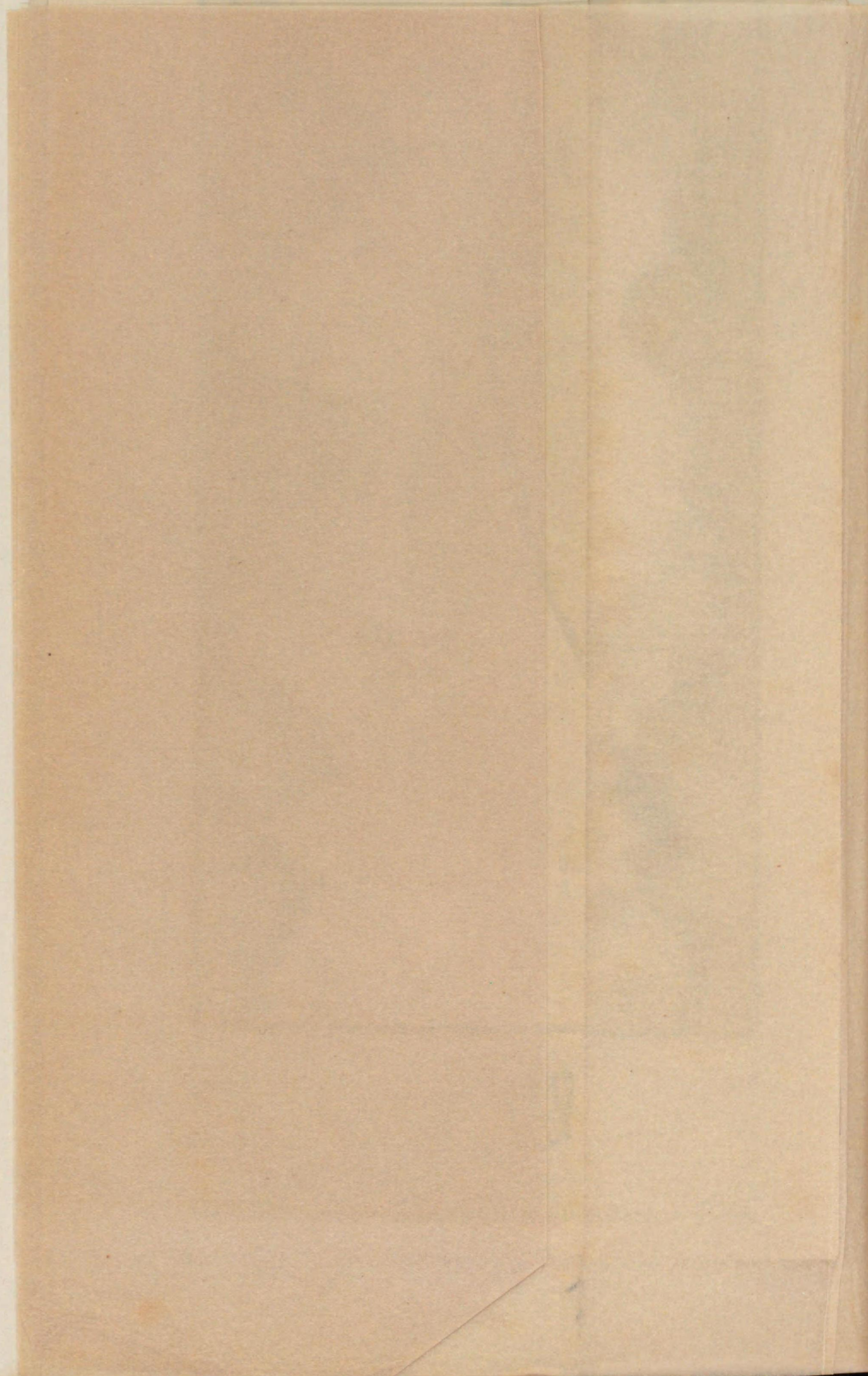
二十三 同 (二) . . . . . 四一一



二十四	能見堂	四四四
二十五	鞍	四五五
二十六	谷津村境眺望	四六一
二十七	十二天社地	四七五
二十八	辨天社地眺望	四八〇
二十九	寶生寺境内	四八三
三十	蒔田村館蹟	五二四
三十一	淺間神社眺望	五二一
三十二	杉田村梅林	五二七
三十三	長野山	五四〇
三十四	長野山眺望	五四一
三十五	妙蓮寺木像	五四四
三十六	弘明寺觀音堂	五六八
三十七	弘明寺扁額	五六九
三十八	鰐口	五六九

三十九	花瓶	五六九
四十	山王山眺望	五七三
四十一	正保年中改定圖	五八〇—五八一
四十二	元祿年中改定圖	五八〇—五八一
四十三	鞍	六四一
四十四	古墳出土品(一)	六四七
四十五	同 (二)	六四七
四十六	王禪寺	六九四
四十七	杉山社鰐口	七一七
四十八	古器類(一)	七四五
四十九	同 (二)	七四五





三十一歲  
 三十二歲  
 三十三歲  
 三十四歲  
 三十五歲  
 三十六歲  
 三十七歲  
 三十八歲  
 三十九歲  
 四十歲  
 四十一歲  
 四十二歲  
 四十三歲  
 四十四歲  
 四十五歲  
 四十六歲  
 四十七歲  
 四十八歲  
 四十九歲  
 五十歲  
 五十一歲  
 五十二歲  
 五十三歲  
 五十四歲  
 五十五歲  
 五十六歲  
 五十七歲  
 五十八歲  
 五十九歲  
 六十歲  
 六十一歲  
 六十二歲  
 六十三歲  
 六十四歲  
 六十五歲  
 六十六歲  
 六十七歲  
 六十八歲  
 六十九歲  
 七十歲  
 七十一歲  
 七十二歲  
 七十三歲  
 七十四歲  
 七十五歲  
 七十六歲  
 七十七歲  
 七十八歲  
 七十九歲  
 八十歲  
 八十一歲  
 八十二歲  
 八十三歲  
 八十四歲  
 八十五歲  
 八十六歲  
 八十七歲  
 八十八歲  
 八十九歲  
 九十歲  
 九十一歲  
 九十二歲  
 九十三歲  
 九十四歲  
 九十五歲  
 九十六歲  
 九十七歲  
 九十八歲  
 九十九歲  
 一百歲





吉田新田開墾二百七十年記念

Table of contents or index on the right page, containing vertical columns of text and numbers.

四十一	...	...	...
四十二	...	...	...
四十三	...	...	...
四十四	...	...	...
四十五	...	...	...
四十六	...	...	...
四十七	...	...	...
四十八	...	...	...
四十九	...	...	...
五十	...	...	...



# 吉田新田埋立以前橫濱圖







著作権登録済 吉田家蔵版

吉田新田開墾二百七十年記念



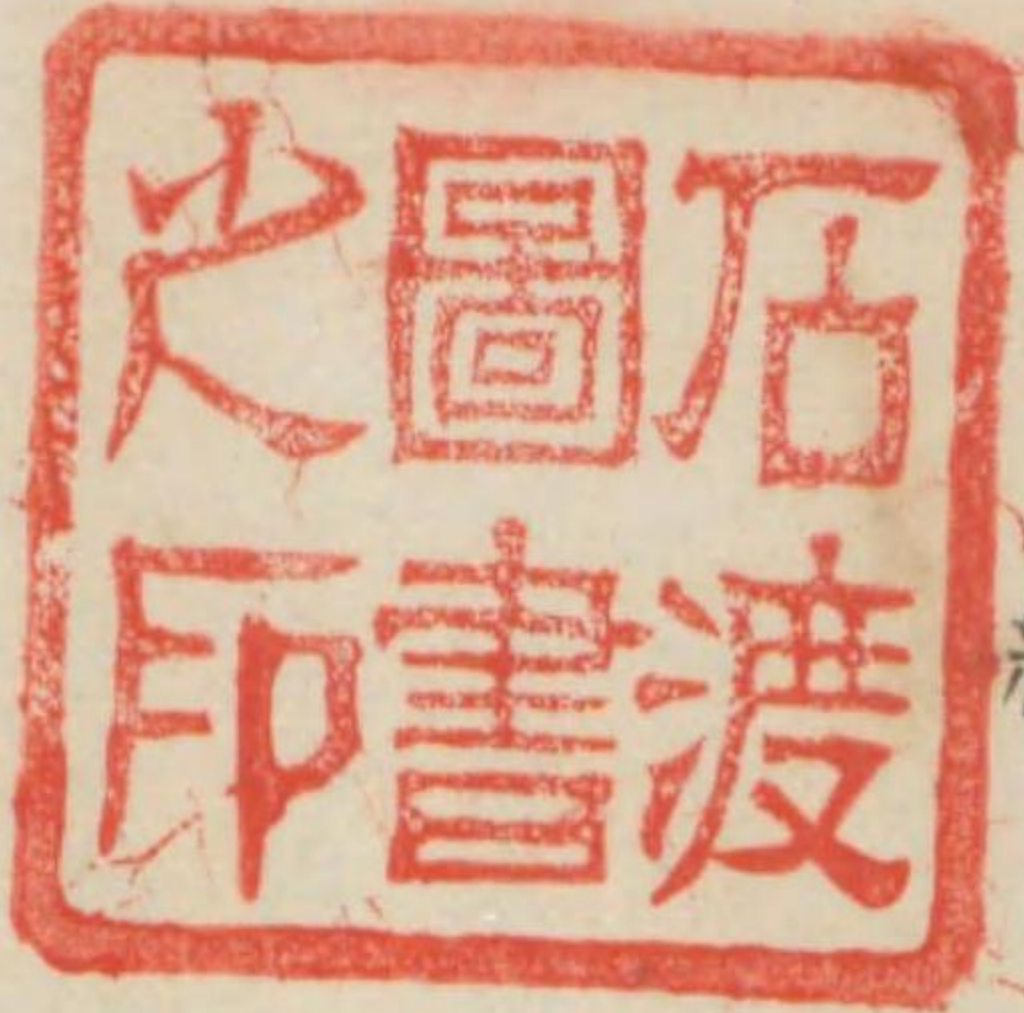
新編

武藏風土記

(橘樹郡 都筑郡 久良岐郡)

卷百二十六 村里部

橘樹郡 一 郡圖 總説



(稿本の卷数は卷五十八なり。今神奈川県として特に複製するに當り改めて相模風土記の卷數に繼續して卷百二十六としたり。以下これに倣へり。)

橘樹郡は國の中央より南の方にて多磨郡よりは東南に續けり。郡名の起りは其正しきことを聞かず。古事記及景行紀等に載せたる倭建命東征の時、相武國より船を浮べ給ひしに海中にして船の進まざりしかば、後の弟橘媛海中に入給ひしにより、命の船忽進むことを得し條を證として、當郡にかの弟橘媛の墓ある故に橘を以て地名とせしならんと云ふ説あり。今按ずるに郡中子母口村立花の神社は、弟橘媛を祭れるなりと云ふときは、橘媛の墓といへるもの、もし是なりといはんか。今彼社傳を尋ぬるに更に證とすべきこともあらざれば、是等のことは今より知るべからず。其正しく橘花の地名の正史にあらはれしは、安閑紀を始とすべし。安閑天皇元年十二月壬午の條に、武藏國造笠原直使主が國家の爲に、當國の内横渚、橘花、多氷、倉櫛の四所に屯倉を置きしことあり。此橘花といふもの、即この郡ならん。又萬葉集に天平勝寶七歲二月二十日、武藏國部領防人使掾正六位上安曇宿禰三國が進れる歌十二首の内に、橘樹郡上丁物部眞根及び妻椋椅部弟女が詠ぜし所の歌を載す。橘樹の郡名爰に初て見ゆ。又續日本紀稱



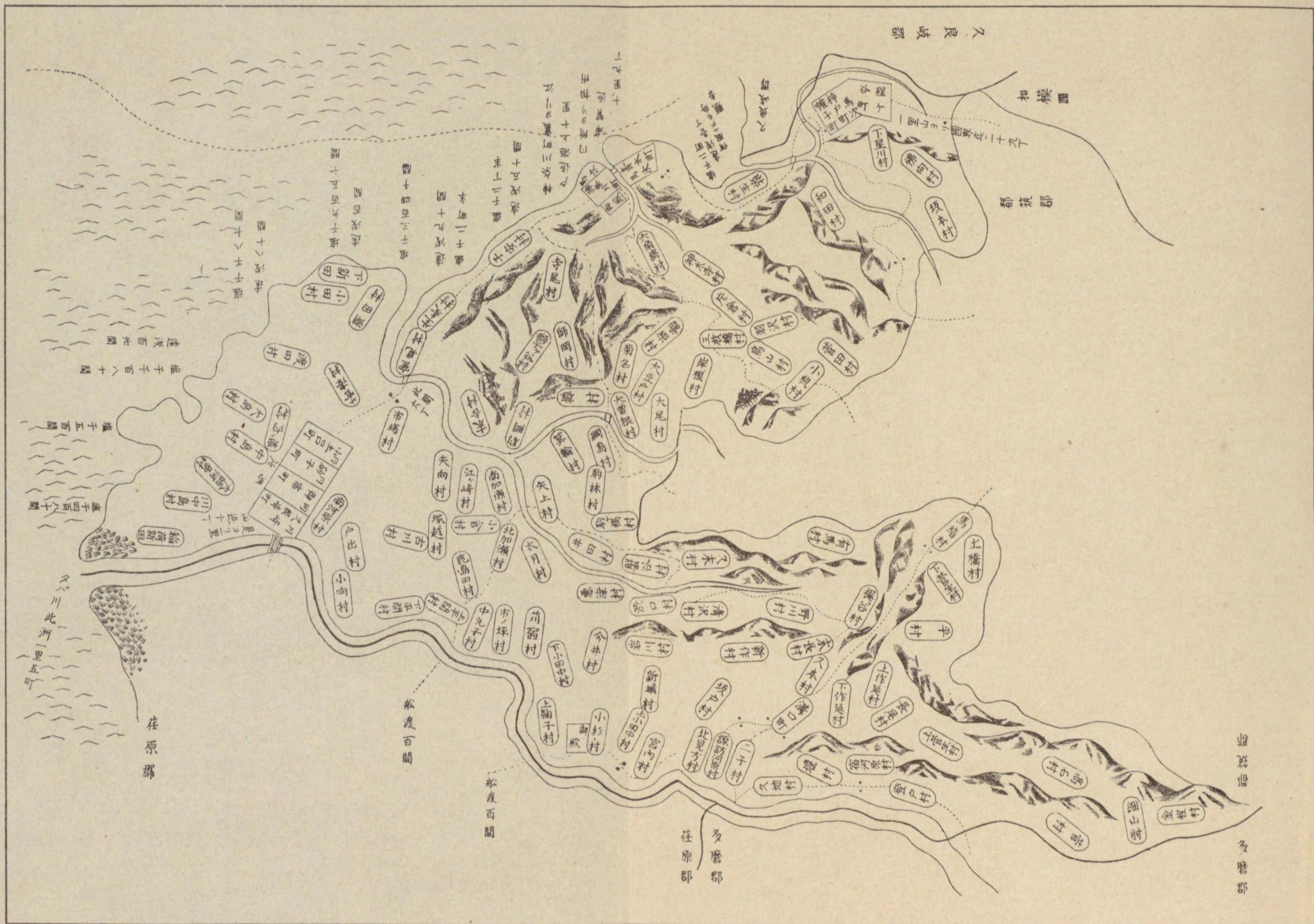
徳天皇神護景雲二年六月癸巳、武藏國橋樹郡人飛鳥部吉志五百國が、久良郡にて白雉を獲て獻ぜし事を記せり。以上の文によれば、文字も古は橋花とかきしを、元明紀和銅六年五月の條に載せし郡郷の名には、好字を著すべきの詔ありし時などより橋樹の二字を用ゆるならん。されど唱は古きによりてかはらざりしなり。類聚國史貞觀十四年、當郡節婦のことを載せたる條にも、橋樹郡としるせり。和名抄郡名の部に、橋樹の二字の訓を、太知波奈と註せり。後世或は立花としるせるものは誤なり。其地の界域は中古より甚だ變革せり。古のさまは今よりしるべからずといへども、試に和名抄に載る所の郷名を以て今の地理を察するに、その郡中甚せまかりしと見ゆ。今の都筑郡高田村の邊より多磨川の涯に至り、夫より川崎宿の邊を限として、南の方は今の神奈川の邊にて久良岐郡に接せり。されば古代は東西も南北も、纔に三里にすぎざる小郡にて、南西のかた相模國と境を接せざりしなるべし。さてこそ和名抄に郡をついづること久良を初として都筑、多磨に及び次に當郡を載せしも、其次敍を得しと云ふべし。遙の後永祿の頃までも久良岐の地は、神奈川のあたりまで及びしならん。小田原家人所領役帳に今の神奈川宿の内、青木町及び寺尾村などは、皆久良岐郡の地として記せり。御打入の後正保圖のなりし頃は、はや青木町寺尾等の地も當郡に入れり。夫も保土ヶ谷の内岩間町の地は、やはり昔のまゝに久良岐郡に屬せり。元祿年中境界を改められてより、ほゞ今の如くにはなりたるならん。今見る所の界域の大様は、北の方多磨川を界として、荏原多磨の二郡に隣れり。その里數は、西北の隅金程村より東の方稻荷新田の出崎まで凡七八里もあるべし。東南はすべて海にそひ、南のはては久良岐郡及相州鎌倉郡に接せり。その里數六里餘なり。されど鎌倉郡にまじはれる所に至りては、地形ことにせばまりて、わづかに東海



徳天皇神護景雲二年六月癸巳、武藏國橋樹郡人飛鳥部吉志五百國が、久良郡にて白雉を獲て獻せし事を記せり。以上の文によれば、文字も古は橋花とかきしを、元明紀和銅六年五月の條に載せし郡郷の名には、好字を著すべきの詔ありし時などより橋樹の二字を用ゆるならん。されど唱は古きによりてかはらざりしなり。類聚國史貞觀十四年、當郡節婦のことを載せたる條にも、橋樹郡としるせり。和名抄郡名の部に、橋樹の二字の訓を、太知波奈と註せり。後世或は立花としるせるものは誤なり。其地の界域は中古より甚だ變革せり。古のさまは今よりしるべからずといへども、試に和名抄に載る所の郷名を以て今の地理を察するに、その郡中甚せまかりしと見ゆ。今の都筑郡高田村の邊より多磨川の涯に至り、夫より川崎宿の邊を限として、南の方は今の神奈川の邊にて久良岐郡に接せり。されば古代は東西も南北も、纔に三里にすぎざる小郡にて、南西のかた相模國と境を接せざりしなるべし。さてこそ和名抄に郡をついづること久良を初として都筑、多磨に及び次に當郡を載せしも、其次敘を得しと云ふべし。遙の後永祿の頃までも久良岐の地は、神奈川のあたりまで及びしならん。小田原家人所領役帳に今の神奈川宿の内、青木町及び寺尾村などは、皆久良岐郡の地として記せり。御打入の後正保圖のなりし頃は、はや青木町寺尾等の地も當郡に入れり。夫も保土ヶ谷の内岩間町の地は、やはり昔のまゝに久良岐郡に屬せり。元祿年中境界を改められてより、ほゞ今の如くにはなりたるならん。今見る所の界域の大様は、北の方多磨川を界として、荏原多磨の二郡に隣れり。その里數は、西北の隅金程村より東の方稻荷新田の出崎まで凡七八里もあるべし。東南はすべて海にそひ、南のはては久良岐郡及相州鎌倉郡に接せり。その里數六里餘なり。されど鎌倉郡にまじはれる所に至りては、地形ことにせばまりて、わづかに東海

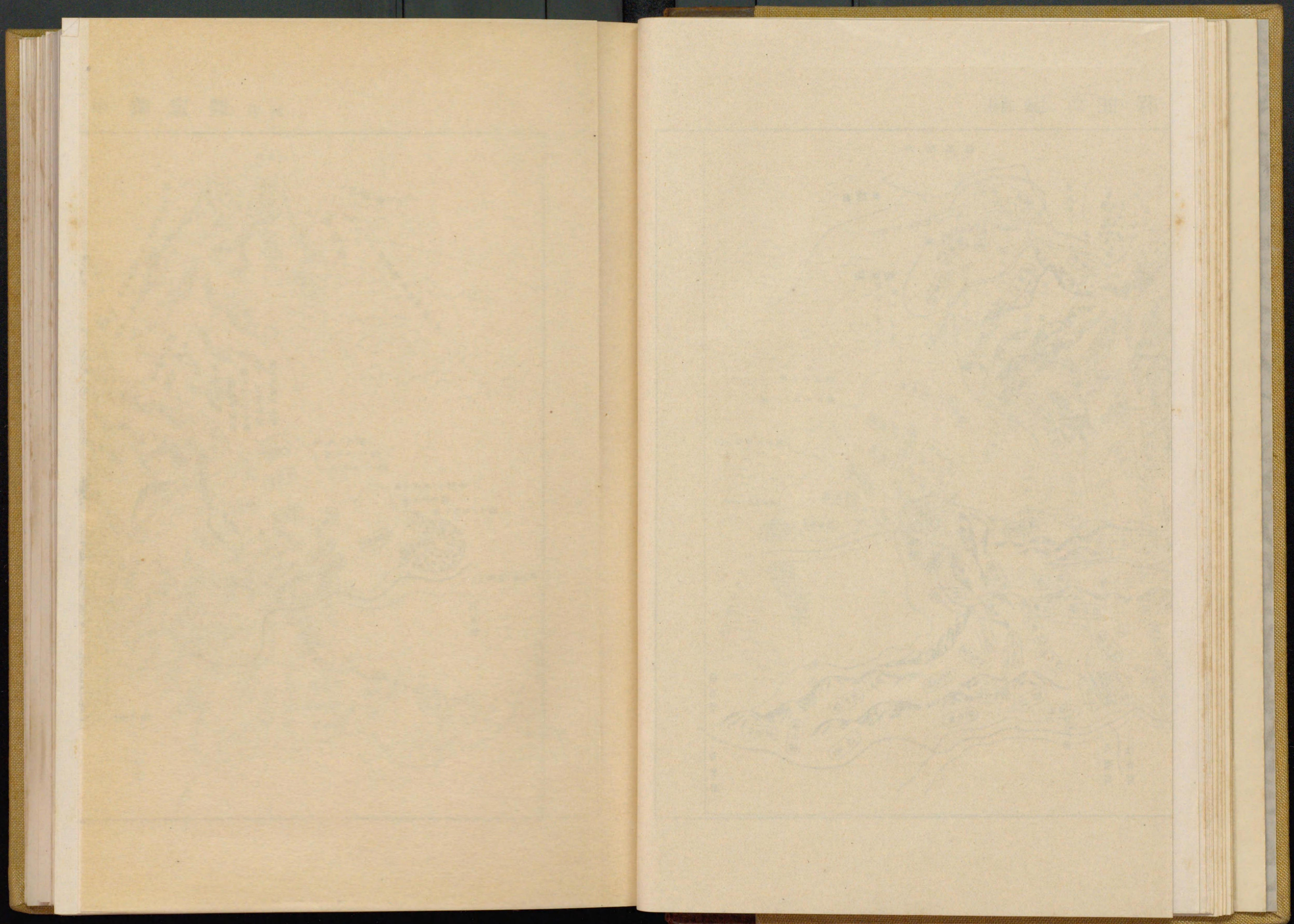


正保年中改定圖 一版圖

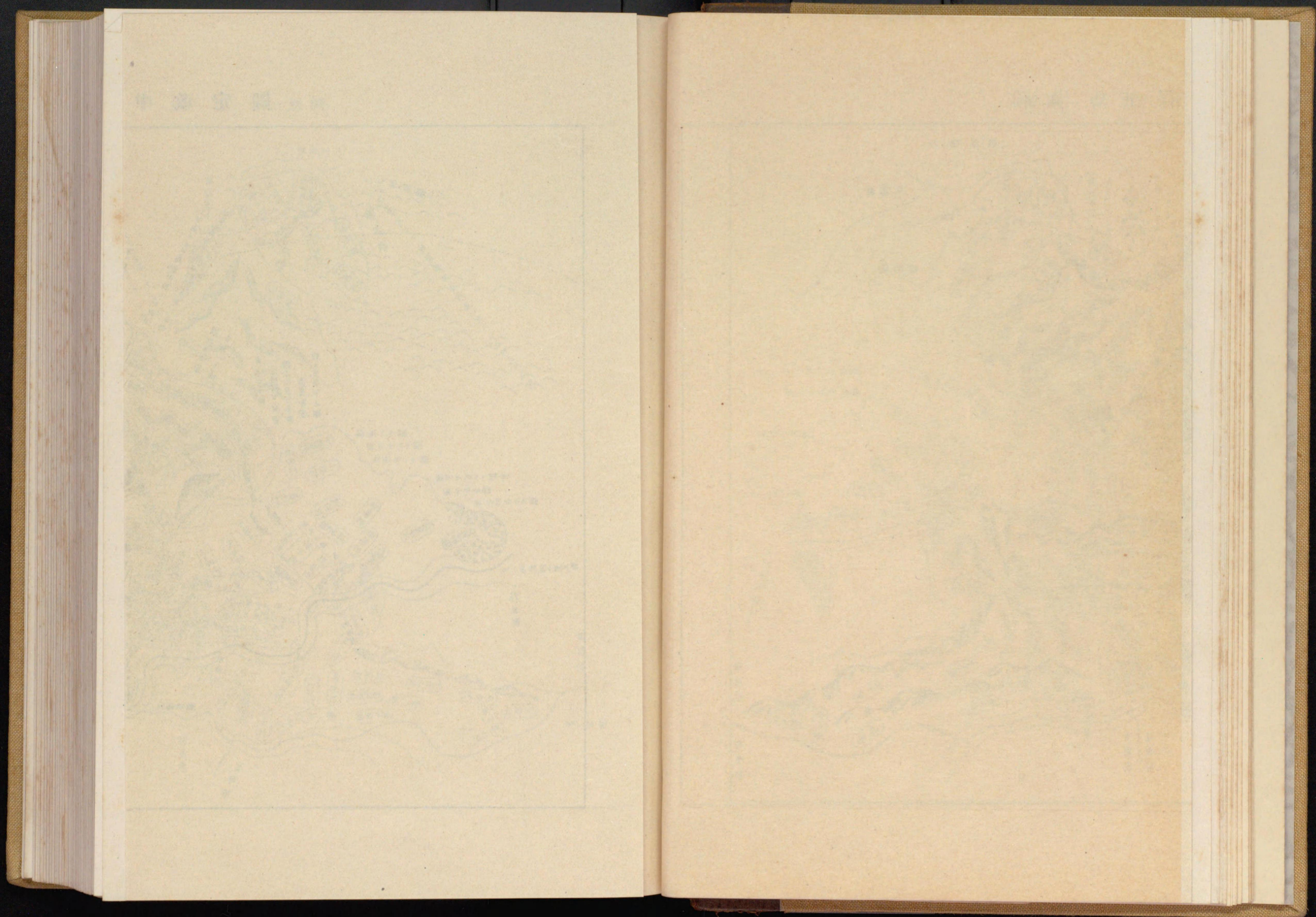


後、畿に三里にすぎざる小郡にて、南西のかた相模國と境を接せざりしなるべし。さてこそ和名抄に郡  
 をついでること久良岐を初として都筑、多磨に及び次に當郡を載せしも、其次彼を得しと云ふべし。蓋の  
 後永祿の頃までも久良岐の地は、神奈川のあたりまで及びしならん。小田原家人所領役帳に今の神奈川  
 宿の内、青木町及び寺尾村などは、皆久良岐郡の地として記せり。御打入の後正保圖のなりし頃は、は  
 や青木町寺尾等の地も當郡に入れり。夫も保土ヶ谷の内岩間町の地は、やはり昔のまゝに久良岐郡に屬  
 せり。元祿年中境界を改められてより、ほゞ今の如くにはなりたるならん。今見る所の界域の大様は、  
 北の方多磨川を界として、荏原多磨の二郡に隣れり。その里数は、西北の隅金程村より東の方稻荷新田  
 の出崎まで凡七八里もあるべし。東南はすべて海にそひ、南のはては久良岐郡及相州鎌倉郡に接せり。  
 その里數六里餘なり。されど鎌倉郡にまじはれる所に至りては、地形ことにせばまりて、わづかに東海















道往還の邊にすぎず。其所に地藏の石像一軀あり。世に境の地藏と呼べり。これ武相の界なればなり。夫より郡の西邊は、すべて都筑郡に隣り、その界屈曲してかけ入りたるが如し。彼界より金程村に至るの里數八里にあまれり。是今の地形、古とかはりたる所の大様なり。その餘はさせる變遷も見えざれば別に今の圖をば載す。たゞ海岸の地は少く新開の處もあるべけれど、其村によりて見るべし。郡中東海道は往還かゝれり。荏原郡六郷より入て、相州鎌倉郡に達す。その間四里の行程なり。又同國中原街道とて、一條の往還あり。東海道より西にあたれり。土地はすべて西の方に山々連りて、北より東南へは山の根を廻りて平地なり。その邊は自らひくければ水田も多し。土性は多く眞土なり。また山にそひたる方は、陸田山林多けれど山谷の間、纔に平らかなる地によりて水をたへ、水田を耕す所もあり。風俗は大抵近郡にことなることなし。されど都筑郡によりたる方は、山あひの寒村多ければ人民質樸の風あり。

#### 郷名

和名抄所載四並驛家 高田多加太。今この郷名なし。按ずるに隣郡都筑郡に高田村あり。郡中久末、駒ヶ橋等の村に隣れる地なり。これ高田郷の名の存せるならん。和名抄郡名の次第は多磨郡の次に當郡を載す。この次敘により郷名の次第をなして、多磨郡勢多郷の次に當郡高田郷をついづる時は、今の地理を以て考ふるに、荏原郡瀬田村は多磨川へよりたる所にして、しかも多磨郡の界に接したる所なれば、これ古の勢多郷の遺名なるべし。然らば郡中坂戸、岩川のあたりまでも高田郷の中にて、そのかみ勢多郷とは多磨川を隔て、隣りしならん。又和名抄郷名の條によれば多磨郡を始めとして、次に都筑、



久良をしるし、その次に當郡を載す。是は多磨郡は國府のある所なれば改めて始にしるせしが、この次第を以て考ふれば、久良郡良椅郷の次に高田郷あり。久良郡の地はそのかみ神奈川の邊までもかゝりしなれば、これもまた次第を失はざるに似たり。橘樹多知波奈。この郷は今その地をしらず。子母口村に立花社あるを以て考ふるに、恐くは子母口村の邊を云ふなるべし。地理もまた久末村の邊なれば、古の高田郷に接したる所とおぼしきものなり。されど正しき事をしらず。御宅美也介。これも今村名にも残らざれば、いづれの地と云ふ事をしらず。今按ずるに安閑記に載せたる國造笠原直使主が置ける立花屯倉のありし地なるべし。屯倉の二字を日本紀に彌夜氣と註せり。縣守安加多毛利。これもその在所をしらず。又考ふべきたよりなし。驛家。これもその所をしらず。兵部式諸國驛傳馬の條を閱るに、當郡小高驛馬十匹、傳馬五匹とあり。按ずるにこれと和名抄に載する驛家と同所なるにや。されど今小高と云ふ地名なし。もしくは小田村、小田中村など小高の訛りたるなるか、この地大抵都筑郡店屋驛と荏原郡大井驛との中のほどにあり。以上和名抄に載する所なり。

**中古所唱 小澤** 小澤郷の名は東鑑元久二年十一月十四日の條に、稻毛入道が遺領武藏國小澤郷と見えたり。今當郡の西北の界にある金程、細山、菅の三村及び多磨郡坂濱村に跨りて古は小澤郷或は小澤庄又は領とも唱へしと傳ふ。猶各村の條照し見るべし。神奈川 文永年中に書せし鶴岡八幡宮の文書に稻目、神奈河兩郷と云へり。稻目は今上菅生村の小名に残り、神奈川郷の唱は下菅田村一村のみ土人云傳へり。小机 東鑑曆仁二年二月十四日の條に、武藏國小机郷鳥山等の荒野を水田に開發すべきの由、大夫尉泰綱に仰らるゝとあり。舊くより小机郷の唱へあることしるべし。今この郷を唱ふるは

僅に小机の一村のみなれど、昔は此郷に屬する村百八ヶ村ありし由、土人云傳ふ。おもふに中古以來、小机庄を以て唱へし故、この郷名も自からなきが如くなりしにや。猶庄名の條合せ見るべし。菅生上菅生村、高石村の二村のみ昔此郷名を唱へしと云ふ。子安 生麥村のみ此郷名を唱ふ。

## 庄名

**中古所唱 丸子** 今多磨川の邊に、上丸子、中丸子の二村あり。又對岸荏原郡に下丸子村あり。此邊なるべし。東鑑治承四年十一月十日の條に、賴朝武藏國丸子庄を葛西三郎清重に賜ひしこと見えたり。今は潮田村のみ昔、此庄に屬せしと云ふ。師岡 此の師岡のことは久良岐郡郷名の條に辨せし如く、此邊古は諸岡郷と唱へて、久良岐郡に屬せし地なるべし。此師岡の内に庄園を置れしは、いつの頃より始りしにや、未だ古書には所見なし。恐くは師岡郷といふべきを、誤りて庄名とせしなるべし。其詳なる事は久良岐郡の卷について見るべし。今郡内昔、師岡庄に屬せしと云ふもの三村あり。師岡郷に屬せしと云ふもの二村あり。稻毛 この庄は古き唱と見えて鎌倉右大將賴朝の頃、稻毛三郎重成と聞えて、在名を稱せしは世に知る所なり。この三郎重成は當國七黨の内、小山田別當有重が子にして、其弟榛谷四郎重朝と同一く、父の讓を受けて此邊の地をわかち領せしと見ゆ。猶榛谷庄の條と照し見るべし。今稻毛領の内と號する村々は、多くこの庄に屬せし地なるべし。正平七年の下文に、稻毛庄の内坂山郷とあり。今の坂戸村これなり。又稻毛領宮内村春日社にかけたる應永十年の鰐口に、稻毛本庄と記せり。又至徳元年の頃の文書には、稻毛新庄とあり。是によれば、其頃は本庄、新庄の別もありしと見ゆれど、是等の事は今よりいかにとも分ち難し。又小田原家人役帳にも、此庄に屬する地名、すべて十七村を載



す。太平記に江戸遠江守堯寛、同下野守能登が領地、稻毛十二郷を闕所せしこと見ゆ。又小田原記に永祿十二年、武田信玄當國へ働のとき、稻毛十六郷を追捕すとあり。この郷と云ふも、例の村の字にかへし郷なるべし。領名行はれてよりこのかた、庄名は自から廢せしなるべし。今郡内、昔、此庄に屬せしと云ふもの十四村、今も稻毛庄を唱ふるもの二村、又明津村は古へ稻毛新庄と稱せし由云傳ふ。小机此庄名は當郡はもとより都筑郡にもかゝり、あまたの村々にて唱ふる所なり。是等は昔、小机城下に屬せし村々にや、小机城は鎌倉公方の時よりありし事、大草紙等の書に見ゆ。その後小田原北條家分國の頃、笠原越前守及び北條氏の一族、左衛門佐氏堯などの居城なりしなり。小田原家人役帳に、小机某地と記せしもの二十村餘あり。是等を以て當時此庄の廣き事を知るべし。今郡内、昔、此庄に屬せしと云ふもの十一村、小机郷と云ふもの一村、小机保と云ふもの一村、又今も小机庄を稱するもの四村あり。榛谷 保土ヶ谷宿の邊、五六村の地此庄にかゝれり。その地名の起りは隣郡都筑の内、二股川村の小名に、榛ヶ谷と云ふ所あり。それより庄名となりしなるべし。故にその詳なることは、已に都筑郡の卷に出したれば爰には略せり。御厨 保土ヶ谷宿の内、岩間町の鎮守神明社に納むる天文二十四年にしるせる縁起に、榛谷御厨庄とあり。又元和五年、彼社造營の棟札に、武藏國榛谷御厨八郷ともあり。是によれば、御厨の所は全く榛谷の庄内なりしと見ゆ。今此庄名を唱ふるもの二村、御厨郷と呼ぶもの一村あり。

領名

今所唱

稻毛

五十七村。

神奈川

四十村。

小机

七村。

川崎

二十六村。

村數 百三十村。

右件の村は、今現在の數なり。正保年間の改に百十三村。元祿十五年の改には十一村を増して、百二十四村となれり。其後新墾の地出來せしかば、今の村數に及べり。其變革は村々の條下に詳なり。

山川

向ヶ岡 郡の西にかゝれり。委しき事はなほ多磨郡に辨ず。こゝに載する所も、土人の説によれば數村に及べり。其村々は西の方金程、細山、菅、高石、菅生、長尾、作延、久本、末長の九村なり。是もたゞ傳ふる所にして、今も岡のつらなる故にかぞへ來れば、是等の村なるべしと云ふのみにして正しき證あるにはあらざるべし。しばらく爰に出せり。多磨川 郡の北の方を流る。今川の中央を當郡と荏原、多磨二郡の界と定む。其水源は郡の西北の隅、登戸村より流れ來りて次第に屈曲し、稻荷新田に至り海に沃げり。此川も昔より洪水の爲に、兩岸崖崩して變遷あまた、びに及びしと見ゆれば、古き世のさまは、詳にするによしなし。正保の頃よりの變革は、圖に載する如し。今見る所は河原をこめていはば、川の幅凡三町許にも及ぶべし。常に水の流るゝ所は三十間あまりなり。されど稻荷新田に至りては、その水路尤廣くして、二百五十間ほどなり。すべて當郡の境を流ること、長さ四里にたらず。この間に平間、丸子、二子、登戸、矢ノ口等五ヶ所の渡場あり。鶴見川 西の方太尾村より來り、郡の中央を流れ、東の方生麥村、潮田村の間にて海に注げり。川幅十二間より下流に至りては四十間に餘れり。水源は恩田川、谷本川の二流なり。恩田川は多磨郡木曾村天神の池より湧出し、都筑郡恩田村を流るゝによりて恩田川の名あり。夫より同郡の内佐江戸村、猿山村の間にて谷本川に合す。かの谷本川は多磨



郡軸木領十七ヶ村の水田より餘水あつまり、一筋の流となり都筑郡谷本村に至り、夫より谷本川といひ、佐江戸村にて恩田川に合す。是より一條となる。その下流をすべて鶴見川と唱へり。此川に至りてはよほど幅も廣く、都筑郡の内大熊川、早淵川、又當郡にては鳥山川、矢上川この四川の下流もみな鶴見川に入る。是等の川々は何れも小流にして、別に擧ぐべきほどの川にはあらず。鶴見川は郡内を流るゝこと凡二里餘と云ふ。帷子川 郡の南の方にそひ、西より辰巳へ郡内を貫き流るゝ川なり。川幅はことにせまし、下流の廣き所に至りては十間餘あり。帷子町芝生に至て海に沃げり。水元は都筑郡川井村大貫と云ふ所の谷水一筋の小流となり、同郡白根村及菅田村、今宿村の谷水竹ノ下にて合して一條となるあり、爰より下流を帷子川と唱ふ。水元より海濱まで川の長さ三里許なり。又別に今井川と呼ぶもの一筋あり。是は小流にてあげてしるべきほどのものにあらず。この水元は都筑郡今井村谷々の水集りて、程々谷驛の内を屈曲してなされ、帷子町にて帷子川となれり。神奈川湊 郡中、海岸にそひたる村凡五里の間なり。其次第は南の方より東へ互りて芝生、神奈川宿、西子安、東子安、生麥、潮田、下新田、小田、渡田、大島、大師河原、池上新田、稻荷新田の村々連れり、海道も少くかゝりし所あり。神奈川の臺はすこぶる高き所にして、此所よりのぞめば東南の方、眼界打開けてことに勝景の地なり。久良岐郡洲干湊より十二天の森を遠く見やり、又向ひに横濱の辨天の社など見ゆ。すべて此ほとりは、斷岸峭壁の處多くして屏風を立てたるさまなり。故に騷客など錦屏海と號して、一二をかぞふれば四屏に分てり。その上には古松あまた蟠蚪し、遠くのぞめば其趣言ふべからず。商舶漁舟朝な夕な行かふまなど、繪にかきたらんやうなり。此所を當國海岸の地、第一の絶景と云ふべし。

産物

鹽 川崎領の内、海岸の諸村にて鹽竈を設けて製す。上品にて播州赤穂の産におとらず。他へ運漕するに及ばず、纔に土地にてひさぐのみなり。梨子 川崎領よりおしなべて作出す。その種類甚多し。これは近きころより多く植うると云ふ。

卷百二十七 村里部

橘樹郡 二 稻毛領

稻毛領は郡の良の方なり。稻毛の唱のことは、已に庄名の條に出せり。この領に屬する村すべて五十七村なり。此領内の界域は、北の方金程村より多磨川につひて、東の方上平間村に至るまで五里餘、爰より巽の方は川崎領なり。又坤の方は小山連綿して界をなし、郡中神奈川領に隣れり。爰より多磨川の涯を距ること一里許なり。土地の形勝以下は、詳に村々の條下に出せり。

金程村 郡の乾の方、多磨郡の界にあり。村名の起る故を詳にせず。古は多磨郡小澤領に屬せしと云ふ。近くは寛文九年、時の地頭椿井喜之助政安が改めし檢地帳にもしかしるせり。もと當郡の小郡なりしことは、總説にも辨せし所にして、ことに當村は多磨郡の接界なれば、さもあるべく思はる。されど正保年中改定の國圖には、已に郡中におさめたれば、公にはやく郡界を改め定められしかど、地頭はたましく因循して、舊に従ひしならん。土人又傳ふ。小澤領のこと、或は小澤庄とも唱へしと。按ず



るに、東鑑元久二年六月二十三日の條に、稻毛三郎重成入道は大河戸三郎に誅せられ、その子小澤次郎重政は宇佐美與一に誅せられしこと見ゆ。又同年十一月四日の條に、稻毛入道が外孫綾小路三位師季卿の息女を尼御臺の猶子として、武藏國小澤郷稻毛入道が遺領を知行せしめられしと見えたり。これによれば重政爰を領すといへど、もとより父重成が領地稻毛庄の内をわかち領せしなれば、稻毛庄小澤郷と唱へしなるべし。この郷と云ふもまた例の村の字にひとしかるべし。されば重政も此在名によりて小澤と號せしは論なかるべし。後小澤の地、數村にわかれば、もと郷名といひしを、或は庄名とも唱へしにや。今は又小澤の唱をすて、稻毛領に屬せり。其地は江戸日本橋より七里の行程にして、家數十三軒、村内に散在せり。四境東は細山村及び都筑郡萬福寺村なり。南も同郡にて古澤村に隣り、同じならびより西へかけては多磨郡平尾村なり。北も同郡坂濱村に接せり。東西五町、南北八町。東西北の三方は小山ならびたち、中央より南の方纔にうちひらけたる平地なり。其邊少しく水田をひらけども、もとより用水の便あしければ天水を待て耕種す。故に陸田の方水田より多し。土性は野土にて黒土多し。又赤土の所もあり。林は一町七段許なり。此ほとりの村々は柿の木、土性に宜しきを以て所々に植ゑおき、秋に至ればその實を江戸へ送りて産業の資とす。御打入の後椿井喜之助政堯が先祖へ此地を賜はれり。その年代はたしかに傳へざれども、同知行隣村、畑山村は正保二年に賜はりしといへば、當村も同時に賜はりしなるべし。

高札場村の中程宇前原にあり。

小名 坂上東の方細山村の界なり。

大門澤南の方なり。

中ノ久保西の方なり。

坂本北の方を云ふ。

西平

平尾村の境なり。

坂下 同邊なり。

杉山社

東の方によりてあり。村の鎮守なり。棟札に寛文六年造立のよしを記す。これ鎮座の年なるにや。本社は丘の上にある。

三尺四方の宮造にして覆屋あり。二間に二間半。本地不動は木像にして長一尺ばかりの立像なり。又稻荷を相殿とす。社前に木の鳥居をたつ。例祭は年々九月二十一日。平村の神職小泉信濃司れり。平常には村持なり。

白山社

村の中央にあり。東向の社なり。延寶八年十月二十三日の棟札あり。されどもこれ鎮座の年月なるにや慥かならず。村持。

辨天社

村の西の方丘上にあり。小祠なり。前に

鳥居を立つ。これも村持。

無藏庵

白山社の東にあり。大き三間に二間半。巽向なり。本尊は彌陀の座像にて長一尺八寸。其餘地藏の像を安ず。この庵いつの頃いとなみしと云ふことを知らず。村持なり。

舊蹟小澤原古戰場

今其所を傳へざれどこの小澤郷の内多磨川邊へ寄りたる地なるべし。昔は田島も今のごとくひらけざれば。もとより廣き原野なるべし。小田原記等の書を閲するに『享祿三年の夏上杉修理大夫朝興河越の城にありていかにもして北條氏綱を

退治し。先年江戸の城にありし頃敗北せし恥辱を雪がんと難波田彈正。町田藏人等を始として宗徒の兵五百騎にて武州府中へ出陣す。氏綱聞て何程のことかあらんと子息新九郎氏康其頃はまだ十六歳なりしをさし向ける。乳夫子志水小太郎をはじめおとらぬ若者ども今日を時とかせて六月十二日上杉の陣へ押寄せけり。所は武藏府中玉川の端。小澤原と云ふ所なり。兩軍鋒先を交へ終日おめききけんてたゝかひしが夜に入りければ上杉散々にかけまけて引退く。氏康は初陣に敵を落して物始よしと悦び。勝岡をあげて馬を入れし。』と云々。この小澤原を向ヶ岡の小澤原と記せしものありと云ふ説あり。今他の戦記を點檢するに向ヶ岡と記せしものを見ず。姑く疑を存するのみ。

細山村

金程の隣村にて、江戸日本橋よりの行程も大抵金程に同じ。昔は小澤庄と唱へしこと前にいへるが如し。細山と云ふは文字のごとく村の地形ほそ長くして、其地はすべて山上なるを以て起りし名なりと云ふ。天正より前はいまのごとく水陸の田はひらけざりしならん。御打入の後、土方、白井、



三輪、宮田など云へるものども荒野を開墾して、文祿三年八月六日檢地のことあり。このときの水帳をみるに、都筑郡小机の内細山郷とあり。されば其頃は都筑郡に隸せしこと知るべし。年月の下に小宮山八左衛門等すべて三人の交名を註せしのみにて、奉行の名を載せず。その頃は人家も纔に七軒なりしとぞ。其後小泉次太夫が御代官所となりしが、程へて後正保二年七月、椿井某に賜はり、それよりこのかた子孫に傳へて今喜之助政堯知行せり。初め賜はりてより後寛文九年十一月十五日、再び檢地せり。此時の水帳にも都筑郡小机領と記せしは、もとの水帳のまゝをうけて改めざりしならん。これよりさき己に郡界は改りしと見えて、正保の國圖等には、當郡にかけたるを以て知るべし。この檢地の頃も戸數は己に三十軒に餘りしかど、今は猶繁衍して五十九軒に及べり。村の内東西二十五六町、南北十八九町。良の方は菅村に隣り、東より巽へかけては五段田、高石の二村に接せり。西の方都筑郡萬福寺を始として、郡中金程及び多磨郡平尾、坂濱の四村に接せり。北は多磨郡の内百村、長濱、矢野口の三村なり。村の地形西より北の方は、すべて小山多くして土地高く、東より南へは卑下にして山も稀なり。水田は谷合のわづかに平なる所に、棚のごとく次第をなして開けり。其餘平地に水田を開きし所も少しくあり。大抵地高き村なれば、陸田の方多し。土性は黒野土多し。眞土も少しく交はれり。此邊にては土人農隙に炭を燒きて江戸へ送り、貢税の補とす。これは都筑郡黒川村の産と同品なれば、江戸にてはなべて黒川炭と稱せり。

**高札場** 字本村にあり。

**小名** 向<sup>レ</sup>原村の西坂濱村の境にあり。

**小町久保** 西の方なり。

辻ノ宮 同じならびなり。

**馬場** これも西の方なり。

**經塚** 西南の間なり。

本村村の中央より西にかゝりし地なり。此所に郷藏あり。大き百坪ほどの間にたり。

本屋敷 村の南

にあり。古は民戸皆この所にありし故此名ありといふ。

**坂東** 南の方にあり。此所に香林寺の觀音ありし故札所の心にてかく唱ふる

なるべし。

**二重經塚** 經塚より南の方なり。

**桑原** 北の方なり。

**石名坂** これも北の方長沼村

の境なり。

**大久保** 良の方なり。

**池田** 大久保の續きなり。

**的場** 東の方なり。

**向坂** これも東の方なり。坂と號すれども實は坂あるにあらず。

**谷川** 村の東方にあり。

村内の谷々より涌出する清水あつまりて一條の小川となり。隣村五段田村へいる。隣村五段田村へいる。

大き三畝十歩ほどの池なり。こゝへ天水を湛へて用水とす。其餘谷々より流れ出づる清水を引用する所も亦多し。

**留井** 字向原にあり。

**塚樋** 溜井にそひて

長四間幅一間。地頭所より修造する所なり。

**神明社** 字大久保谷の内丘の邊なるくぼき所に在り。

村の鎮守なり。鎮座の年代をしらず。僅かなる社にて覆屋あり。西に向ふ。社前一町餘を隔て、鳥居をたつ。こゝより社前までは下り坂なる故土人これを逆大門とよぶ。尋常の大門は皆坂下より上へ登れるにこゝのみはかへりて下る故なりと云ふ。村持。

**稻荷社** これも大久保谷にあり。

村の鎮守なりと云ふ。本社は宮作にて四間に二間の覆屋あり。祭神は女體にて木像なり。八幡天神の二座を相殿とす。八幡は地頭所より祀る所なりと云ふ。棟札の文によるに寛文五年の頃鎮座せしと見ゆ。社前に鳥居をたつ。例祭は九月にしてその日は時宜に従ひて定めり。村内第六天社及び杉山社と次第して年々一座づゝを祀れり。其式は平村に住せる神職小泉信濃が司る所なり。村持。

**杉山社** 字坂東の内丘の上にあり。

これも村の鎮守なり。相傳ふ堀河院の御宇永長元年の勸請なりと。本社は宮作なり。覆屋四間に三間半。東向なり。本地不動は木の立像にて長一尺五寸。社中に安ず。是も村持。

**第六天社** 字木屋敷の内にあり。

鎮座の年代を傳へず。村の鎮守なりと云ふ。されどわづかなる社なり。村持。

**若宮八幡社** 字本村の内なる丘の上にあり。

わづかなる社にて南向なり。神體は長六寸ばかりの木像なり。鎮座の年代をしらず。天和年中の棟札あり。之も再建の年月なりや詳ならず。百姓持。

**秋葉社** これも八幡の邊にあり。

わづかなる社にて前に石階あり。百姓持。

**三**



崎稻荷社 これも同じ邊にあり。わづかなる社なり。棟札に寛延四年とあり。再興の年代なりや詳ならず。百姓持。

香林寺

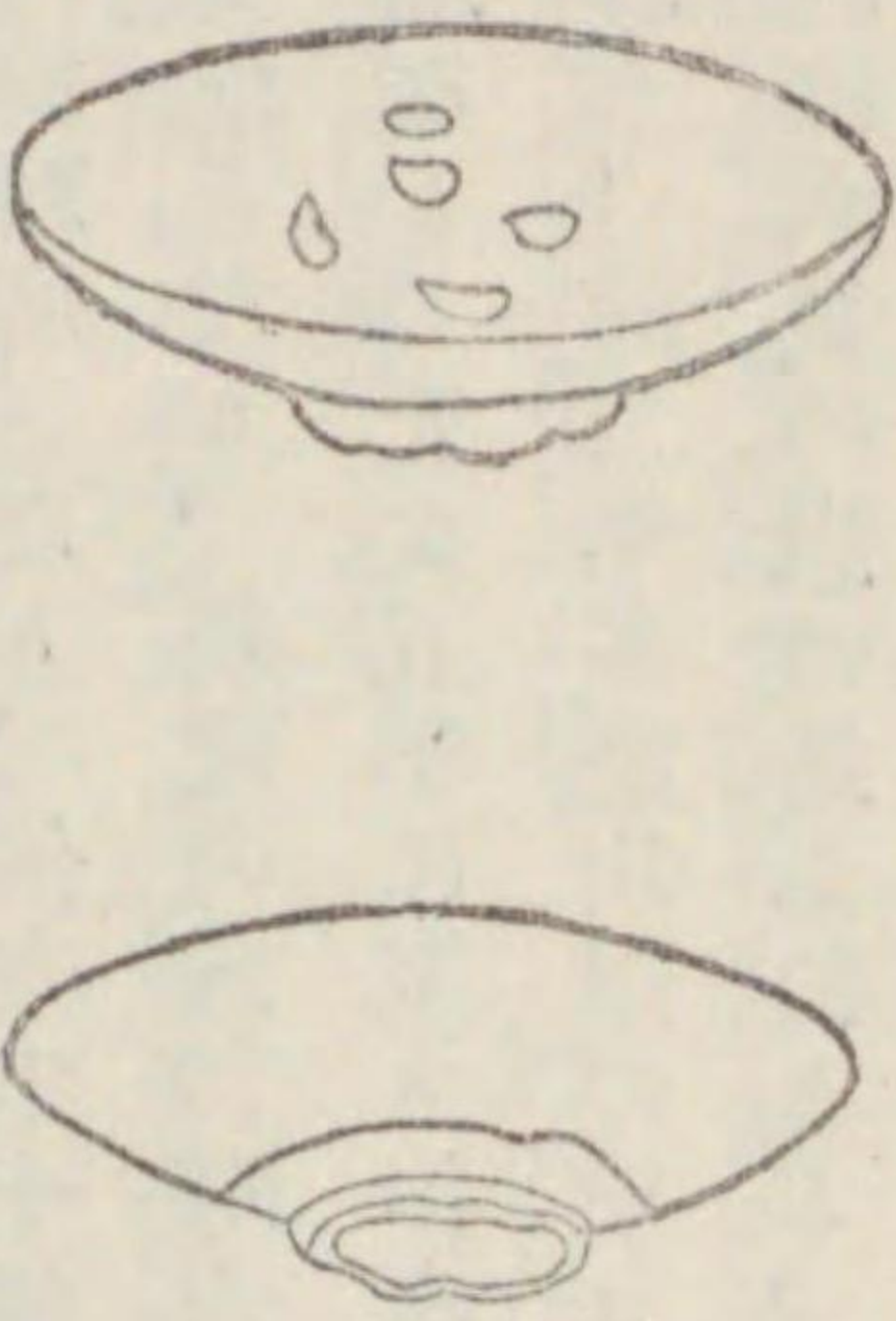
字坂東にあり。臨濟宗相州鎌倉建長寺末。南嶺山と號す。文祿三年の水帳には高林坊と記せり。其頃は觀音の別當所なりしと云ふ。其後一寺となりしはいつの頃にや詳ならず。高林坊の開基は僧南樹にて天文二十三年四月二十六日寂せりと云ふ。按ずるに觀音の緣起は文明元年にかきしものなればこの堂のたしは猶ふるき代のことなるにや。客殿六間半に五間半。本尊十一面觀音を安ず。これを身替觀音と號す。これ前にいへる昔の觀音堂の本尊なり。緣起の文に云『十一面觀世音菩薩。弘法大師一刀三禮造立。寶龜七丙辰歲。因幡之國高草郡在清水長者。此奉觀世音信心。或時其家夜盜入數多。人被殺女盜賊立合。而二ヶ所得疵痕轉倒時。奉念觀世音。翌日則奉見尊面二ヶ所存予。依之身替觀世音菩薩云々。文明元歲霜月五日。』この文によりても古佛なることしるべし。門は東向にて前に石階七級あり。觀音堂門を入りて左にあり。二間に三間の堂にて北向なり。この堂もとは本尊觀音のために造立せしなれど今はかの像を客殿へ移せし故この堂には本尊なし。古碑四基 一は觀音堂の前にあり。永仁三年閏二月十九日とあり。其餘三基も境内にあり。一は貞和四年十一月日と刻す。一は梵字を彫りて下に應永十七年六月二十一日智仙禪門とあり。一は文字磨滅したれど明德二年の四字ほのかに見ゆ。延命院 字本村にあり。新義眞言宗多磨郡坂濱村高勝寺の門徒にて東光山と號せり。古は修驗にて嶽照壽仙居士と云ふもの住せしよし。此人は慶長三年二月十日寂せしと香林寺の過去帳にのせたるのみにて俗稱及び履歷を失せり。今境内後背の山上一町許のぼりて塚あり。塚上に古松一株たてり。土人これを嶽照塚とよぶ。これ居士を葬埋せし所なりと云ふ。後に智海と云ふ僧住職の時より一寺となれり。智海は延寶八年九月二十三日寂せり。今これを開山とす。此寺祈禱を專として滅罪を事とせず。藥師堂あり。三間四方。坤向なり。本尊藥師佛は座像にして長五寸。運慶の作なりと云ふ。左右に十二神の像あり。立像にして長各七寸、別に客殿あり。藥師堂にたてつゞけたり。經塚 西南の方にあり。この塚あるを以て小名をも經塚とよぶ。古塚相對して二つあり。いづれも周廻十三間餘高さ六尺程。上に古松一株をうゑたり。思ふに古き世の人の墳墓と見えたれど別に傳ふる事なし。塚上より望めば都筑郡の山々及び秩父の武甲。多磨の御嶽。小佛。高尾。相州の丹澤。箱根等の諸峯宛然として眼中にあり。ことに快晴の時は南方の海上をも見渡して眺望いとよし。

庚塚 字別甫にあり。道を挟み相對して二つあり。數の廣さ四十坪ばかりもあるべし。其來由を詳にせず。

舊家者百姓佐兵衛

土方を氏とす。先祖を藏人某と云ふ。是文祿の頃の人なり。其後世々此所に居れり。されど今家系を失ひたれば其詳なることをしらず。因に云ふ。彼が分家源右衛門と云ふものあり。その屋敷の内に炭竈を設く。一年そこより掘出せし土器十枚あり。いかにも古きものと見えたり。その圖左のごとし。惣體素焼にして古質のものなり。想ふに其地古人の葬地などにてありしかばかゝるものをも埋めしにや。 褒善者孝女三 三は百姓忠七が女にて外に兄弟もあらず。たゞ一人の娘なりしが。親の奉養に孝心殊に厚かりけり。父忠七中風の病をうけて年ごろ手足自由ならず。枕にのみつけり。もとより家まづしければ女の身にてわづかの田を耕してありしが。それも心にまかせざりしかば常に雇人となりていさゝかの賃錢をとり。朝夕の奉養に供し日頃怠らず。その間の患苦世の常の人の堪へざる所にして。さん女よく是を忍べり。かゝることのおのづから聞えしにより二たび三たび其實否をたゞせしに。假令のことにあらざりしかば地頭椿井某褒賞して米二斗を與ふ。其後忠七も終をとげ。三もまたつゞいて歿せり。時に文化十年にして三十歳なりしとぞ。

圖 版 三 土 器



に。假令のことにあらざりしかば地頭椿井某褒賞して米二斗を與ふ。其後忠七も終をとげ。三もまたつゞいて歿せり。時に文化十年にして三十歳なりしとぞ。

菅村

郡の乾方にあり。古は小澤庄に屬せしよし土人云傳ふ。村内壽福寺の鐘銘には小澤郷とあり。さればこれも昔は金程、細山等を通じて一郷なりし地なるべし。村名の起りしは別に故もなく、たゞ菅の多く生ぜし所なればかく名づけしか。江戸日本橋より六里餘の行程なり。戸數二百八十九軒、村内に散住す。東は上菅生及び多磨郡中野島の二村に隣り、南は高石、五段田の二村に接し、西は細山及び多磨郡矢野口に境ひ、北は多磨郡下石原、小島分、上市田の三村に互りて多磨川を堺とす。東西十九町餘、



南北二十二町餘。南より西へかけてはすべて丘にして、東北多磨川の岸の方へよりて又平地なり。水田多くして陸田少し。水田は眞土にして砂交れり。陸田は黒土、赤土、へな土交れり。水旱ともに患あり。古の領主を傳へず。されど前の金程村の條に出せし東鑑の文によれば、こゝも稻毛三郎重成入道が舊領の内にして、其子小澤二郎重政が領せし地なり。今村内に小澤小太郎重政が城跡なりと云ふ所あり。小太郎は次郎が始の名なるにや。又寺尾若狭守某の城蹟あり。是もその後の領主なるべし。又村内法泉寺の縁起を閲るに、小田原北條家の頃、佐保田河内守某、同山城入道政房等世々小澤七村を領せしと云ふ。御打入の後に小泉次大夫が檢地せし事ありと云へば、この人の御代官所なりしなるべし。正保の頃中根壹岐守正致に賜はり、其子孫に傳へしが平十郎正冬が時、元祿三年采邑を上總常陸二國の内に移されて、當所は御料所となり、伊奈半十郎忠篤が支配所となれり。此年又改めて檢地せり。享保十五年田中休藏喜乗が支配となり、新墾の地二町六畝九歩の檢地あり。同十八年再び新墾の檢地ありしも二町三段三畝六歩の地なり。元文五年に至り伊奈半左衛門忠達が支配所に復せしかど、延享元年に至り川崎平右衛門定孝替れり。同二年多磨川岸の田九段三畝の地を神尾若狭守春央檢地せり。これは堤外の田なる故、やゝもすれば水災の患に逢ふにより、土俗に流作場と云へり。又同年林畑一町四段四畝六歩を堀江荒四郎芳極檢地す。寶曆元年にも又伊奈半左衛門忠宥が支配所となりしが、同四年岩手伊右衛門某かはれり。同六年志村多宮某かはり、明る七年四町五段八畝十二歩の新田を同人檢地せり。同十年辻源五郎某が御代官所となりしに、又新墾の田ありて二畝三步の檢地ありしは明和五年のことなり。同七年又伊奈半左衛門忠敬が支配に屬せり。寛政四年菅沼安十郎某、文化二年中村八太夫某、同三年伊奈友之助某等あまたの遷替ありて、同十年より小野田三郎右衛門信利が支配所となれり。この餘壽福寺領七石あり。

高札場 村の東馬場耕地にあり。

**小名** 城ノ越 西の方小澤峯の下を云ふ。 鷹之巢 是も西の方淺間森の下を云ふ。 馬場耕地 東の方を云ふ。この地の内に塚戸と云ふ所あり。 おんまはし 塚戸のつゞきなり。 おき田 南の方なり。 柳町 淺間山の北を云ふ。 とつら谷 南なり。

り。 松ノ木戸 馬場耕地の邊なり。古寺尾の城ありし時。馬場と城との入口なる木戸の跡なりと云ふ。 矢栗谷戸 壽福寺境内の續にて小澤の城蹟の南にあたり。 野戸呂 今もよほど廣き地なり。土人の傳へに古は別に一村なりしかど又一村とせんにも狭き地なれば今は村内に屬せしとぞ。

**多磨川** 村の北を流る。西の方矢野口村より流れ來り。東の方多磨郡中野島村に至る。村内を流るゝこと八町許。この間は村の西なる矢野口村と兩村の持にて船渡あり。是も年々十月より翌年の三月までは假に橋を架して往還に便す。

**小澤川** 村の西の方小澤峯の傍小澤谷戸より流出づる細流なり。土人これを白清水とも呼ぶ。その流そこばくをへて百村川へ沃ぐ。

**百村川** 村の西矢野口村より來り東の方中野島村界にて二ヶ領用水の流に入る。村内を流るゝこと五百四十間許。

**大丸用水** 村の西の方より流れ來る。これを處々の水田に沃ぐ。又小澤百村の二川をも引き用ゆ。二ヶ領用水も村内に係れども水路不便なれば引き用ふることなし。

**水除堤** 二ヶ所あり。其一は百村川にそひて築きしもの矢野口村の堺より東の方中野島の堺に至る。長千八十間あり。一は多磨川の水除なり。長千二百六十七間。

**根ノ上社** 村の鎮守なり。南の方丘上にあり。別當法泉寺の縁起を以て考るに其略に云『當所菅村地主明神は大貴已尊の靈廟にしてその鎮座の年代をしらず。傳へていふ。本地は十一面觀音なりと。又後人薬師第一の夜又大將を宮毘羅神に習合してこれを崇む。よりて子神と名づく。又保元の亂に白河殿夜討の時鎮西八郎爲朝が義朝に向て放ちし矢鏃を義朝の妾常磐の前素願のことありて常に懷を放たず。



後に其子義經に譲り與へける。是より義經も身をはなたずして奉じける。爰に當村の薬師佛はもと常磐の前が守護佛なりしが亂逆の際移轉して當所の仙谷と云ふ所へ遷座ありしなり。一年義經この堂に參籠して從者十三人と同くこの本尊を念じ義經懷中よりかの矢の根をとり出して醫王殿に納めける。夫より地名を大箭所といへり。後かの矢の根を佛前より申おろし。地主明神の祠へ納めて神體とせしにより其字音の近きゆゑ子神を改めて根神とす。社壇を竹鼻と云ふ處に築きて惣郷の鎮守とす。これより毎歲正月九日神前にて猿樂の男舞及び賭的あり。楊の弓青竹の箭を以てこれを射る。名主二人氏子七ヶ村のものども座に列するを以て永式とせり。元弘三年五月新田左中將義貞鎌倉へ攻入りし時。先陣堀江田里見等の兵此所をすぎ。當山に亂入して神社佛宇に放火せしかばことごとく烏有せり。遂の後小田原北條の家人佐保田山城入道政房當所の人なりければ。かの人の願によりて氏康當社を再興ありしは天文二年七月なり。天正十八年小田原城攻のとき北國勢の爲に焼れて再び烏有せり。この後住侶長辨檀越に勸進してわづかに小堂を營み。その形を存するのみなり。後中根壺岐守正致が采地となりし頃そこばくの田畑を寄せしゆゑ今の如く社もつくりしなり。』と云々。猶法泉寺の條下と照し見るべし。本社一丈四方。拜殿四間に二間。前に石の鳥居をたつ。夫より前に石階五十餘級あり。

**稻荷社** 村の南字山崎にあり。わづかなる祠なり。法泉寺持。

**天満宮** 小祠なり。壽福寺の境内につゞきたる所にて則彼寺の持なり。

**浅間社** 小澤峯のつゞきにていと高き所にあり。石にて祠を作る。壽福寺の持。以上五社ともに勸請の年歴等詳ならず。

**壽福寺**

村の西字仙谷にあり。或は仙谷郷とも云ふ。故に當寺を仙谷山と號す。臨濟宗相州鎌倉建長寺の末。寺領七石の御朱印を賜る。境内は則御朱印地の内なり。今所藏御朱印の内舊きものは慶安元年九月十七日なり。其文に『先規の寄附に任す』と云々。古縁起あり。左に載す。『夫仙谷山壽福寺者。推古天皇六戊午年。聖德皇太子就于高橋丸之亡妃。入阿彌尼公終焉之地。勸建七區練著。以資冥福之舊址也。蓋山曰仙谷者。有仙人道鏡者。栖運于此山。鍊行修身積有年矣。亦曰道鏡谷也。今古怪異之事甚多矣。是仙人所爲也。寺曰壽福者。曾茲榛夷地之時。得虛空藏薩埵之像。因標福一滿之聖號。以視寺之遠大而安。今號焉。後建長囉侍者磨虛空藏經一軸。而乞石室攻禪師之手墨。鏤梓寄焉。尊像十一面觀音自在薩埵者權化之人。唯時來手彫刻焉。自爾以來靈感滋衆矣。或曰和州長谷寺之像同木同形也。康平年

中八幡太郎義家。欲排斥奥州逆徒。出陣之時。中路而宿于茲。竭忱祈開運於斯像。後果獲遇感矣。在昔小澤小太郎重政。每晨旋步像前。勉於晨香夕燈。修現當之善因矣。梵丞大般若經者。名縮高素之毫痕也。文治年中源義經泊辨慶暫憩行於此地。追曾祖之例跡。祈快復之應驗。特復繕寫經之闕。而今尙現存矣。雖然間遭兵災。寺既敗壞年久矣。爰有前住建長大安禪師大方慶和尚。卓錫此地。力興荒廢。始振禪風。僧俗雲集。永德壬戌年鎌倉左兵衛督氏滿。號永安寺殿壁山全公。推慕師之德操。而參謁之次。再修補此經之盡損。覃造營三個殿宇。既而安十一面大悲像於大會堂。安彌陀善逝像於善應殿。奉請辨財尊天大黑天八幡大菩薩稻荷大明神於擁護廟。繇是仰皇圖之鞏固。祈佛運之紹隆。而亶々不忘焉。應永十四年丁亥稔六月十八日。沙門宗圓敬記焉。』この宗圓はその頃の住僧なりと云ふ。此縁起に載する所頗る詳にして當寺の事を證すべきもの多し。然るに今寺傳によれば開山法慶は弘安元年九月七日寂せりと云ふ。是縁起に云ふ法慶が氏滿と交りし永徳二年より百五年前に當れば寺傳の誤れるにや。又寺傳に法慶より先は天台宗なりしと云へり。古き寺院なること知るべし。

**門** 兩柱の間一丈。兩控作なり。大門の前の坂を土人庚申坂と呼ぶ。路傍に庚申塚ある故なり。

**寺寶**

**大般若經** 六百卷 唐櫃に納む。高倉院の御宇治承三年の頃より書寫し始めて其後世々藏。座像にして長八寸許。作知らず。

書きつぎしが猶闕ありしを板本を以て補へり。夫も永和年中梓行の本なり。其筆者の名を記せしは道成(年代を知らず)明蒙(承治の頃)修理法眼兼賢(永仁の頃)源實定(治承の頃)清尊(弘長の頃)僧觀覺(年代を知らず)運壽倫(至徳の頃)行信(年代を知らず)朝運慶運榮仙(三人共に應永の頃)祖意深大寺長辨(二人とも年代を考へず)源實柱(建久の頃)澄融(建武の頃)阿闍梨巖海等なり。中にも源義經及び武藏坊辨慶の書あり。第五百八十卷の末に記して云ふ九郎判官義經辨慶讀合とあり。此餘建久の頃の寫に筆者の名磨滅して讀み難きものあり。餘は多く板本なり。後人の補書これは元祿の頃和泉守宗磧。貞享の頃小出玄蕃頭重興等が名を載せたり。

**十六羅漢畫** 一幅 雪舟の筆なりと云ふ。鞍一口。鐙一隻 何れも古物也。

**觀音堂** 客殿の南にあり。三間四方にして東向なり。大會堂と號す。かの縁起に載る所にして古名なり。本尊は雄子を踏へし立像にて尋常觀音の像と異なり。長一尺餘。古武藏坊辨慶此堂にて大般若經を書寫せしと云傳へり。

**阿彌陀堂** 觀音堂の異方にあり。是も三間四方にて北向なり。本尊は五尺許の座像也。

**太神宮**、**八幡**、**稻荷**、**大黒** 合社 表門の向にあり。この内八幡稻荷大黒三座は縁起に載る處なればまさしく古社なるべし。

**辨天社** 觀音堂の後にあり。小社なり。



この辨天も縁起に載る所ならん。神明社堂より南の方の山上にあり。小社。第六天社。これは西の山上にあり。小社。境内十景。大會堂。擁護廟。展翼峯。採藥阜。晚成室。光照崖。櫻霧松。吐玉泉。發霞谷。指月橋。東潮庵。門前にあり。當寺の隠居所なり。

玉林寺村の南字馬場にあり。臨濟宗にて同村壽福寺の末寺なり。洞雲山と號す。開山藏雲西庵。元和五年正月廿二日寂せり。客殿八間に五間半。東向なり。本尊藥師。長八寸許の座像也。運慶の作と云ふ。又地藏の像あり。長四寸許。定朝の作なりと云ふ。延寶七年十月十二日。時の地頭中根壹岐守正致が田地寄附の狀あり。其文に觀音堂免田とあり。其頃は觀音を本尊とせしにや。

長松寺村の南北浦耕地延命場と云ふ所にあり。故に延命山と號すと云ふ。是も壽福寺の末寺なり。開山南樹は天文二十三年四月二十六日寂せり。客殿六間に四間半。東向なり。本尊は地藏にて長八寸許の立身なり。弘法大師の作なりと云ふ。福泉寺。小澤城跡の下芝間耕地にあり。臨濟宗にてこれも壽福寺の末寺なり。小谷山と號す。開山開基詳ならず。客殿六間に五間。東向なり。本尊彌陀の座像長一尺餘。

法泉寺字北浦耕地にあり。天台宗にて多磨郡深大寺村深大寺末。大谷山吉祥院と號す。縁起あり。其略に云「當所の領主稻毛三郎重成が室建久六年七月七日歿せり。これを當山の南の尾に葬り。秋樂院妙林大姉と諡せり。重成が悲大方ならず。薙髮して永眞入道と號す。頓て堂坊を當所に營み。重成山極樂寺と號せり。重成こゝに籠居して念佛三昧他事なかりける。鎌倉諸士より使人雜色等たえず訪れける。この時假小屋を立てし所を小屋所と云へり。同八年三月頼朝御臺所と共に信州善光寺へ詣てられ。當山へも立より給ひし時當國高麗郡にて香燈佛餉料を寄附せらるゝの狀を賜へり。そのとき多磨川のほとりに砂を盛て執筆を居き諸侍の著到を定めらる。其跡を帳塚と云ふ。或は帳草塚とも云ふ。この地も今は村内に屬せり。又門前に於て假屋をつくり諸客列座せり。今彼所を御殿場と云ふ。亦一の役所をかまへ。此所にて諸士へ將軍の命を傳ふ。そこをば演命場と號す。此夜山の巽の方に雜色の雲たなびけり。人あやしんで異星ならんと云ふ。御臺所甚畏れ給ひしに時の住僧大顯云ふ。これ祥雲なり。諸天の影向なるべしと。畠山重忠もこれを見てしかるべし。これ星宿にあらず。天樓臺の現るなるべしと。これより彼山の寺尾を天樓臺と呼べり。明る九年極月五日重成入道相州相模川の橋を架す。これも亦亡室妙林大姉追福の爲とぞ聞えける。正治元年正月十三日頼朝他界。嘉祿元年七月十三日二位尼公逝去。

この兩度とも當院にて法會行はる。其後寛喜元年七月十三日將軍頼經より諸役免許の御教書を賜はる。その後堂宇破壊せしかば寛元元年頼嗣の母堂大宮殿大旦那として再興ありて大伽藍を作り。輪奐美を盡し。當山の繁榮こゝに極まれり。この後城主小澤入道物故し。一族ことごとく亡命しておのがさまに分離す。故に當寺も從て衰廢せり。この後元弘三年五月武藏野合戦のとき兵火の爲に燒亡す。寶物以下みな烏有せり。遙の後小田原家人佐保田山城守某主人氏康に訴へて天文二年七月再興し。本堂以下ことごとく修理し。且山林竹木永免除の書を賜へり。此時かの山城入道施主として二菩薩十二神を彫刻せり。山門佛頂の尾の住侶存心を住主とす。此時極樂寺法泉寺の二寺を合せて一院とし。岳の鼻に於て社上に院を起し。本堂に醫王を安じ。大谷山法泉寺吉祥院と號す。こゝに於て存心を當院の中興とす。これより已來天正十八年瀧山城攻の時。北國勢の爲に燒れて悉く烏有となる。この後十方の檀那の力を募て再興せしかど昔にくらぶれば纒に形ばかりを存せり。御入國の後地頭中根壹岐守正致かゝる舊寺の衰廢をいたみ。延寶七年十月水陸の田若干を寄附せり。この後御料所となりて後も先規にまかせて免除せらる。」と云々。今は客殿七間半に五間。東向なり。本尊彌陀を安ぜり。福昌寺字北浦耕地にあり。これも天台宗にて多磨郡深大寺の末寺なり。金剛山と號す。開山を惠賢と云ふ。その年代詳ならず。寛文中の檢地帳に福生寺とあり。後に文字をあらためしなるべし。客殿五間四方。北向なり。本尊彌陀。長二尺八寸許の立像なり。惠心僧都の作と云ふ。又荒神の像あり。立像にて長二尺五寸許。慈眼大師の作にて靈驗あらたなり。先年火災の時飛びさりて災を免れしなど寺僧いへり。藥師堂字大谷にあり。四間四面の堂にて前に七尺許の石階あり。この藥師は法泉寺の鎮守とする所の佛にして人の拜することゆるさず。その詳なることは已に垂迹根上明神の下に辨じたればあはせ見るべし。觀音堂村の東字馬場耕地にあり。玉林寺境内の巽につゞきたり。則その寺の持なり。三間四方の堂にして北向なり。聖觀音の立像長一尺餘。惠心僧都の作なりと云ふ。阿彌陀堂字野戸呂にあり。堂は二間四方なり。彌陀の長一尺五寸許の立像なり。相傳ふ昔多磨川の河原に延長寺と云ふ寺ありしが一年境内の地崩れかゝりて寺もそれがためにことごとくうづまりしかば此時より廢寺となれり。その後本尊のみを掘出してこゝに安ぜりとぞ。今の地は百姓武右衛門が持にてこの堂は福昌寺のあづかる所なり。

小澤城址村の西の方にあたれる山なり。この所を小澤峯と呼ぶ。此峯の地先多磨郡矢野口村につゞきたり。前にも出せし小澤小



太郎が居城なりしと云ふ。又矢野口村の傳へにはこの山を天神山と號し。小澤左衛門と云ふ人の住せし所なりと云ふ。されば小太郎左衛門は同人なるか。或は父子かなるべし。年代さへも傳へざれば考ふるによしなし。享保天文の頃上杉北條と合戦ありし小澤原といへるもこの山下の平地なるべければこの邊要害の地にて城壘をもかまへしなるべし。今も石垣馬場井戸等の形遺れり。その地東西北打ひらきて多磨川を臨み。長に本門寺の山あり。眺望いと佳なり。猶矢野口村と見合すべし。

**寺尾若狭守城跡** 南の方なる山上にあり。この所を寺尾臺と唱ふ。若狭守の由緒詳ならず。今按ずるに郡内寺尾村に諏訪右馬助が城跡あり。又入間郡寺尾村にも諏訪右馬助が居跡あり。若狭守も右馬助が一族などにはあらざるか。この邊に瓦塚錢龜塚など云ふ塚あり。廢跡の瓦錢鏝などを埋めし所なるべし。

**官屋敷跡** 東の方馬場にあり。これは中根壹岐守が知行せし頃代官をおきし所なるにや。

代

**舊家者百姓定右衛門**

先祖佐保田山城守平政春は當所の領主なり。夫より子孫農民となり。世々こゝに住せり。家に系圖を藏す。これを閱するに元赤松家の末流神崎氏より出づと云ふ。されば源氏なるべし。然るに平姓と云ふこと疑ふべし。この系圖すべてたしかならぬものなれば爰にはとらず。因に云ふ。當村に七黨とて廣田。安藤。上原。田郷。關屋。小山と佐保田總て七苗なり。又原。井口。宇津木。増田。田代。樋山。白田。小井。沼等を加へて十六苗とて今其子孫あり。七黨のことは法泉寺縁起にも見えたり。此定右衛門は今村の名主なり。

**百姓定四郎** 是も佐保田を氏とす。代々の姓名等をも傳へず。たゞ舊家と云ふのみなり。今村の名主を勤む。家に先祖の持たりとて馬具を藏す。鞍は海なしにて黒塗なり。金にて丸の内卍の紋をつけたり。あわりは熊の毛皮なり。鍔は鏡にて作る。唐草に葡萄のまやうを象眼に入る。馬轡は鹿の皮なり。又鍔一本あり。

**高石村**

郡の西方にあり。師岡庄に屬し、郷名は失せしと云ふ。されど諸岡郷といへる地は和名抄にも見えし久良岐郡の郷名なれば、もし此邊も古の諸岡郷の内にして、其名のみ残りしにや。又云ふ。笠原氏小机在城の頃はかの城下の屬邑にして、菅生郷稻毛庄小机領と唱へ、菅生七郷の一なり。とかく

世々の間にその地の唱ふる處もかはりしは、後より定かにしがたし。天正十九年檢地の頃までも、その唱を存せしこと水帳に記せしにても知らる。今もこの時の檢地の貢數を用ゆ。故に畝數を用ひずして、一段以下の數は大半小をわかつて數へり。檢地せし人の交名もしるしたれど、奉行せし人の名を載せず。今の名主兵右衛門が先祖は、此地の郷士にして名を民部と云ふ。天正の頃の水帳にもその名をば載せたり。此人の家にて村を開闢せしと云傳へり。今の地頭加々美金右衛門某が先祖才兵衛正光は、武田の一族にして天正十年勝頼滅亡の後當所に來りしを、民部あはれみて此地に居住せしむ。同十六年正光東照宮に召出され、同十九年に至りて當村の内にて、百七石八斗餘の高を知行すべき由御朱印を賜はれり。その子金右衛門正吉がときまでこの地にすめり。この村開墾の民五人あり。これを五苗と號せり。今は年々に戸數も加はりて四十一軒に至れり。江戸日本橋より七里餘の行程なり。都筑郡の界に接して、山丘多きゆゑ土地高低あり。谷々の間に水田をひらき、溪流を引て用水の助とするゆゑ、早魃の患なし。たゞ霖雨の時は土崩の患あり。水陸の田は各相半して、土性は黒赤土錯はれり。村の四境東は五段田村に隣り、谷川を界とす。南は都筑郡王禪寺村にて、その間の小逕を界とす。西も同郡萬福寺村にて、北は郡中細山、菅の二村に接す。東西八町餘、南北十六町許。民家村内に散住せり。

**高札場** 字原と云ふ所に名主の宅前にあり。

**小名 鶴卷** 村の北の端にあり。 **勝澤** 同ならびにあり。 **猫ノ實** 村の南の端にあり。 **半郡** 同ならびにあり。 **打越** 村

の坤の方なり。 **小貝戸** 村の中央にあり。 **石神** 村の巽にあり。此所に石神の社あり。故に地名とす。 **烏澤** 猫ノ實の内なり。

**塔ノ越** これも同邊にて五段田上菅生の地續にあり。 **水暮** 石神の南のならびなり。 **雉ヶ谷** 村の西方なり。 **萩谷** これも猫ノ實



の内なり。蓮慶峯村の西南の端にあり。瀧澤村の北にあり。鷹股巽の方五段田上菅生のつゞきにあり。ちしくはん村の西にあり。文字詳ならず。二本松村の南にあり。昔此所に相生の松ありし故この名あり。

谷川 水元は村内の山々より涌出する清水にて所々の水田に沃ぎ。其水の末流合して一流となり。五段田村の方へ流れ行く。その間字二枚橋の邊よりは細山村より出づる溪水の末流も合して流るれば川幅少しくひろがれり。二枚橋 谷川の川上に架す。わづかなる橋なり。この橋源義經の架せし所なりと。近村にもかゝる説あれどもとより證すべきことあるにあらず。

伊勢宮村の西北にあたる丘の上にあり。當社あるを以て此邊を伊勢森と呼ぶ。本社宮作にて二間半に三間の覆屋あり。東向なり。神體は幅五寸に長一尺ばかりの版に畫けり。繪様は上に日月を多き。下に童形あり。彩色を加ふ。裏に『承應三年甲午二月廿一日建立。加賀美金右衛門。』と記せり。左右に稻荷第六天の二小祠を相殿とす。例祭は年々正月十五日又二月十五日。形ばかりの流鏑馬の式あり。事畢て後かの料に用ひし木弓二張竹箭三手の内弓一張矢一手を神前に納む。此弓矢一夜の内誰持ち去るともなく失せぬるとぞ。又一張は民家に持歸り濁酒をかもして祝ふと云ふ。此社地高き處なれば四邊の森を打越て江戸の邊秩父御嶽の山々を望みて景色の地なり。熊

野社 同じ邊にて爰も山丘の上なり。本社は宮造なり。此にも左右に稻荷第六天の小祠あり。三祠をすゑて上屋を造る。二間に三間共に南向社前の石階を下りて半腹に鳥居あり。是を二の鳥居と云ふ。又石階ありて下に鳥居をたてり。これ一の鳥居なり。例祭は年々九月二十一日なり。此時古例あり。村のものども當番をわかちおき其番に當りしもの宅に集會し。各背を合せ列をなし座を定め。其間一二尺ばかりを隔てかの膝前に白紙一枚をのべ置く。時に七歳以下の小兒をもてるものは怒りたる豆を米に雜へ袋へ入れて持來り。彼しき置きし紙の上に一抔つゝ賦り廻る。これを八道と號す。この日又免田の米を以て濁酒を醸し。八道畢て後宴を設けり。是を神社の舊例とす。たゞ農民のしはざにて古風を見るべきことにもあらざれど又他になきわざなればしぬ。末社 牛頭天王社 二の鳥居の左隅にあり。巽向の小祠なり。八幡社 村南の山上にあり。八幡宮と題せる石標を建つるのみにして社は未だ再造に及ばず。此所より望めば天晴し時は巳午の方に當りて神奈川。品川の海濱よく見え風景ことにすぐれたり。春日社 村の南によりてあり。これも石標ばかりにして社はなし。其他山丘なり。

かりにして社はなし。其他山丘なり。

法雲寺

字本村谷にあり。臨濟宗管村壽福寺末。天正の水帳に寶音寺といへるは當寺のことなりと云ふ。されどいつの頃寺號を改めしと云ふことを傳へず。高石山と號す。開山譽心は天正十六年正月十二日寂す。開基は加々美才兵衛正光なり。寛永六年二月二日歿す。客殿五間に三間半。南向なり。本尊彌陀は別に三間四方。南向の堂を作りて安す。この彌陀は長三尺餘の座像にて行基の作なりと云傳ふ。脇立地藏勢至。長各二尺餘。行基の彌陀を彫刻のとき諸の腫物の患を平愈せしめんと誓願により靈驗著しくして土人の崇仰大方ならず。緣日は年々二月十五日なり。當寺の本堂の中に古き位牌あり。面に『行福寺殿道嚴行尊禪定門靈位』と題し。背に應永二十六年七月四日と彫る。これは管領山内の上杉安房守憲基の位牌なりと云ふ。按ずるに上杉系圖に安房守憲基は應永二十五年正月四日二十七歳にして卒せり。異本には二十七年正月四日三十四歳にして卒す。『法名宗徳院殿海印心元』とあり。當寺の位牌にしるす所も亦よる所あるにや。或は他人の法諱なるや疑ふべし。又立身の彌陀を彫りたる古牌を本尊の左に安じて香火を供す。年號等もなく其謂れを知らず。潮音

寺 字本村谷にあり。臨濟宗にてこれも壽福寺末なり。萬松山と號す。相傳ふ此寺昔は他所にあり。開山は日峯法朝といふ。此人永享十年四月三日寂せりと。然ればことに古き寺なれど其後一旦衰へて廢寺の如くなり。管村壽福寺の持となれり。御入國の後地頭は加々美金右衛門正吉なり。彼が三男十左衛門朝音はことに鍾愛の子なり。承應元年十二月六日病みて歿せしかば正吉哀傷のあまり一寺剋立の志切なり。よりにて此事を本寺の壽福寺の住僧にはかり。爰にうつして再造の功を竣め。朝音が法諱も夫までは法因といひしを改めて潮音寺大庵宗鏡と號して中興開基とし。法諱を以て寺號とせり。此に於て父の正吉より觀音供免及び潮音齋料として三段九畝の地を永く寄附して冥福の資とすといへり。客殿七間半に五間半。巽向なり。本尊は聖觀音。木像にして長一尺二寸許の座像なり。腹内に長五寸ばかりの聖觀音を容る。これは行基菩薩の作なりと云ふ。此本尊及び過去帳は舊院の什物にして本山よりこゝに移せしものなりとぞ。鐘樓 境内に入りて左にあり。鐘徑一尺五寸ばかり高三尺餘。銘文あり。『武之東郡江戸郷内有一蘭若乃加々美金右金吾源朝臣正吉公者菩薩戒弟子抽

丹悃寄進之乎竊以願力堅固此事速成就者也夫鐘之功利宜因爲之 銘曰 瑤埴功作 厚重體圓 杵一纒動 朝數暮千 響穿三界 法光億年 壽長增福 萬代完全 今茲萬治四上章困敦歲仲春吉選日。』



**加々美正光宅跡** 字本村にあり。廣さ一段三畝十六歩。今半は畠となり。半は竹林となりしかど猶稅務免除の地なり。正光は今の地頭加々美金右衛門某が先祖にて。もとは甲州武田家の家人中にも名を得し人の子なりしが。天正十年勝頼没落のとき。いまだ幼稚なりし故ゆかりに付て三河國へ上り。夫より流浪して此地に來り。里正兵右衛門が先祖吉澤某に依頼せり。よりて此所に居住せしが十六歳のとき東照宮に召出され。則當村を采地に賜はり。其頃は猶この所に住せり。こゝに於てかの吉澤を以て名主とせり。正光の子正吉の時江戸にて宅地を賜はり。かの地に移り住せし後この邸は廢したりと云へり。

**舊家者百姓兵右衛門** 先祖は世々當所の郷士なりしが天正の頃より百姓となれり。天正の水帳に民部と云へるこれ先祖の名なりと云ふ。家傳云『吉澤氏は藤原姓にて先祖を近藤左近將監能成と云ふ。其子を吉澤三郎重成と云へり。』年代等詳ならず。其後の事は猶傳へず。この重成が時今の地頭加々美金右衛門が先祖才兵衛正光流浪してこの地へ來り。つひに重成に依頼せり。天正十六年召出されて御家人となりし後猶當村に居れり。その後采邑としてこの地を賜はるに及んで重成を以て此村の名主とせり。今も本村の内に正光が宅の跡ある事前に出せし所なり。かく正光が爲にはよしみある重成なれば地頭より世々名主役を命じけるとぞ。しかのみならず寛文年中より地頭の家人の内に連なり。苗字帶刀をゆるされて月俸若干を受くること今に至りてかはらず。**百姓孫右衛門** 天正の水帳には七右衛門とあり。笠原氏にして藤原姓なり。小机城主笠原美作守綱信の庶流なりといふ。**百姓長兵衛** 石塚氏なり。天正の水帳には右近とあり。佐竹右馬頭義敦の男石塚彦四郎宗義が末流なりと云ふ。この餘百姓甚藏と云ふものあり。これも佐竹左京大夫義仁が末葉木下次郎と云ふものの庶流なりとて今も木下を氏とせり。天正の水帳には四郎左衛門とせり。

## 卷百二十八 村里部

### 橘樹郡 三 稻毛領

**上菅生村** 古は菅生郷稻毛庄小机領を唱へしが、今は是等の唱も皆失ひ、たゞ庄名を領名にかへて稻毛領と號するのみ。中古菅生七郷とて菅生の唱を被る村七ヶ村ありと云ふ。その七ヶ村の名は傳はらず。たゞ五段田村のみ菅生郷と稱すれども、これは近き頃ひらけし村なれば其數にはいらざるべし。當村農民の内に往昔鎌倉將軍時代、年貢を輸納せし券書を所藏せしものありしと云ふ。されども今はうせたりと。又云ふ下菅生村の里正丈右衛門は、鎌倉時代に飛脚を業とせしもの家なりしなどともいへり。とかくふるさ村なることしるべし。小田原家人所領役帳を閱るに『高田玄蕃介が知行三十貫文。同人寄子給三十貫文。合て六十貫文小机菅生。』とあり。また下に出せる五段田村の鎮守杉山明神の棟札は、慶長十八年四月一日に再造せし時のものなり。その文に『領主本田佐渡守、兩代官小栗九郎右衛門、岡本八郎右衛門。』としるせり。彼里正丈右衛門が藏する文書に上菅生郷矢野左馬助が知行分を岡本、小栗の兩人にあづけ置きしかば、彼が指揮をうくべきよし、本多佐渡守正信が此村の名主百姓等に命ぜしことあり。されば矢野左馬助といひしものも、むかしこの地を領せしと見ゆ。此人は北條家の家人なりしにや。かの所領役帳に矢野彦六といひしもの、神奈川を領せしこと見ゆれば、かく程近の地にて、同姓の人領せしよしなれば、かたゞ一族にてもありしか。是等によれば御入國の後は上、下菅生、五段田



等の村々は、佐渡守正信が領所なり。その後上地となりて、齋藤飛騨守賜はれりと云ふのみにて、其年代等は詳ならず。正保二年改定ありし田園の簿を閲するに、その頃は當村及び五段田村ともに一村なりしを、齋藤攝津守、本多四兵衛、市岡太左衛門等が知行せし由しるせり。この内本多、市岡の二人が知行は元祿年中割地の時わかちて五段田村となれり。齋藤が知行はこれよりさき元祿元年、上地となりて伊奈半十郎が御代官所となれり。これより世々子孫に傳へて支配せしが、元文三年田中休藏喜乗が御預所となり、いくほどもなく同五年、再び伊奈半左衛門忠達が支配となれり。延享元年より同二年までは川崎平右衛門、同三年より又伊奈半左衛門忠達かはり、寶曆三年より岩手伊右衛門、同六年より志村多宮、同九年より明和二年までは辻源五郎等前の如く遷替せしが、この後又伊奈半左衛門忠敬が支配所となり、その子左近將監忠尊が時までつゞいて支配せしが、寛政四年かの家職を失ひし後は、菅沼安十郎が御代官所となれり。この後もしばしばかはりて今は小野田三郎右衛門信利が支配所となれり。初め御料所となりし頃、元祿三年に時の御預伊奈半左衛門忠順檢地して貢數を定めたり。この後新墾の陸田一町七段九畝三步は、寶曆八年に志村多宮檢地せり。又水田一段六畝三步と陸田四畝六歩の地は、天明七年伊奈攝津守たゞして新田となれり。又昔大野原と號して此邊の村々にそひたる曠野あり。もと當村及び下菅生村持地にして古は野錢場なり。正保中改の頃は村高の外、永一貫九百七十五文を出すよし記せしは、この大野原よりの貢物なりと云ふ。この地の近郷菅、中ノ島、登戸、宿河原、堰、小田中及び上、下菅生ともに、八ヶ村に分配して新墾せり。すべて段數百五十一段八畝二十四歩、この内十六町二段九畝は當村の持なる事は、享保十六年寛播磨守正鋪が檢地して定めし所なり。この餘五段田、天真寺新田

の二村も今別に村落はなしたれど、是も昔は大野原の内なりしといへり。抑この大野原の地は丘谷多き地なれば、土性もまた種類多しといへども、大抵は眞土砂交りの所多し。田畑山林三所ともにひとし。家數百四十五軒、平地に散住す。江戸日本橋よりの行程は五里なりといへども其實は猶遠しといへり。

高札場 村の中央字宗久宿にあり。

小名 稻ノ目 村の東にあり。土人の傳へに古へ村内に稻目圖書と云ふ人ありし故に。この地名おこれりと云ふ。今その子孫なればくはしきことをしらず。隣郡多磨の内坂濱村高勝寺に稻目尾張守と云ふ人の位牌ありと云ふ。これも圖書が一族なるにや。按ずるにこの稻目と云ふ地名の起りしは古きことなるべし。鎌倉八幡宮の文書の内文永三年三月三日武藏目代と宛所ある狀に云『鶴岡八幡宮領武藏國稻目神奈川兩郷』とあり。此頃は神奈川に對してかく云ひしをみればいと廣き地名なることしるべし。此邊すべて稻目と云ひしならん。今はわづかの所をいへり。 飯室 松本の東につゞきたる地なり。此所に丘山あり。 大道 或は

臺道とも書く。村の北なり。此邊古は鎌倉への街道にして多磨川その南を流る。この所はその川岸にして渡津あり。これを大道の渡と云ひしとぞ。又の傳へに今この邊にすめる百姓治兵衛が家はその頃の船子の家なりと。今の登戸の渡は大道渡のうつりしならん歟。 宗久宿 大道のならびにあり。古へはたゞ宿村と書きてやど村と唱へしが六十年このかた宗久宿とよぶ。或は省略してしゆく村とばかりもよべり。村民源兵衛が家譜を閲するに先祖丹澤吉左衛門義廣元和七年菅生郷北條家浪人齋藤宗久が塔となるといへり。今村民に齋藤を氏とする舊家あり。宗久は恐くは彼が先祖にして此所に住せしか。然れどもまさしき證據を得ず。 明王 これも大道のならびなり。この所に不動院と云ふ寺院ある故にこの名ありしなるべし。 土淵 明王のならびなり。按ずるに多磨郡日野領の邊に土淵と云ふ庄名あり。日野領はこの地を去ること遠からざる所なればよしある小名なるべし。 萬吉寺 土淵に屬する耕地なり。昔此所に萬吉寺と云ふ寺ありしが何の頃か廢せりと云ふ。 長澤村の南にあり。下菅生五段田入會の所なり。 三田村の西方なり。 栗ヶ谷 三田のつゞきなり。 大作 これも同じつゞきなり。以上三ヶ所は皆五段田村入會の地なり。 押沼村の東南なり。 榎木戸 村の北。



登戸村の堺なり。相州厚木邊への旅人此道を往來す。路傍に小高き塚あり。上に榎あり。古の木はかれて植繼ぎしわか木なり。以上二ヶ所は村落中の小名なり。

**星川** 今或は千川ともかく。堤外の耕地にして村の北にあたり。今五段田村の名主丈右衛門が所藏の文書によればこの地名も永祿の頃よりありしことしらる。此餘耕地の字沼田の内柳町。寒谷。瀧ノ下。池田の内橋場。南藏。梅田。宮郷。外五段畑。その外内手耕地。川久保。祖父ヶ谷。二枚橋。諏訪原。葛谷。寺山臺。手耶臺等の字あまたにして枚舉に暇あらず。

**升形山村** 村の東にあり。攀登ること凡二三町程にして頂に至れば高平なり。眺望いとよし。永祿十二年武田信玄小田原へ亂入の時今の名主忠左衛門が先祖横山式部少輔弘成此所に壘を築きて北條家の爲に守れりと云ふ。小田原記を按ずるに信玄は此時平間を渡りて稻毛十六郷を放火せしこと見ゆ。此邊もかの十六郷の内なるにや。又土人の説に稻毛三郎が城跡なりと云ふ。もし然らんには横山もかの舊跡をとりたてゝ壘とせしにや。

**飯室山** 升形山の竝にあり。或は觀音山ともいふ。これは此山下のつゞきに廣福寺の觀音堂ある故の名なりとぞ。頂に古松あり。これを觀音松とよぶ。又木の形斜曲なる故に曲り松ともいへり。此山下に棚田あり。其兩崖に十五六所の穴あり。土人は是を長者の穴と云ふ。口は狭けれど内は廣し。今は山崩にあひて口狭みたり。いかなる故に穿ちしと云ふことをしらず。このみにあらず。すべて村内にて地を掘るとき穴にほりあたることありと云ふ。是もかの穴居のあとといはんか。自餘の諸村にもかゝる穴あり。

**谷川** 西の方五段田村より來り村内にて稻毛川崎二領の用水と合す。此支流宿河原村にあり村内を歴ること纔に四町ばかり幅二間ばかり。土人此川を向山の川と云ふ。村落より南の山のあなたを流るゝ故なり。又細溪の川流あり。これは細山村より來り村落の中央にして大丸用水に合す。山下を流るゝゆゑに山下川と呼ぶ。

**稻毛川崎二ヶ領用水** 村の北の方登戸村の界を流る。西の方菅村よりきたり東の方宿河原村に達す。村へかゝること十六町ばかり幅四間。又大丸用水も菅村よりそゝぎ殘水谷川に合して二ヶ領用水に在る。**溜井** 三ヶ所あり。一は字飯室谷にあり。濶さ三畝ほど。一は村の西南字池谷にあり。これは三段八畝ほど。當村および五段田兩村の持なり。一は一段七畝ほどにて村南字大谷堀にあり。

**韋駄天社** 廣福寺の前。高き丘の上にあり。村内の鎮守なり。勸請の年代を傳へず。本社は宮作りにて丘上の平地にあり。上屋二間に三間。東向なり。神體は二軀あり。一は社中にあり。長八寸ばかり。一は神輿におさめて廣福寺の觀音堂にあり。此像は長一尺二寸ばかり。共に立像なり。祭禮は年々九月十五日。廣福寺持なり。加々美遠清が考に『式内男衾郡稻乃賣神社は祭神稻田姫なり。當社も同社にて稻田姫を韋駄天とあやまれるなるべし。』と。此説は當所の小名に残りて稻ノ目と云ふ所ある故に此考あるなるべけれどもさせる證據あるにあらず。

**山王社** 村の南字長澤谷にあり。小社にして覆屋あり。社前を距ること一町餘にして鳥居を立つ。祭禮年々八月二十日神酒を供す。廣福寺持。當社勸請の年代は詳ならざれども古き社なるべし。相傳ふ古は上下菅生及び五段田村等の惣鎮守なりしが。昔年祭禮の日百姓等争闘のこと公訴せしかば是がために郷村の困窮大方ならず。是より村々思ひ思ひにわかれて別に鎮守をさだめしにより自ら此社は衰微に及べり。この邊は五段田入會の地なれば今に社修造のときは五段田にて修理せりと云ふ。

**神明社** 字明王にあり。小祠にて西向なり。神體は石にてその狀細く長九寸ばかりなり。例祭は年々九月十六日なり。眞福寺持。**稻荷社** 小祠なり。小名明王にあり。例祭年々九月二十七日。神酒を供す。**長森稻荷社** 字榎戸の内百姓善藏が持地の内にあり。神體は木像にして長五寸ばかり。善藏が外祖父某は江戸青山にすめりと云ふ。それが雕刻せしなりとぞ。縁起一卷あり。元文五年十一月安立寺の僧日現ここに勸請すといへり。

**廣福寺** 村の東字松本に在り。仍て松本山と號せり。近年稻毛三郎が舊跡なりとて稻毛山とも號すれど。是は後人の附會なるべし。新義眞言宗にて多磨郡坂濱村高勝寺の末寺なり。慈覺大師の開闢にして遙の後長辨と云ふ僧中興せりとぞ。このとき今の宗旨に改めしなるべし。長辨は後堀河院安貞元年正月十日化す。それより第二世忠運に傳へ以後代々連綿して今に至れりとて合せ記せし位牌あり。されども此村の名主の話によれば彼が先祖の起立にて纔に百四五十年に及べりと。今法流始祖とする所の法印定賢元祿十六年八月十二日寂すと云ふものこれ實の開山なるべし。それよりさき慈覺大師の開闢にして後長辨といへるが中興せしと云ふものは昔別にこの地にありし寺院のことにしてその廢跡を定賢が起立せしなるべし。**表門** 西に向へり。兩控作りなり。**客殿** 表門を入りて正面にあり。八間に



七間。本尊五智如來は木の座像にして長二尺許。村民源兵衛と云ふものの建立する所なり。昔の本尊は彌陀の立身にして長四尺餘なり。これも今客殿に安置せり。寺寶 不動畫像一幅 永祿年中村の民。田澤源兵衛繁義が寄附する所なり。弘法大師の筆と云傳ふ。

玉一顆。鐘樓 客殿に向ひて左の方にあり。寶曆十一年鑄造の鐘にて圍徑二尺餘。銘文あれど考證に益なれば略す。觀音堂 鐘樓の邊の小高き所にあり。三間四方にして欄干附なり。聖觀音の木像立身にして長四尺ばかり。行基の作なりと云ふ。又同作なりとて木像の地藏あり。別に龕に藏して此堂に安ず。これも四尺許の立像なり。又稻毛三郎重成の像とて雲龍の文ある狩衣を著し金の梨子打の烏帽子著たる座像あり。長一尺五寸ばかり。これも近世の作と見ゆ。又小山田別當稻毛三郎等が木主あり。これら皆後世こしらへし物なることは論ずべくもあらず。想ふにこの寺の背後に升形山とて古壘跡あるによりてこれを稻毛三郎に附會せしことなるべし。剩へ近き頃はいづ方よりか古き五輪の石塔を持來りこれを稻毛三郎が墓石なりと云ひ。此觀音も三郎が守護佛なりと云へり。いづれもつけ難きものなり。地藏堂 二間に一間半。門外韋駄天の社地向ひて石階の右にあり。地藏の木像。長六寸許。弘法大師の作なりと云ふ。裏門

北に向へり。安立寺 字飯室にあり。日蓮宗荏原郡池上本門寺末。法言山と號す。相傳ふ應長年中當所の代官職佐伯馬之介（或は丞とも云ふ）と云ふ人開基せりと。然るに開山日等は天正十一年七月二十一日寂すと云ふときは年代違ふに似たり。今村民善藏は開基馬之介が子孫なりと云ふ。彼が家にて建立せしとて代々の法證を刻したる石塔あり。永祿天正の頃の年月を刻せしもの若干あり。其中に『淨天院法言日正。俗名佐伯隼人。永祿五壬戌正月十七日。』とあり。これによれば隼人が冥福の爲に馬之介日等に託して當寺を起立せしならん。さてこそその法證法言の字を山號とせしならん。土人の慶長年中と云ふものは誤なるべし。客殿は七間に六間。南向なり。本尊三寶祖師を安ず。番神堂 客殿の向ひにあり。二間四方。神體三十軀ともに長五寸ばかり。七面堂 客殿の良の方にありて坤に向へり。二間四方。神體は長二尺ばかりの座像なり。不動院 村の西字土淵にあり。新義眞言多磨郡坂濱村高勝寺の門徒なり。開山開基の來由詳ならず。客殿六間に四間半。東向なり。本尊大日。長一尺ばかりの座像なり。不動堂 纒なる堂舎なり。客殿の後にあり。前に高さ三間ばかりの石坂あり。不動の像長一尺ばかりの座像なり。作しらず。眞福寺 村の中央字明王にあり。是も高勝寺の門徒

なり。明王山と號す。開山源海寛文九年遷化せり。客殿四間半に三間。東向なり。本尊不動。長一尺二寸。座像なり。是は村民田澤繁義寄附する所なり。昔の本尊は立身にして長一尺ばかり。宗實院 村の巽の方にあり。臨濟宗京都妙心寺の末寺なり。雲龍山長谷寺と號す。起立の來由を尋るに當宗の觸頭江戸牛込松源寺の檀越に長谷川長十郎と云ふ人あり。かの寺の住僧古同和尚に深く歸依し。それがために大野原の内宿河原。五段田。平の三村入會の地にして田島山林十町餘の地を買得て宅を營み古同が幽棲の所とす。其頃はまた寺院の號もあらず。古同示寂の後江戸三田龍元寺の僧侶正天と云ふもの來り住せり。時に多磨郡中藤村長圓寺の末寺に宗實寺といへる廢寺ありけるをれがひあげてこゝに引うつしけるにより始めて寺院の號をなせり。これ延享五年なり。この年又離末して妙心寺に屬せり。よりにてかの古同の師大拙和尚を開山とす。この人は延享四年五月二十八日寂せり。もとより幽棲の爲にいとなみしことなれば門も客殿も設けず。境内に入りて正面に觀音堂あり。三間に四間。巽向なり。觀音は十一面にして長八寸ばかり。立身なり。傳教大師の作なりと云ふ。本尊は釋迦の座像。長一尺五寸ばかり。安阿彌の作なり。これも觀音堂に安置せり。古同和尚書をこのみければ種々の書籍ありしが今は皆亡失せり。古碑七八基境内にありしかど新寺のことなれば寺に拘はりしものにはあらず。

舊家者名主忠左衛門 累代名主役をつとむ。横山氏にて先祖は式部少輔弘成と云ふ。弘成は小田原北條家の家人にて行方彈正に屬せり。永祿十二年武田信玄此邊へ亂入のとき田島兵部左衛門之房。駒林圖書定朝等と同く壘にこもりて防戦せしこと諸記録に載る所なり。かのとき楯籠りしは村内升形山の城なるべし。この近郷に横山を氏とするもの若干あり。皆忠左衛門が家より別れしものなりと云ふ。按ずるに下菅生村本遠寺の過去帳に『大種院殿宗圓日心大居士。永祿二己未年八月廿六日。横山式部少輔八十歳。』とあり。これ弘成が父なるにや。今忠左衛門が家傳を尋るに桂淨日久信士慶長八年九月七日とあるもの古しと云ふ。これは將監と稱せしもの、法證なりともいへどそのまことをしらず。彼が家に古刀二口を藏す。一は長一尺ばかり。一は長一尺二寸梵字と劍とを彫る。二口ともに直焼にして相州の作とみゆ。又二尺ばかりの古刀あり。いづれも先祖より傳來のものなりと云ふ。百姓善藏 氏を佐伯と號す。先祖を佐伯馬之介と云ふ。馬之介は慶長の頃この地の代官を勤めしものなりと云ふ。これは本多佐渡守正信が領主たりし頃のことと云ふ。又按ずるに村内安立寺はかれが先祖の起立なりと云ふときは舊家なることは疑ふべからず。百姓平兵衛 先祖は由あるものにもあらざれど

卷百二十八 村里部 楯樹郡 三



舊き家なり。字大道に住せり。古へ多磨川今の所より南を流れし頃は其の屋後に水涯ありてその所の渡津を大道の渡とよべり。平兵衛が先祖その頃の渡守なりしとぞ。このことさせる證もなければ近郷のしる所にして土人の口碑にも傳ふる所なり。又かれが持の山のうちに世々の古碑あり。延文の頃を始として四百六十年來のもの並びたり。ふるき家なることは疑ふべからず。

百姓彌五兵衛字

宗久宿高札場の下に住せり。氏を齋藤と云ふ。當所開闢の頃の舊家なりとぞ。鎌倉時代の年貢の手募。その外にも古文書あまた秘藏せしかどいぬる戌年の水溢に流亡して今は片紙ものこらず。又仁左衛門と云ふ農民も齋藤氏なり。かれが元祖は修験者にて上泉坊といひしと云ふ。此餘次兵衛と云ふもの氏を當麻と云ふ。是等みな舊家なりといへり。

褒善者百姓田澤源兵衛氏房

源兵衛は村民源太郎義章が子にして世々豪富の聞えあり。安永五年俊明院殿日光御社參の時。先規により御湯釜を古河の御宿城へ奉りければ。奇特なりとて白銀三枚を賜はり永く苗字を名のり其身の一代は帶刀することゝ免さるゝのむれ石谷備後守命を傳へり。其後氏房世の中に志を得んとて種々の計をめぐらしければ家産これがためにやぶれて今は古の如くにはあらず。抑田澤氏の來由をたづぬるにこの所の舊家と云ふにもあらず。先祖主計介氏義は一色の庶流にて甲州武田家につかへしが天正

年中武田家滅亡の後東照宮につかへ奉りけり。その二子吉左衛門義廣流浪の身となりしがゆかりにつきて當所にすめる北條家の浪人齋藤宗久と云ふものをたづねてこゝに來りそれより長くこゝに住せり。その子源兵衛繁義年わかき時は當所の名主役をつとめち出家して念佛三昧の聞えあり。この人の功德ありしこと少からざれば歿後そのこと台聽に達し。かゝる奇特によりて子孫へも御褒賞ありしとぞ。子を源兵衛氏勝と云ふ。有徳院殿の御代に松下伊賀守昭當が推舉によりて子源太郎義章と同一御遊獵の時御前に出でしげく御用のことをつとむ。就中享保八年三月二十二日黒駒ヶ原御遊獵の時も父子ともに參りけるに勢子の入夫一萬餘人を進退すべきよしを伊賀守命をつたへ御貝太鼓役湊五右衛門。淺野又八をそへられて人數のかけひきせり。そのことこたへたりしかば次の日父子へは御褒賞ありて物を賜へり。同き年六月明石と云ふ龍蹄を賜へり。同き十一月白牛をあづけ給ひ。同き十年のかた門前の往來へ火のもと制禁の高札を建つることゝゆるさる。是百姓等が身にとりては面目をほどせしことなり。又昔武田信玄より先祖へ賜はりし左文字の陣刀及び武田家の諸侍より東照宮へ奉りし起請文を台覽に備へしかば。陣刀は本阿彌某鑑定して竹屋某これを磨き新に白鞘を造らしめられて下したまへり。十

一年三月二十七日下總國葛飾郡小金原にて御獵ありしとき氏勝義章等二十人のものと共に出でて入夫を進退す。同年鈞命によりて荏原郡鈴ヶ森八幡の神社を造立す。このとき松平左近將監乘邑命をつたへて伊奈半左衛門忠達その事を達せり。落成の後御遊獵ありてその結構を賞せらる。同年又御尋ありて家の由緒書を寫して奉り。同十一年四月郡中川崎宿の邊へ御遊獵の時多波の幽谷にうづもれし楠の埋木の太き三圍ばかり長さ五丈あまりなるが年久しくありしを氏勝見出して多磨川を流し來り六郷の邊にて台覽に備へしかばかの父子の者へ白銀五枚を賜はりしといへり。子源太郎義章壯年より松平伊賀守昭當。大久保佐渡守常春の推舉により御鷹狩のたびごとに出でて御用の事をつとむ。又土地の開墾興復の事にも功勞少なからざりしこと聞えありしかば榛澤郡小西某が領地及び葛飾幸手領松下が領地等に就て其地形をたゞし貢税のことを鑿す。又大岡越前守忠相義章に命じて武藏野新田の地形をたゞしむ。時に義章その所を點檢して新田の興廢得失を考へ記して一卷としてさへげたり。これより以來その地の御代官上坂安左衛門と議して新墾すべしとの命ありしかど義章思ふ所ありて固く辭し奉り。この後大久保佐渡守松平伊賀守あひついで歿したれば又義章を推舉するものなかりしによりこれより家に塾して勤を廢せり。されどもかれが土地水利の事に長じたるを以て東叡山より仰下り御配下の寺領の地を檢せしめらる。義章畏りてまづ金澤領邊の地につきて地理及び貢數等をたゞしけるに其始末いと分明なりしかば皆人服せり。よりてこのとき賞を加へ白銀十枚を賜へり。かゝる事業もありて民間におひ出しものにはいとめづらしき人なりしが。のみならず風流の道にもたづさはり家産の暇には和歌を好みて冷泉大納言爲久卿の門に學ぶ。後爲村卿の時に至りて二人が秀逸をえらびて奉るべきよし命ぜられければ。すなはち百二十首をえらびて一卷として呈しけり。時に延享三年四月なり。是よりさき元文元年一品法親王に侍し奉りし頃日光山記。志賀記及び歌仙考三卷を新に編集してさへげれば御感ありて綾の巻物を賜へり。延享二年四月法親王上洛し給ひし時仰ありて義章も從ふべかりしかど父の喪にあうてはたさず。神奈川の宿まで送り奉りし時命ありしかば一首をよみてさへぐ。『千町田の畔をゆづりて道ひろきをしへになびく膝がわかかなへ』と申せしかば御感ありてものなどたまひけり。かくて法親王内へまわり給ひし次でに地下の歌よみのこと叡問ありしかばかれこれ聞え上げたまふうちにかの早苗の歌のことにも及びたまひしとぞ。義章文筆をこのみ著述の書もありき。武藏野地名考。小田原分帳など世人もしりたり。かく世々の事跡あれば源兵衛氏房が褒賞ありしも故あり。今その子を源太郎といへり。



**下菅生村** 郡の西にあり。もとは小机領に屬せしが、いつの頃よりか今の如く稻毛領にかはれり。寛文九年の水帳には小机領としるしたれば、それより後に改めしことしるべし。その地は大抵大野原にかこまれし山間の地にして高低ひとしからず。東は有馬、土橋、平の三村にさかひ、北は上菅生村に犬牙し、南は都筑郡石川村に隣り、西は天真寺新田及び大野原を隔て、斜に都筑郡王禪寺村、本郡五段田村に犬牙す。四境の内東の方ばかりは隣村の地につき、其餘は悉く大野原を隔て、他村に至る。東西は一里餘、南北へ三十町ばかり。江戸日本橋より六里餘の行程なり。村内昔より二區にわかれたり。それもさかひ犬牙してわかちがたけれども、大抵村の西南の方を字藏敷と號す。或は藏色ともかく。おのづから別に一村の如し。此地を除きて外を土人下菅生といひ、或は本村とも呼ぶ。されどその實は藏色もこの村の小名にして、もとより下菅生の内なり。本村の方は昔木造七左衛門が知行なり。近郷平村の農家に傳ふる所をきくに、平の一村と下菅生の半を合せて五百石の地を慶長年中木造へ賜はりしなり。御入國の後遠からずして賜はりしこと知るべし。又村に傳ふる元和七年の檢地帳の殘闕あり。この地頭木造が改めしなりと云ふ。此後元祿五年にも地頭五郎兵衛檢地せり。かくて久しく木造が家にて知行せしが、明和元年御用地となりて御代官辻源五郎へ預けらる。此後も貢税の收納に至りては元祿五年の水帳を用ゆと云ふ。それより三年の後伊奈備前守が支配所となり、寛政四年より菅沼安十郎等かはりて今は小野田三郎右衛門信利が御代官所なり。この餘新田若干あり。又大野原新田と號するものあり。その事は既に上菅生の條下に辨ぜり。藏敷の方は椿井喜之助が知行する所なり。その賜はりし年代は傳へざれども正保以前よりしかりと云へば、大抵御入國より下らざる世に賜はりしならん。この後寛文九年、

同人の知行金程、細山の二村と同一檢地せりと云ふ。土性は黒、赤土交はれり。山へよりたるかたは天水場にして早損の地多し。或は山間の田はその所の清水を澆ぎ、平田は溜井或は谷川を引用ひて耕作す。村民冬春の間は炭竈を設けて炭をやき、江戸へ送りて産業の資とすること近郷の村々に同じ。村内に鎌倉古街道と號して小逕二條あり。一は字住二所と云ふ所の丘山の内にあり、長二町餘。一は藏敷の内の小丘の間にあり、長五六町。そのかみ往還ありし頃いづれの村より、いづれへ達せしと云ふことは今より知るべからず。

**高札場二ヶ所** 一は字新屋敷と云ふ所にて名主の宅の前にあり。一は藏敷の内にあり。

**小名 稗原村**の南の端にあり。 犬藏 藏敷の内にてこれも南の方なり。 柳町 犬藏の西北を云ふ。 籠久保村の東の方なり。以上二ヶ所も藏敷の内にあり。 膳棚村の東の方にあり。 初山村の東。平村の境を云ふ。いとひろき所にて村の地三分の一は此初山の地なり。 ないし 初山の内にて村の東にあり。其文字をしらず。 住二所村の東北にあり。 代官山村の北。住二所よりも猶北にて大野原新田の内なり。小名の起りし故を傳へず。今此邊より布目ある瓦を掘出す事あり。昔館などのありしにや。

**鍛冶屋敷村**の北の端にあり。 二子塚村の北界にあり。このあたり上菅生村の内に二子塚と云ふ塚あり。ゆゑに小名となれり。長澤村の西北にあり。五段田上菅生兩村入會の地なり。 堂見物 長安寺の前を云ふ。土人の話に往古この寺の堂宇華麗なりしかば營造の後人々群集して見物せしゆゑに此名起れりと云ふ。

**谷川** 五段田上菅生の二村より流れ来る。又天真寺新田より流れ来る一流及び村内藏色の谷々より出づる清水と合して一流となり村の中央字西谷と云ふ所にて上菅生より流るゝ谷川と合し一條の川となりて東の方平村にそゞぐ。幅二間より三間までなり。

**薬研坂村**の西南にあり。中低くして薬研の如し。故に此名あり。 島坂 東の方平村の境にあり。わづかなる坂なり。



**溜井二ヶ所** 一は廣さ一町に餘れり。一は纔に三畝ばかりの所なり。共に藏敷の内在あり。 **板洗堰四ヶ所** 皆御普請所なり。

一は字住三所にあり。長二間半高四尺五寸横九尺。一は字西谷にあり。一は前堰。一は前田にあり。大さ皆同じ。

**御嶽社** 藏敷の内字犬藏にあり。宮作りにて上屋あり。例祭年々九月二十九日。神樂を奏す。勸請の年代を傳へず。按ずるに多磨郡

勝田村杉山神社に古き鯉口あり。其文に敬白藏王權現武州下多東菅生大藏應永五六月道圓としるせり。この鯉口をかか社の物なりといへども疑ふべし。恐くは當社のものにていつの頃よりか故あつて杉山の社にかけしものならん。この御嶽社は多く藏王權現をまつりしものにて字犬藏の地なるを以ておもへば菅生大藏とあるは全く犬藏の文字なるをあまり書せしものなるべし。又今は此村橋樹郡に屬しぬれど古へは多磨郡の内なることもしらる。地界もまた多磨の内とおもはるれどいつの頃よりか當郡にいれり。寶藏寺持。 **住二所社**

字長澤にあり。鎮座の年代及び祭神を詳にせず。或は熊野十二所なる歟。もし然らば住十の二字音の近きによりて假借せしなるべし。

**神明社** これも長澤にあり。本社一間四方の宮作にて覆屋あり。前の住二所の社と當社と共に長澤谷の鎮守なり。古は上菅生の山王を鎮守とせしが故ありて當所二社にあらためしことはすてに前に見えたり。二社とも例祭十一月一日にて隔年に祭れり。秋月院持。 **八幡社** 藏敷にあり。其地の鎮守なり。神體は木像にて長八寸許。鎮座の年歴詳ならず。例祭年々九月十五日。七座の神樂あり。平村神職小泉信濃が持なり。

**八幡社** 字初山にあり。これもその所の鎮守なり。相傳ふ元久二年の鎮座なりと。されどそのまきしきことをしらず。本社は宮作にして前に拜殿あり。三間四方。共に南向なり。入口に石階あり。高さ十間ばかり。例祭は年々九月十一日なり。これも同持。

**稻荷社** 字稗原の内にて丘の上なり。小祠にて覆屋あり。社前に古松樹相對してたり。共に大さ二圍ばかり。これを以て思へばふるき社なることしるべし。例祭年々九月二十八日なり。稗原の鎮守とせり。秋月院持。 **愛宕社** 藏敷の内字犬藏にあり。社地のみ存して祠なし。何の頃廢せしことをしらず。

**秋月院** 字長澤にあり。曹洞宗平村東泉寺末。長澤山と號す。元祿五年に記せし緣起あり。その略に云ふ。小田原北條家人大木頼母之助と云ふ者あり。天正元年地震せしとき家つぶれて夫婦ともに厭死せり。その子主馬之助無情を感じ。頓て一片の煙となして父が守本尊の釋迦の像と共にかの遺骨を背負ひて諸國を廻り。その後高野山に納め。其身は道心者となりて此地に庵をむすべり。その子孫慕ひ來りて孝養を盡せり。こゝに片山圖書と云ひしものも小田原家人なりしが天正十八年落去の後郡内平村に隱居せり。いかなる故にや山田彌右衛門と云ふものを駕としてかの地へとゞめ其身は兩人の男子をつれて當所へうつれり。文祿年中圖書歿せしかばかの大木入道が庵の側に葬り。墓守として仙住坊と云ふ眞言宗の道心者を大木が庵のあとへ住ましめり。これよりかはるく道心者すみしが宗覺房と云ふ僧の住せし頃遂に一寺とせり。圖書夫婦が法名を秋月月心といひしによりて院號とせり。此時かの大木が子孫その祖の舊蹟なるを以て己が開發の田若干を寄附せり。その後寛永年中に本尊釋迦佛をはじめ回祿にかゝりて失へり。その後三龍と云ふ僧寺地を今の地へ移せしは正保年中の事なり。延寶年中牛波と云ふ僧のとき又燒失せり。今は準胝觀音を本尊とす。これはもと松平土佐守が息女法詮泡影院觀窓夢幻大姉の護持の靈佛なりしが大姉延寶八年六月二十一日歿せし後緣故ありて乞ひて當院の本尊とせしは元祿十二年のことなりと云ふ。今も崇敬して庵に納めて常に開かず。前立の彌陀の木像長五尺ばかりなり。客殿は六間半なり。開關の事實は前の如くにして今本山の第二世石岑を開山とし。片山彌兵衛某法詮仙壽院秋月眞惠法印を開基とす。此法印は寛永四年十一月六日歿せしと云ふ。緣起にいへる片山圖書が子孫なるべし。圖書が法名の字をふたゞび法名とせしことあやしむべし。 **本遠寺** 字初山にあり。日蓮宗荏原郡池上本門寺末なり。

初芳山と號す。當寺起立の事實を尋るに永祿二年に僧日受造立す。此人六年の間住職し。同七年三月朔日寂せし後は八年の間繼續の僧もなかりしが元龜元年に至りて身延山第十六世日新の弟子日立と云ふ人入院せり。この後天正十年九月日安住職の時當村の人横山七右衛門上菅生村の人石卷三之助等かの僧に歸依し力を合せて堂宇を造立せり。御入國の後天正十九年境内の地を免除せらる。其地は三十五間に二十八間ありしとぞ。日安の弟子日慶。慶長十八年十一月入院の後境内のせまきを嘆き。地をそへ賜はらんことを七度に及ぶまで願ひあげしかば松平伊豆守信綱これをつぎてやうやくみゆるしをうけ。七十七間に三十七間の添地を賜はりしもの今の境内なり。客殿五間半に六間。巽向なり。本尊三寶祖師。作しれず。 **長安寺** 藏敷にあり。淨土新宗京都佛光寺末。當寺は山號なし。開祖法林院淨安は慶安十七年十一月二十八日寂せり。ふるくより此寺はありて東本願寺派に屬せしが淨安がとき今の派となれり。故に此人を開祖とせりと。本尊彌陀。立身にして長一尺五寸ばかり。 **寶藏寺** これも藏敷の内字犬藏にあり。新義眞言宗都筑郡麻生村王禪寺。末山なり。



御嶽山と號す。開山開基の事實を傳へず。本尊は聖觀音。長一尺八寸ばかり。立身の像なり。

**舊家者百姓三左衛門** 横山を氏とす。先祖を式部少輔と稱す。小田原北條家に仕へしものなり。村内本遠寺の堂を再興せし下菅生村の農民横山七右衛門もまた式部少輔を祖とすと云ふ。是等一家より出でしものにや詳ならず。今に至るまで十三代に及ぶといへどもその間のことたゞ本遠寺過去帳に姓名をしるすのみにて別に傳へもなし。今子孫別家せるもの村内にすべて五軒あり。

**天真寺新田** 大野原の内にして下菅生村の西にあり。その地はもと上菅生村の内にて長尾村持添の地なりしを、享保年中江戸麻布天真寺の住僧孝岳この地をかひとりとて開墾せり。故に寺號を以て地名とせり。土人傳へて云ふ、この地開墾の後丘原のむなく樹木なきことをうれひ、田畝の外には松樹など植ふしが、今はその餘の木も暢茂して深遠の地となれり。かの松樹を植ふるとき一株ごとに孝岳般若經一卷づつを讀誦せしなどいへり。されば今も山丘の内般若臺と云へる字あるはこれ其故なり。此地も寺の祠堂永續のために設けし山なれば、小宇の祠を營みて祠堂山と號せり。故に江戸にては山號を佛陀山と號すれども、當所にては祠堂山天真寺とよべり。當所新墾の後享保十六年箕播磨守正鋪奉行して檢地し、あらたに水帳をつくりて天真寺へ附屬せり。その田は山谷を除きて十三町九畝二十七步、その餘野錢場八町六段と定めらる。その頃天真寺より地主代として、宗寔といへる僧をこゝに居らしめてこの地の事をはからはせけり。今も宗寔が居迹を祥翁庵とて存せり。この餘は民家と云ふものもなく、近村の民に附して耕種せしむ。すべて村中のことは下菅生の名主の進退によれり。その界は東南の二方より西の方まで下菅生の新田の地に犬牙し、乾より北の方は五段田村新田の地に接す。その内にも南の方は

都筑郡の界なれば、山嶺もつとも多し。東西凡二十町、南北は十町餘。江戸日本橋より行程七里餘なり。

**高札場**

**小名** 日吉嶺 南の山の嶺を云ふ。下菅生村の新田を越えて都筑郡王禪寺村に日吉山王あり。その社地のつゞきにある峯なれば此名あり。當所の小名はすべて山によりたる名なれどこれを以てその邊の地に字して田畝の區別をなせり。下竝に同じ。春日森 東の方にあり。享保年中檢地の頃は春日明神祠及び庚申塚などありしよし今は廢せり。稻荷山 春日森の續きにあり。昔この地に徳藏院といへる修驗住居してその屋の後に稻荷の祠ありしと云ふ。今は修驗の居も稻荷の祠も皆廢して名のみ残り。鷲ノ峯 南の方を云ふ。又此邊に不動丸と云ふ所あり。その所に不動石と彫りたる石あり。享保十六年に建てしものなり。それより少し隔て、九層の塔あり。その所を塔ノ丸と呼ぶ。塔の高さ一丈ばかり。法蓮華經の文字ありて層毎に一字を雕る。第六級より第九層に至る。その外には文字見えぬ。上の方に三層の石膚は下の四五層とは甚だ殊なり。下より四五層上まではいと古色なり。それより上は後に修補せしなるべし。此塔もとは江戸天真寺境内の舊物なりしをこゝに移せりと云ふ。般若臺 村北五段田新田の邊より東の方を云ふ。此外にも如意峯。金剛岩。天王檀。龍煙岫。望遠嶺などと云ふ地名あり。皆當所祠堂山となりし後に設けし雅名なるべし。

**祥翁庵** 般若臺より谷を隔て、北の方なり。これ開發のとき天真寺の地主代として來りし宗寔が爲に設けし庵なり。祥翁と云ふはそれが道號なり。今はこれを天真寺の住僧退居の處とし兼て祠堂とせり。地境幽寂にして塵囂の汚なし。もとの祠堂は字塔ノ丸の下にありしといふ。今は破壊してそのかたちのみのこれり。祥翁墓 墓所の中にあり。祥翁がことは前にも畧みえたり。この人は享保二十年四月十三日寂せり。嘗て天真寺の地主代として當所開墾のこと及び祠堂佛閣成就せしも皆この人の功勞なればとて入寂の後こゝに葬り。且禪師の號を贈りて祥翁寔公座元禪師と號す。又後に石を建てその功を刻せり。文は孝岳の撰述する所なり。孝岳は元文元年十二月二十日寂せり。孝岳當所のこと心盡せしかば土人これを慕ひ當所へも石碑を建て遙拜忘らずと云へり。



**五段田村** 昔は上菅生村の内なりしが、元祿三年伊奈半左衛門忠順が檢地せしとき初て割て別村とせり。されどこれよりさき既に端村のごとく自ら本村と區別せしにや。正保年中改定の田園の簿に上菅生村の村高を記して五段田ともにとあり。さればにや分村より前の記録かへつて本村より詳なるもの多し。今の名主丈右衛門が所藏の文書及び村内觀音寺の古記録、鎮守明神の古棟札等によるに小田原北條家分國の頃は、小机城主北條左衛門佐氏堯が領地にして、御入國の後文祿三年に竹川監物檢地せり。その頃は御代官所なりしにや。慶長年中より本多佐渡守正信が領地にして、一旦その家人矢野左馬助と云ふもの、給地として充行ひしことなどしらる。正信歿後その領地を收公せられしが、又その子野介正純御咎ありし頃、沒收せられしものべからず。その後市岡多左衛門正春が知行信州下伊奈の代地として、村内三百石餘の地を賜はれり。その餘はいつの頃か本田四郎兵衛某に賜へり。この村近き世の字に古五段田、新五段田とて二區にわかつてり。天和年中に至りて市岡正春が子、五左衛門正義一人が知行のみ残りて本田が知行は上地となり、その跡は御料所となれり。其頃の御代官詳ならず。同九年よりは八木仁兵衛支配せしよし記録あり。市岡が知行は字長澤、大作、根岸の三區なりしを、これも元祿元年より御料所となり、すべて伊奈半左衛門忠順が支配所となれり。初本田が知行せしは字五段田と云ひし所なりしかば、これをば古五段田と唱へ、市岡が上地をば新五段田と呼べり。かくて享保十六年より元文五年までは、田中休藏喜乗と伊奈半左衛門忠達二人分ちて支配せり。同四年より寶延元年までは川崎平右衛門定孝替り、同三年の頃よりふたゝび伊奈半左衛門忠達が支配所に復し、寶曆四年よりは岩手伊右衛門、同六年より志村多宮、同九年より明和四年までは辻源五郎、同五年より伊奈左近將監忠郁、寛政

四年より菅沼安十郎かはり、その後も遷替ありて今は小野田三郎右衛門信利が支配所となり、分村の後新墾の田を檢地ありしことふたゝびなり。享保十八年筥播磨守正鋪が檢せしは九段十八歩なり。又寶曆八年には時の御代官、志村多宮がたゞせしもの一段三畝十八歩の地なり。いづれも陸田なり。この餘大野原の地を新墾せし田十五町六段六畝あり。これも筥播磨守が檢地にて享保十六年のことなり。この地も當村の御代官にて管する所なり。この地すべて山にそひたる所にて中央にもまた山あり。かゝる地なれば甚高低あり。民戸はその間の平地にあり。その數は百五十二軒に及べり。水田は低く窪き所にあり。早魃のときは用水乏しくて早損あり。大に霖雨すれば用水満溢して水損にあふ。清溪多きを以て所々に棚田あり。土性は眞土、黒土まじはれり。田少くして畑多し。この餘松杉雜木の林五百六十五ヶ所、合て九十一町五段五畝一步あり。又秣場十町六段二畝皆百姓の持なり。村の四境は東は上、下菅生の兩村に犬牙し、南は嶺上の小徑を界として天真寺新田に接し、坤は都筑郡麻生王禪寺の二村に至り、西は高石村にて谷川を界とす。北は登戸村に隣り稻毛用水を界とす。乾は菅村に隣れり。東西へ長くして凡一里、南北は短くして纔十町にあまれり。江戸日本橋より行程七里にあまれり。村内に鎌倉古街道と號して往還あり。西南の方都筑郡麻生村と郡中高石村との間より入り、一里を過ぎて良の方登戸村に達す。

**高札場** 二ヶ所 字五段田及び根岸の一ヶ所にあり。

**小名 長澤** 村の南にあり。大作 長澤の西につゞきたる所なり。此二區は上菅生村の地と入あひし所なり。五段田 北の方なり。根岸 大作の續きなり。以上の四ヶ所は民戸のある所なり。もとより土地高低あり。其高き所をば臺と呼び。低き所をば谷と呼ぶ。長澤臺長澤谷と云ふが如き是なり。押沼 上菅生の地を隔て、遙に平村の邊にある飛地なり。爰にも民戸五軒あり。平、臺



村の中央なり。三田臺 平ノ臺の竝びなり。籠場臺村の西にあり。栗屋臺同じつきなり。或は栗谷ともかく。雁又臺

高石村の境にあり。塔ノ腰 長澤の内にあり。明王峯 村の東北にあり。手保井谷臺 大野原新田の地にあり。押沼より以下

の地は皆上菅生村入合の地なれば彼村にも此字あり。梅ヶ谷臺 栗屋臺の内にあり。油免 村の東にあり。不聞臺 村の

北にあり。川小屋 長澤の内なり。或は川小谷ともかく。鍛冶臺 西の方なり。昔鍛冶を業とせし者爰に住みけるにやと云ふ。

内匠坂 村の北の方にあり。登五六町ばかり。相傳ふ昔この所に内匠と云ふもの住せしと。内匠が事はその事實を詳にせず。日

向坂 わづかなる坂なり。上菅生の方にあり。

谷川 高石細山兩村の谷々より出づる清水高石村の内字二枚橋邊にて一流となりて村内に入る。水路凡三十町を経て稻毛用水堀に入

る。此間堰九ヶ所を設けて所々の耕地に注ぐ。淵二間より三間まで。又一條の谷川あり。村内長澤の山溪より出づ。是も所々の耕地に注

ぎて下菅生村に達す。大丸用水 八村組合の用水なり。多磨郡大丸村より多磨川を引わかち數村をすべて菅村の境より村内に入

り北の方なる耕地の用水となる。所謂八村は當村及び大丸谷口長沼押立中の島上菅生菅等の村々なり。又稻毛川崎二ヶ領組合用水をも分

水して登戸村犬牙の耕地にそゞぐ。板洗堰 二ヶ所 一は字前堰にあり。一は字山下にあり。共に長三間高九尺横三間。御普請所

なり。土堰 七ヶ所 一は字天神下にあり。長二間高八尺横三間。一は字二枚橋にあり。長三間高一丈一尺横四間。一は字大崩にあり。

長二間高一丈横三間半あり。一は字西谷にあり。長二間高九尺横二間半。一は字和田にあり。長二間高五尺横五間。一は字大谷にあり。

長三間高一丈一尺横二間。一は字長澤にあり。長二間あり。高八尺横三間。いづれも御普請所なり。この餘土堰十八ヶ所あり。これはみ

な百姓持。懸渡井 字明王前にあり。長五間半高二尺横一尺七寸。上菅生村組合の御手當金の息を以て修理の費にあつ。溜井

二ヶ所 一は籠場池と呼ぶ。段數四段ほど。字牛谷にあり。一は五段田谷にあり。是を庄左衛門池と呼ぶ。段數三畝の地なり。水車

三ヶ所 その大なるもの車の徑二間半。小なるものは徑九尺と一丈となり。三ヶ所共に村民の營む所なり。産物 炭。菅生筴。

杉山社

村の西山丘の上にあり。村の鎮守にて觀音寺の持なり。勸請の年代を傳へず。本地不動の木像を神體とす。立身にして長二尺五寸餘。本社は一間四方にて宮作なり。覆屋三間四方。東に向ふ。それより十歩ばかりをへだて、鳥居をたつ。それより北の方一町許にして西へなれて石階七十餘級あり。祭禮は年々九月二十日。當社勸請の年代を詳にせず。古棟札に慶長十八年卯月一日領主本田佐渡守再造のよしをしるしたれば、それよりさきに勸請せしことしるべし。其後慶安二年の棟札には領主市岡太左衛門本田四郎兵衛とあり。又寛文九年の棟札に市岡五左衛門本田善之助とあり。天和四年のには市岡五左衛門一人をしるせり。末社 鹿島社 本社に向ひて右にある小祠なり。石にて作る。諏訪社 字長澤にあり。其所の鎮守なり。勸請の年代を詳にせず。本社は宮作にて覆屋あり。諏訪大明神の五字を扁す。天海書とあり。例祭は年々九月十六日なり。盛源寺持。神明社 字中澤にあり。是も長澤の鎮守なり。本社は宮作にて覆屋あり。前に坂あり。例祭八月七日。諏訪の社と隔年に行はる。菅生村廣福寺持。稻荷社地 大野原新田の内に

今は小高き塚あるのみ。その來由をしらず。道祖神社地 大野原の内栗屋臺にあり。碑を立つるのみにして祠はなし。年々村内の松飾をこの所にて爆くと云ふ。

觀音寺

村の北にあり。新義眞言宗多磨郡坂濱村高勝寺末。萬休山福聚院と號す。開山開基詳ならず。相傳ふ昔萬休といへる山伏あり。濃州の産にて久しく相州鎌倉に住せり。後當村に來り草庵を結びて幽棲す。歿後遂に其庵を以て一字の堂舎とす。其頃は今の字堂屋敷と云ふ所にありて福聚院と號せし由。いつの頃か今の所に移りかの萬休が名を取りて山號とせり。もとより靈佛の觀音を安置せしを以て是を寺號とせりとぞ。萬休が遷化の年代は傳はらず。歴代の内寂年を記せしものの中に古きは法印惠秀寛永九年五月廿五日化すと云ふ。是より中興開山は法印賢隨なり。享保八年八月十一日化す。本尊大日。長一尺餘の座像なり。作しれず。門前に石階あり。寺寶 不動像一軀 木像にて長二尺。立身なり。開山萬休在世の時護持の本尊なり。昔は當寺の本尊とせし像なりと云ふ。法螺貝一口 長一尺一寸ばかり。殼の廻り一尺五寸ばかり。是も萬休所持の品なり。地藏像一軀 弘法大師の作なりと云ふ。木像にて長一尺餘。立像なり。これももと四國の津の寺の僧良榮といひしもの靈夢の告に任せて此所に負來り當院に安置し。その身もこゝに住せしが文祿七



年四月十三日寂せりと云ふ。 観音堂 客殿に向ひて左にあり。三間四方。本尊聖観音は智證大師の作なり。白檀木像にて長七寸ばかりの立身なり。 古碑一基 境内の墓所にあり。應永三年八月二十三日と彫る。 盛源寺 字長澤にあり。曹洞宗都筑郡片平村修廣寺末。清水山と號す。客殿七間半に六間。共に異向なり。本尊は三尊彌陀。木像にて長一尺餘。立身なり。開山は貴山玄頓。天正十九年十一月二十六日寂せり。 観音堂 二間半に三間。客殿に向ひて左にあり。銅像の聖観音を安ず。長一尺六分。近き頃江戸の或家より寄附したるにより此堂を建立せしと云ふ。 辨天社 門外右側にあり。神體は座像にして長五寸。慈覺大師の作なりと云ふ。 秋葉、春日、稻荷合社 客殿に向ひて左の方高さ一丈ばかりの丘上にあり。四十年前の勸請なりと云ふ。

舊家者百姓新左衛門 川井を氏とす。今は年寄役をつとむ。系圖一卷を藏せり。その略によるに川井氏は上杉家の庶流なり。上杉民部大輔憲顯が末男右近將監憲義江戸河合を領せしにより河合三左衛門尉貞氏と號せり。この人の庶流或は川井ともしるせり。新左衛門はその末流なりと云ふ。されど其系圖も甚だ麤脱にして詳なることはすべてしるべからず。 百姓丈右衛門 累代名主役をつとむ。氏を星川と云ふ。相傳ふ先祖は鎌倉將軍家の頃飛脚を業とせしものなりしが菅生村の星川と云ふ所に居住せしゆゑ在名を名乗れりと云ふ。小田原北條家分國の頃軍陣の走廻りもありしといひ傳ふれどもさせる證據もなし。古文書を藏せり。その文に

壹人扶持被下中田修理為より可請取候其上走廻次第何分も可有御扶持者也仍如件  
四月十三日  
笠原奉

星川久左衛門  
爲恩賞五貫文來秋以給田可被下は間抽粉骨可走廻は其上依走廻猶可扶助者也仍如件  
辛巳卯月十九日  
笠原奉

以上  
態中遣はかみすかほの郷矢野左馬助知行分岡本八郎右小栗九郎右に預置は間此兩人指圖次第に可仕は以上  
八日十四日  
本田佐渡守  
正 信花押  
かみすかほ  
名主惣百姓中

ほらかわ田地二十石之分後にことへわたら□□は其由 佐州侯意には山之儀ハ新明山渡可申はへのつかい道具はかみとさいせん中分に渡可被申以上  
九月三日  
岡八郎右衛門 花押  
小九郎右衛門 花押  
かみと與惣右衛門為  
同 たつ  
遠藤 伊右衛門為

登戸村 郡の乾にあり。郷庄の唱を傳へず。江戸日本橋より行程五里。東は宿河原村。西は多磨郡



中野島村、南は稻毛、川崎二ヶ領用水を境とし、上菅生、五段田の二村に及び、北は多磨川の對岸多磨郡和泉村に接せり。東西二十二町餘、南北十一町。民戸二百二十五。地形平かにして土性は眞土に砂交れり。陸田は少く水田は多し。もとより川涯の村なれば洪水の患あり、村内一條の道を開けり。相模國津久井邊に往來せり。東北の方より上菅生村に達せり。廣さ二間ほど、長さは十一町ばかりかゝれり。此所を江戸道ともいへり。村の開けし年歴は詳ならざれども、村内善立寺に藏する天正十七年の縁起に承和の頃は既に此村名ありしことをしるせど、それも據とすべからざれば定かならず。遙の後永祿の頃小田原家人所領役帳に『十二貫五百文。多波川北駒井登戸。太田新六郎知行。』とあり。按ずるに駒井は多磨郡駒井村にて、登戸は則ちこの村なるべし。此頃は二村共に多磨川の北にありとみゆ。今正しく當村は川の南にあり。多磨川の流はもとより變遷多く、古今しばしば水路をたがへり。こは洪水のをりから水勢勵しければ、それが爲に水路を遷してこゝもかく南北に分れしならん。この村元は河野平十郎及び中根壹岐守知行なり。中根氏の賜はりしは傳へず。されど正保の頃までは中根壹岐守知行たることはものにせたり。河野氏は寛永二年十二月五日、武藏國橘樹郡、上總國武射郡の内にて六百石を知行せり。此地を賜ひしは此時なるべし。それも寛文年中慶祿に改められしと、河野家の譜にのせたり。されば兩家の知行も收公せられてより御料所となり、元祿三年伊奈半十郎が承りにて檢地をなせり。其後も新墾の田ありしかば、享保十八年筧播磨守も檢地せり。又大野原新田二十六町二段五畝六歩、外に秣場十三町ありと云ふ。伊奈氏より引續きしばしば御代官の遷替ありて、今は小野田三郎右衛門支配せり。

高札場 村の中央小名東耕地にあり。

**小名**

大島 村の西南を云ふ。

柳町 村の南なり。

中田耕地 中央より東南へわたりてこの唱あり。

内河原新田 多磨

川の岸によりてあり。按ずるに元祿年中の郷帳に登戸新田と爲して高百六十六石餘の地あり。この内河原新田は則ちその地なるにや。今の高も百九十六石餘と云ふときは大なる違もなければその高もまたたるならん。この地古は民家も三十軒ばかりありしと云ふ。川崩を恐れて他へ移りしが猶二十軒ばかり存せり。今は名のみ新田と呼べど古田の内に屬せり。

**多磨川**

多磨郡中之島村より入り郡内宿河原村に達せり。村内を流ること八町餘。多磨川の幅はこゝにも限らず。水潤るれば幾十間にあまれども霖雨の頃は忽ち數町となれば何許と云ふは定めて言ふべからず。

用水 村の南を流る。幅六間もしくは十間の所あり。稻毛川崎二ヶ領の用水となせり。又中之島村よりそく用水あり。共に村内の用水となり宿河原村に達せり。

**稻荷社**

村の乾の方小名東耕地にあり。この所の鎮守なり。本社は纒なる祠にて拜殿三間に二間。東向。前に石の鳥居あり。勸請の年歴を傳へず。村内光明院の持。

第六天社 村の長の方にあり。わづかなる祠なり。光明院の持。

**善立寺**

村の巽の方にあり。日蓮宗池上本門寺の末。龍登山と號す。開山日成天正四年二月寂すといへり。住僧の話に當寺は慈覺大師の親立にて古寺なりき。日成より第十世の時不受不施の罪によりて一旦廢寺となりしを日徳と云ふ僧これを再興せり。舊くより傳へしものは皆失ひ。纒に天正十七年八月源貞と書せる縁起あり。其縁起の内考證とすべき事なければのせず。客殿七間に六間半。西向。本尊を安ぜり。番神堂門を入りて左にあり。纒なる堂なり。中根壹岐守が姫の起立なりと云ふ。

七面堂 番神堂の並びにあり。二間に一間半。拜殿三間に三間。神像女體法冠を戴き岩石の上に踞す。長九寸餘。

**長念寺**

村の西北小名上臺にあり。淨土眞宗西本願寺の末。永池山と號す。開祖法專坊文祿二年十月五日遷化なり。法專坊俗姓は小林氏にてはじめ修驗なりとも神職なりともいひ傳へり。一旦佛に歸して此寺を起立せり。元は東派にして相模國大住郡下落合村長福寺の末なりしかど西派に就て後本山の直末となれり。彼開祖の所持なりとて昔は武器などを傳へしかど今はなし。客殿八間に七間。南向。本尊彌陀を安ぜり。往古當寺の東邊に池ありしこゝより出現せ



りとして銅佛の薬師一軀長一寸八分の座像あり。これも本堂に置く。元和元年當寺の第二世祐念と云ふ僧の書したる薬師の縁起あり。其中に元は眞言宗なりしに此頃改めて淨土眞宗となれりなど云ふことをのせたり。是によれば祐念が時一向宗となりしと見ゆれば今の寺傳とはたがへり。いづれか正しきことをしらず。鐘樓門を入りて左にあり。鐘の高さ四尺圓徑二尺。銘は考證とすべきことなけれども姑く左に記せり。

視夫法品之制。莫先於鐘。故禪教律院建寺安衆。必先庀焉。武州橋樹郡登戸村。永池山長念寺者。乃大谷末山。而眞宗之靈場也。殿堂門楣百舉悉足。華鐘梵具久爲缺典。累代再興思茲不少。稍爲之地。當住玄榮普告諸方檀越欲催爐輔之功。遂先師之志。乃臯氏盛器。離婁督繩。融金烹銅。萬煉千煨。九乳脫模。法器新出。志願之功不日而成。宜達逸音於法界。永垂勝利于將來。啓迪之德豈不碩耶。美於其志。迺誌之焉。銘曰。登戸夷閣。若海舟航。長念梵苑。樂邦餘光。囊籥功就。蒲牢肆颺。昏饗帶月。曉鳴和霜。式警沙界。遙徹萬疆。脫幽出厄。啓蒙息狂。風誦雨順。國豐民康。萬石有磬。洪音茲常。

元祿十六歲次癸未二月十五日

當寺第五世權律師玄榮  
同 善榮

光明院 村の中央小名中村にあり。眞言宗新義都筑郡王禪寺の末。稻荷山と號す。開山源空永祿九年正月十二日寂せり。開堂河野三左衛門通良元祿二年九月十八日死すといへば通良は中興開基なるべし。此外のことは往古二度まで丙丁の災にかゝりて古記を失ひしかば詳なる事を傳へず。河野氏祖先の墓も境内にあり。客殿八間に七間餘。南向。本尊木像の大日座像長一尺五寸なるを安ぜり。十王堂門を入りて左にあり。二間半に三間。東向。

卷百二十九 村里部

橋樹郡 四 稻毛領

宿河原村 郡の北界多磨川の南の涯にて、二子の渡より二十町許西にあり。江戸日本橋より行程五里。村内に宿と云ふ小名あり。此處昔開墾の頃の村落なるにや。もとより多磨川の河原なれば、宿河原を以て村名とするならん。北條家人所領役帳に十二貫五百文は江戸の内駒井、宿河原太田新六郎康資が寄子飯島某が給地の由を載せたり。今村民忠左衛門が先祖某は元和、寛永の頃駒井村より移りしと云ふ。其かみ駒井は地の續きし所なれば、當村もと彼村の枝郷などにや。されば役帳にも駒井、宿河原と高を結びて記せしならん。又彼帳に多磨川の北の村々を江戸の庄に屬せし由記したるによれば、當所も昔は此川の北に在りしにや。川瀬の變遷は常なり。しかのみならず今の地形を見るに、水中にかけ入りて地を失ふ所多し。試に寛政年中の地圖に照し見れば、其頃より今は水流そこばく北に移れり。舊流の跡は溜井の如くにして明かに見ゆ。僅二十年餘りの變革かくの如きときは、二百年前のこと思ひやるべし。されば昔は今の瀬より遙に南を流れしならんと覺ゆ。さてこそ川北の地と同く江戸には屬せしなるべし。今は稻毛領に屬して郷庄の唱は失せり。戸數百三十六煙、村内に散在せり。村の四境東は堰村にて、巽は久地村及び上下作延村に係れり。南は長尾村の地に犬牙し、坤は上菅生村にて、西は登戸村なり。北多磨川に限り、その對岸の正北は多磨郡駒井村にて、乾は猪方村、艮は北見村なり。東西十九町許、南



北十四町程。總て平衍の地にして只巽坤の方少く岡に係れり。土性は眞土に砂錯れり。陸田少くして水田多し。水利便なりといへども水涯の村なれば屢水災あり。御入國の後久く御料所にして、伊奈半十郎忠治が家にて支配せり。享保二年地の半を割きて、有章院殿の御靈屋料として増上寺へ御寄附あり。其頃よりか御料の方も田中休藏が支配所となり、延享の頃は川崎平右衛門替れり。其後遷替のこと詳ならず。再び伊奈半左衛門忠達が支配所となり、それより菅沼安十郎眞昌等かはりて、今は小野田三郎右衛門信利が御代官所と増上寺領入會へり。古田の外に段取の陸田あり。十町一段四畝十八歩の地にして延享二年、堀江荒四郎芳極が檢地せし所なり。又上菅生村請地の内大野原新田と云ふ地十三町三段四畝及び草錢場九町あり。又字中河原新田十一町四段五畝九歩は寶曆二年、神尾若狹守春央が檢地にして、字中ノ島新田六段八畝は同十一年、伊奈半左衛門忠宥が檢地より高入りの地となれり。又蘆原八畝十二歩、字の東にあり。

高札場

小名 中ノ島乾の方なり。桑原中央なり。西光田西の方。下ヶ綱村の巽にあり。地名の起は舊跡の條に出す。四ッ

谷 中央より東の方にあり。宿村の東なり。

多磨川 村の北を流る。西の方登戸村より來り東の方堰村に入る。村の西へ係ること十九町許。登戸渡村の西の方にあり。こ

れ往昔鎌倉街道の渡なるべし。此兩岸ともに村の地なれど西岸は僅の地なり。しかも登戸村の接地にして其村へかよふ渡なれば登戸の渡と呼ぶなるべし。今村民久兵衛久右衛門二人が持なり。此二人舊き家にてこより上の方谷ノ口の渡も昔は二人が持なりしを近き頃其村へ譲りけれど猶官吏回村の時此川をわたれば舊によりて二人棹すといふ。稻毛川崎大用水 字中ノ島にて多磨川を分ち村内を

へて東隣堰村に達す。此間所々の水田にそゞ。是も昔は字四ッ谷邊にて引分ちしが十年前川瀬替りて其所は平地となりしゆゑ今の地へ移せり。この二ヶ領用水の新堀も村南を流れて隣村に達せり。堤 多磨川南岸にそひてあり。村内に係ること十九町許。又長尾堺にも堤あり。是も長十八町許。

正八幡宮 村の中央字北村の内觀音堂地内にあり。もと社地五畝六歩多磨川北岸に在りしが川瀬北に移りて悉く流失せり。故に觀

音堂を常照寺境内に移してしばらく其跡へ社を建つ。村の鎮守なり。大さ三間に二間の社にして長向なり。神體は弓箭を把りて馬に跨りし容にて長五寸許。例祭は九月廿八日なり。勸請の年代を傳へず。常照寺の持なり。稻荷社 字北村にあり。小祠なり。常照寺持。

稻荷社 字宿にあり。是も小祠にて同寺の持なり。富士淺間社 村の坤にあり。小祠なり。長福寺持。廢社 二 是も同寺

の持にして稻荷の社なり。昔は除地一畝十八歩字中島にありしが其後流失せり。又字北村に二歩の除地にて幸神祠ありしが是も流失して今はなし。

常照寺 村の中央字北村にあり。新義眞言宗多磨郡中野村寶仙寺末。雁楚山正幡院と號す。開山法印賢智は文龜二年四月七日化す。

當山開關の年代寺傳區々にして其實を知るべからず。寶徳元年四月とも又は康正三年とも明應六年四月ともいへり。寶徳より文龜二年まで五十年餘なれば何れを實としても年代相當せり。又寺傳に永正十七年二月寛永十六年四月再びの回祿にあひし由を記したればとかくに舊記も烏有となりしなるべし。客殿八間四方。東向なり。本尊大日。長二尺五寸。木の座像なり。門は兩控作にて客殿の正面にあり。

觀音堂 今常照寺の門に入りて左にあり。されども境内のものにあらず。八幡の社ある所除地二十歩は此觀音の堂地なり。爰に移せし事は已に前に記せし如し。堂は北向にして大さ二間に三間。十一面觀音長一尺許。立身の木像なり。春日の作と云傳ふ。長福寺

村の中央字前田耕地にあり。天台宗多磨郡深大寺村深大寺門徒なり。星霜山圓光院と號す。開山開基の名及び年代を傳へず。客殿四間に三間。南向なり。本尊地藏。長五寸許。木の座像なり。龍安寺 淨土宗多磨郡世田ヶ谷領喜多見村慶元寺末。無量山壽經院と號す。本尊は彌陀にて客殿は六間四方。東向なり。門兩控作にして正面にあり。開山空譽文祿二年の起立なり。又地藏の像あり。毎月の末に至



りて一度此所にかへり。其餘は他所を奉し回りて一夜を限りて所々有信の家に宿す。因て俗に一夜地藏と呼べり。鐘樓客殿の前あり。銘文左に載す。『於下ヶ網耕地田地三依面之處末代永々付置之因茲知朝暮音聲者也。右奉寄進意趣者爲恩報謝也。武州橋樹郡稻毛領宿河原村無量山龍安寺壽經院第七世源運社甚譽上人圓也代。無量山高 橋樹水長 大千世尊 百八曉霜 冥福惟祈 家聲彌揚 殷々之亮 不朽無疆 于時元祿十三庚辰四月八日 無量山龍安寺。』三社相殿門に入りて左にあり。北向にて一間に一間半。秋葉稻荷天満宮の三座を祀る。舊跡綱下ヶ松 村の巽の方岡の上にて古松樹なり。岡下の田地を下綱と字す。樹邊は長尾上下作延と當村すべて四村の接地なれば此木を以て界域をわかつてり。大き三圍にして枝葉いとうるはし。相傳ふ太閤秀吉小田原陣の時神宮寺の城に向ひし搦手の寄手上杉家の兵この松に綱を下げて丘下に下りしゆゑかく名づけしと。其途の次第はこゝより日野にかゝりて神宮寺に打向ひしといへり。

**長尾村** 郡の西北にあり。江戸日本橋より行程五里半。東は上作延村に隣り、西は平村に接し、南は土橋村に境ひ、北は宿河原村に及べり。されどこゝのあたりは他村と犬牙したる地なれば、定かに分つべからず。東西凡十五町半、南北へは二十三町に餘れり。村内大抵二區に分れ、南の方を神木長尾と云ふ。山丘多くして溪谷あり。されば近き頃土俗改めて谷長尾とよべり。此邊地形高低ありて早損の患あり。北の方を河内長尾と云ふ。河内は多磨川の内と云へる事にや。こゝは山丘の根にそうて平かなる地なれば、用水の便りは宜けれど多磨川の水溢れば水損の患あり。土性は真土に砂交り、若くは黒赤土、野土交れり。陸田多く水田は少し。此村舊くより開けしと土人傳れども、しるしとせることはなし。元は長岡村と唱へり。村民の内に今も長岡を氏とせるもの残り。故に此名を負ひしにや。長尾景虎こゝに來りしゆゑに、今の名に改めたりと云ふ。按ずるに景虎當國へ來りしは永祿三年なり。且行軍の間と

いひ、況や經歷せしのみにて、こゝに住せしと云ふにもあらざれば、此説の牽強なること論に及ばざるが、しかのみならず永祿二年改定の小田原家人所領役帳に『太田新六郎。二十一貫文稻毛長尾村。鈴木共に恒岡分。』とあり。又按ずるに太田新六郎知行の内、長尾村百姓持の地と鈴木某が持の地と通じて、二十一貫文は恒岡が給分と云ふことなるべし。もし然らば鈴木の下分の一字を脱せしなるべし。今村内に鈴木を氏とせる舊家あり。然も小田原北條氏に仕へし由を傳へり。さればかの鈴木と云ふはこれなるべきか。猶舊家の條に載せたり。此頃は北條家人の領分にて、村名をも今の如く唱へしこと知るべし。御入國の後村上左衛門が采地なりき。此家へ賜ひし年代は下に記せる上作延村の農民のもてる日記に、元和八年彼村及び當村の内を合せて五百石を賜ひし事を載せたり。さあらんにはこゝも元和八年に賜はりしこと知るべし。正保年間のものには大河内善兵衛、村上左衛門、木造七左衛門知行と載せたり。此頃三氏入會の地なり。村の傳へには元祿三年これ等の人は、所領を外へ替賜はりて御料所となれりと。是も上作延村の舊記には元祿十一年上地となれりとあり。何れを正しきとすべきや、再々所を替られしも又知るべからず。檢地は元祿四年伊奈半十郎が承りて糺せり。此外新墾の陸田は其折々に檢地ありて箕播磨守、伊奈半左衛門等承れり。御料所となりし後は、屢御代官の遷替ありて今は小野田三郎右衛門の支配所なり。

**高札場** 小名大谷にあり。

**小名 柳町** 村の西。平村の地續きなり。

兵庫谷 谷長尾の内等覺院のあたりを云ふ。名義の起りは舊家久彌の條に出せり。

下河原村の東北を云ふ。河内長尾の内なり。

富士ヶ谷村の中央にあり。

十三本原村の東南上作延村の地續の原野を云ふ。



事は上作延村に出せり。池田村の北。宿河原村の境にあり。

雪ヶ坂 村の西にあり。

狐坂 東の方なり。

大師穴

谷長尾にあり。内に石像を立つ。長一尺許。所々缺損したれば何佛とも分ち難けれど其さまは地藏に似たり。昔に長尾村妙樂寺とあり。又延徳年中月待の斷碑あり。後に出せり。相傳ふ此穴昔より人の入りしことなかりしに享保の頃ある修験の者初めて入りしより其後は土人も折々入りて見るに其内はいとも廣くがんまんの梵字あるは弘法大師の遺跡なりなど云へり。大師穴と唱ふるはかゝるゆゑなるべし。

道善 妙善

源海 彌藤次郎 延徳四年壬子

奉月待供養結衆

道仲妙林

十一月廿日

妙〇彦四郎

土橋二ヶ所

共に二ヶ領用水に架せり。一は小名坂下にあり。一は小名大谷にあり。共に長八間闊五尺許なり。

用水 稻毛川崎

二ヶ領の用水なり。其外多磨川の分水を宿河原村より引來れるあり。又小名雪ヶ坂邊にて掛樋を設け引來れるあり。何れも村内池田耕地のあたりへ沃き殘水は二ヶ領用水に合せり。

谷川 村内谷長尾邊の用水となれり。

堤 多磨川の水除にて宿河原村の接地にあり。

五所權現社

河内長尾の南にあり。村内の鎮守なり。此邊を權現臺と唱へり。祭神及び勸請の年歴を詳にせず。例祭正月五日なり。

昔は流鏑馬の式を行ひしと云ふ。今は僅に其かたばかりを存せり。射手二人介副二人にて桃の弧竹の矢を以て各一手づゝを射る。土人は猶是を流鏑馬と唱ふ。此外九月十四日にも祭をなせり。村内妙樂寺持。赤城社 谷長尾の中央にあり。神體木像長一尺許。是も村の鎮守なり。正月七日祭事あり。又九月十四日にも行はる。是等の祭事何れも五所權現と同じ。其中九月十四日の祭は五所權現と隔年に行へり。村内等覺院持。

白山社 山王社の西に並べり。

神明社 妙樂寺の傍小名鶴ヶ谷にあり。

稻荷社 神明社の邊にあり。

山王社 妙樂寺の前にあり。

以上四祠何れも僅なる祠にて妙樂寺の持。

富士淺間社 村の東にあり。此邊の小名を富士谷といへり。

稻荷社

小名大谷にあり。此邊を水帳には小名池田と書せり。以上の二祠共に小祠なり。等覺院持。

妙覺寺

河内長尾の南にあり。此邊を妙覺寺臺と云ふ。天台宗にて長尾山勝壽院と號す。多磨郡世田ヶ谷領深大寺の末。開山開基詳ならず。客殿八間に七間。巽向。本尊彌陀長三尺三寸なるを安ず。又道情といひし者の木像あり。法體にて座せる像なり。長二尺許。此

人の事は舊家の條に出せり。按ずるに東鑑治承四年十一月十九日の條に『武藏國長尾寺并求明寺等長榮可致沙汰之旨云々』とあり。求明寺は久良岐郡本牧領弘明寺なり。長尾寺といへるは未だ何れの寺院と云ふことを聞かず。當寺長尾村の内にありて長尾山と號し。且當國の内別にそれと覺しき古寺も見えざれば恐くは東鑑にいへるもの當寺の事なるにや。彼條にいへる僧長榮は今豊島郡雜司ヶ谷村法明寺の住僧にて東鑑には法明寺の事を威光寺と記せり。是も今は山號となりて威光山法明寺と號するときは古の寺號を山號とせしこと其例なきにしもあらず。されど寺傳は云ふもさらなり。土人の語り傳へにもよるべき事なければこは今より斷ずべからず。鐘樓 藥師堂前にあり。享保年中の新鑄にて其考證となすべき事なければとらず。藥師堂 境内にあり。三間に四間。東向。藥師の長二尺五寸許の座像。外に十二神將あり。各長二尺許。共に木像にて行基菩薩の作なりと云ふ。

等覺院 谷長尾の乾にあり。天台宗深大寺の門徒。神木山長徳寺と號す。客殿五間に七間。坤向。本尊不動。長一尺五寸。立身の木像なり。開山開基を詳にせず。

千手堂 村の東小名別所にあり。

當村の水帳には此邊を宮谷と記せり。堂は二間に三間。南向。觀音は立像にて長一尺八寸。此邊元は墓所なりしよし。近き頃村民天文十六年丁未八月五日と記るせし古碑をこゝより掘出せり。何人の碑なりや傳へず。



墳墓五塚

小名神木谷にあり。五つながら竝べり。長尾景虎及び従者の墳墓なりと云傳ふれども。景虎は天正六年越州春日山の城にて歿せしこと世に知る所。別に故ある人の塚なるべし。相傳ふ昔此邊より石の匣を掘出せしことあり。大抵一尺四寸四方にて蓋に高印の二字を彫り。其中に眞鍮の丸あり。大き銀杏の如し。これを振へば虚中に物ありて音をなせり。何に用ひし物と云ふことは考ふべからざれど葬具などにやと村老いへり。何れにも古の明器の類なるべし。されどいつしか其物をも失ひて今はなし。道情塚

道情塚

村の南にあり。道誓とも書せり。高橋帶刀とて小田原北條氏に仕へ後法體して道情と稱せしよし。尙舊家太郎兵衛の條に出せり。舊跡陣屋蹟 小名神木谷の東の山根なり。大河内善兵衛村上左衛門が采地たりし頃は此所に陣屋ありき。此邊にてはたま〜古瓦を拾ふことあるよし。又神木堰といへる邊に殿下と唱ふる所あり。陣屋跡のもよりなればかく云ふなるべし。土人今は詛り唱へてとりの下といへり。

舊家者百姓久彌

鈴木氏なり。古は長岡氏にて先祖を長岡將監と云ふ。稻毛の郡司なりしといへど舊記等を失ひたれば何の頃といへる事をしらず。始に長岡將監長岡八郎といへるを載せ。それより今の久彌までの數十代をあらましに記せる一軸を家に藏せり。其中に鈴木と改めし後鈴木兵庫鈴木權六郎等は小田原にて戦死せるよしを載せたり。こは近き頃記せしのみならず正しき事とも思はれざることなれば全文をば漏せり。鈴木を氏とせる故を尋るに長岡八郎繼子なきゆゑ北條氏の士鈴木安太左衛門といへるものを増となせしにより長岡氏をすて、鈴木と改めたりと。村内小名山根通りに今も安太屋敷の唱あるは其名のなごりなるべし。昔はこゝに住せしに其後今の住所小名下河原に移れり。もとは居宅の背後稻荷の小祠ある所に宅を構へしがかつて修造せしとき梁をうけたる柱のほそに『天正十二年乙酉十一月廿日』と記してありしにぞ始て舊き家なることを知り其まゝ補理してものと如く梁うけの柱となせり。家に正宗の小刀あり。是は安太左衛門の男次郎右衛門後に昌阿彌と改めしもの北條氏のために穴山梅雪が江尻の邸へ密使に往きしとき褒美として賜はりしものなりと。世々口碑に傳へり。又行光の刀あり。太田道灌よりの賜物と云ふ。今は本阿彌清俊がきほめの添状を藏するのみにて刀はゆゑありて外へ譲りたりと。此外畫幅等をも藏せり。百姓太郎兵衛 實は高橋氏なり。今は井田を以て氏とせり。先祖は高橋帶刀とて是も北條家に仕へしものなりしが小田原没落の後法體となり此地に世を忍び元和元年六月四日に死せり。法名を金翁道情と云ふよし。

始に見えたる道情塚は其葬地に木像をも妙樂寺に安ずること。是又已に其條に出せり。井田と改めしは流浪の後の後變名せしにて。もと其家人に井田と云ふものありしゆゑに其氏をとれるなりとぞ。井田はもと金井田と號せしが後に金の字を省きしはいかなるゆゑと云ふことを知らず。今井田が藏せし文書及び高橋へ賜はりしもの總て三通を傳へり。其文左に載す。

被下置知行方

一七貫文 丸之内内手 作分同屋敷 一ヶ所 足立之内 島根之村 以上

右千葉<sup>承謙</sup>御老母爲堪忍分丸子村此度渡置申し爲替島根村遣候永代可致知行者也仍如件

甲子三月廿三日

遠山左衛門<sup>奉之</sup>

高橋<sup>茂</sup>

七貫文 丸之内内手 作分同屋敷

一ヶ所 足立之内 島根之村 以上

右去甲子如先御證文無相違可相拘旨被仰出者也仍如件

天正十五年丁亥九月廿日

山角<sup>奉之</sup>総十郎

高橋<sup>茂</sup>

郎等にをくれいよ不便に候然共世上之ふらいに間打すて用等可走廻い仍爲香錢と二拾足遣い以上

五月廿九日

花押

井田<sup>茂</sup>

百姓六郎兵衛 是も井田氏にて太郎兵衛が別家なり。此餘にも井田を氏とせるもの數人あり。何れも舊家なりと云傳ふ。中にも



六郎兵衛は今も太閤秀吉の制札を藏す。舊く村役など勤めし證とすべし。制札の文左のごとし。

禁 制

武藏國稻毛郡

作延郷  
長尾村  
平土橋村

以上三ヶ所

一 軍勢甲乙人等濫妨狼藉事

一 放火事

一 對地下人百姓非分之儀申掛事

右條々堅令停止訖若於違犯之輩者忽可致處嚴科者也

天正十八年四月日印(太閤秀吉の印なり)

上作延村 郡の西北中原道の西の方なり。郷庄の唱は失ひたれど小田原家人所領役帳に、小机作延七十貫文の地を増田某領せしよしを載せたれば、古は小机にも隸せしと見ゆ。増田某は下作延村百姓忠左衛門が先祖なりと云ふ。按ずるにかの村圓福寺の傳によれば、増田駿河守滿榮、北條氏綱の時代より當所を領せしこと知らる。此人永祿元年に歿せしと云ふ。役帳は同二年の改なれば、其頃未だ家督のもの定らざる故に、氏のみ記せしなるべし。又隣村長尾村の百姓某が家に持傳へたる太閤秀吉が禁制の文に『長尾村作延郷平土橋村三村』と記してあれば、作延は郷名の如く聞えたれど、全くさにはあらで村と書くべきを、郷字を記したるならん。又こゝに作延郷とのみ記し置けを以て推すに天正の頃迄も一村にして、未だ上下を分たざりし事知らる。村内なべて山丘にして陸田多く、水田少し。大抵東西をいはば五町餘、南北の徑十町餘。東は下作延村に續き、西は長尾村に接し、南は馬絹村、北は宿河原村なり。

民家五十三軒、多くは山腹に散住せり。村の開けし年歴は詳にせざれど、永祿の頃は前にも記す如く増田某が知る所なり。又土人の傳へに元龜年中、多磨郡八王子の人太石源左衛門領せりと。是はまさしき記録に見えざれば定かならず。御入國の後は御料の地なりしなるべし。元和八年御旗本の土村上左衛門に賜ひしに、元祿十一年故ありて收公せられしと云ふ。按ずるに村上家譜に左衛門信清、天正十八年召出され、關ヶ原凱旋の後二百石の増地ありて、先の所領と合せて五百石を賜はり、寛永三年四月十一日七十七歳にて死せりとあり。是によれば收公せられしは信清が子か、もしくは孫の時代の事なるべし。御料の地に復せしよりは御代官長田作兵衛、江川左兵衛、松平九郎左衛門、伊奈半左衛門、芝村藤右衛門、川崎平右衛門、菅沼安十郎等相代りて支配せしが、文化十年より小野田三郎右衛門信利替りてより今も同支配所なり。檢地は文祿三年小宮山八左衛門奉行して糾せりと云ふ。されど此事たゞ土人の口碑に傳へたるのみにて、證すべきものなければたしかならず。その後寶永四年江川左兵衛、小長谷勘左衛門二人のうけたまはりにて貢米の數を定めり。又享保十八年寛播磨守、寶曆十一年伊奈半左衛門檢せしことあれど、此時は後年開きたる新墾の地を糾されしのみなりとぞ。村内南へよりて東西に貫きし小徑一條あり。相傳ふ往古の鎌倉道の名殘なりと。當村より江戸日本橋まで行程五里。二子渡より半里に餘れり。

高札場 村の北。村長の住する邊にあり。

小名 別所村の西南の境を云ふ。或は別所臺とも唱へり。

段子谷 村の北なり。古きものにはたこ谷と假名にて書く。由來詳

ならず。

末崎 東の境を云ふ。村内用水のとゞまりなれば名とすと云ふ。此邊にて用水を隣村へ漑漑せり。

新井村の南なり。或は



荒井ともかけり。相傳ふ昔荒井書雲と云ふもの住せし地なりと。何人なることを知らず。或は云ふ村の鎮守赤城の社の神職なりしと。未だ其詳なることを聞かず。十三坊原村の西南丘上の平地を云ふ。此邊長尾村の續きにしてかの村にても此地名を唱へぬれど文字を十三本原と書きて唱へもおのづからことなり。名義は二村とも傳へを失ひて詳ならず。或は十三佛を供養せし跡なりと。是によれば十三坊と記す方ましならんか。されど巨樹十三本ありし地と云ふ傳説もあれば今何れを是なるべしとも定め難し。天神原村の東北なり。古は天神の社にてもありしにや。向原村の南なり。こゝに聖松と云ふ偃蹇して五六十間餘にはびこりたる古松一株あるを以て其あたりを松下とも又陰山とも呼べり。此松いかなるゆゑにや。昔より村民等祈願のことあれば繩を以て楨幹をしげり。其事成就すれば件の繩をほどきて報賽せりと。ゆゑに一名を縛り松とも云ふ。鍛冶ヶ谷村の北なり。往昔稻毛三郎が當所に住みたる頃鍛冶を置きし所なりと云ふ。

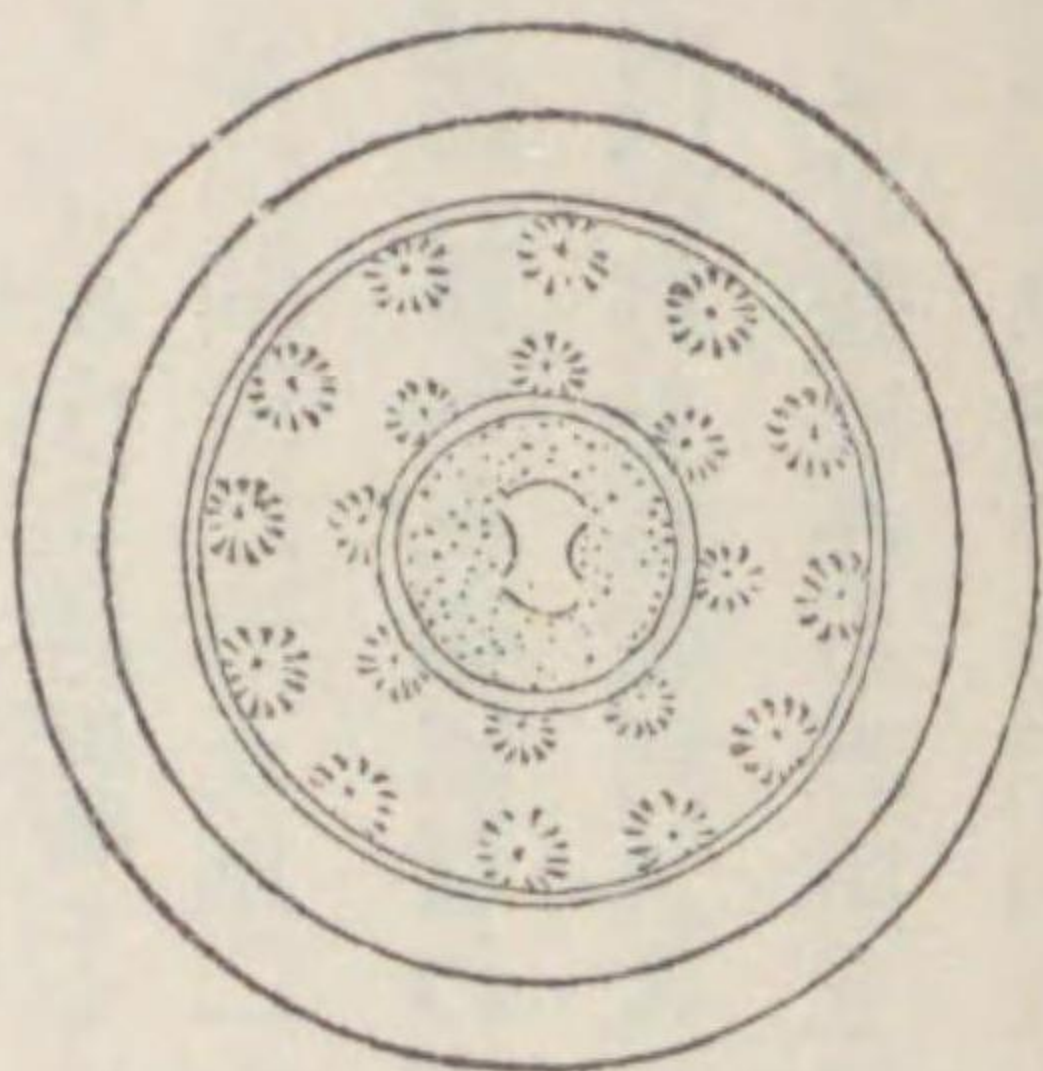
**谷川** 村の中程を流る。隣村長尾村より來り村内を經ること凡五町餘にして下作延村に達す。川幅は二間餘なり。此川に堰ありて用水とすれど當村は流末になるを以て常に涸水の患あり。

**日向坂** 村の西北にあり。僅ばかりの坂なり。御林 東南の境小名大丸にあり。段別にて一町一段二畝の地なり。松のみ生茂りて他の雜木なし。百姓林 村内所々に散じてあり。共に松杉雜木の林にて都合十九町三段二畝十七歩と云ふ。

**釋迦堂橋** 谷川に架せり。長三間半幅四尺。昔この所に釋迦堂ありしゆゑ名づけしと。事は延命寺の條に出せり。前橋同じ川に架す。幅五尺。長は是も三間半なり。溜井五ヶ所 一は村の南字道塵谷にあり。廣さ三畝二歩。一は村の坤字別所谷にあり。廣さ三畝五歩。一は良の方稻荷谷と云ふ所にあり。廣さ四畝二歩。一は大谷と云ふ所にて巽の方也。廣さ一段九畝八歩。一は北の方字原ヶ谷と云ふ所にあり。廣さ三畝。以上五ヶ所の内大谷のみ灌漑の用をなして。餘の四ヶ所は常に涸水するを以て用をなさずといへり。

**赤城社** 村の東にあり。本社一間四方。前に七級の石階ありて其下に拜殿あり。三間四方にして南向なり。鎮座の年代を傳へず。今村内の鎮守なり。神體は毘沙門を本地として祀れり。其像長二寸許にして立身なり。別當延命寺に藏せり。社前に如あり。近き頃古鏡一面を掘出せり。年代は知らざれど尤も古物と見ゆ。其圖上の如し。縁深二分弱。厚一分弱。内徑三寸二分。天神社 村の良の方にあり。僅なる祠なり。天和元年勸請せりと云ふ。稻荷社 字稻荷谷にあり。此祠ある故の名なるべし。元龜元年勸請せりと云ふ。萬年稻荷と號す。是も小祠なり。以上二ヶ所延命寺持。稻荷社 村の巽の方にあり。荒井稻荷と號す。この邊の字を荒井と云ふゆゑなるべし。寛永十九年の勸請なりと云ふ。稻荷社 村の北の方原谷と云ふ所にあり。稻荷社 南の方字柿木臺にあり。稻荷社 村の巽の方中谷臺にあり。元祿四年の鎮座なり。以上四社百姓持。八幡社 字稻荷谷にあり。文祿四年の勸請なり。熊野社 是も同年の勸請なり。當社と八幡宮とは今祠を廢して延命寺の境内に假殿を構へて合せ祀れり。鬼子母神社 村の西南の方臺下にあり。村内廣宣坊の持なり。今は祠も廢せり。三十番神社 是も今は廢せり。其祠迹は鬼子母神祠迹と同所なり。是も廣宣坊持。

鏡古四版圖



面を掘出せり。年代は知らざれど尤も古物と見ゆ。其圖上の如し。縁深二分弱。厚一分弱。内徑三寸二分。天神社 村の良の方にあり。僅なる祠なり。天和元年勸請せりと云ふ。稻荷社 字稻荷谷にあり。此祠ある故の名なるべし。元龜元年勸請せりと云ふ。萬年稻荷と號す。是も小祠なり。以上二ヶ所延命寺持。稻荷社 村の巽の方にあり。荒井稻荷と號す。この邊の字を荒井と云ふゆゑなるべし。寛永十九年の勸請なりと云ふ。稻荷社 村の北の方原谷と云ふ所にあり。稻荷社 南の方字柿木臺にあり。稻荷社 村の巽の方中谷臺にあり。元祿四年の鎮座なり。以上四社百姓持。八幡社 字稻荷谷にあり。文祿四年の勸請なり。熊野社 是も同年の勸請なり。當社と八幡宮とは今祠を廢して延命寺の境内に假殿を構へて合せ祀れり。鬼子母神社 村の西南の方臺下にあり。村内廣宣坊の持なり。今は祠も廢せり。三十番神社 是も今は廢せり。其祠迹は鬼子母神祠迹と同所なり。是も廣宣坊持。

**延命寺** 村の東字城山下にあり。天台宗多磨郡深大寺末。赤城山妙覺院と號す。當寺開闢の由來を尋るに。村民某が先祖菩提の爲め僅なる庵室を造立して其法誼を以て號とし妙覺院と呼べりと。又釋迦堂と號して今の釋迦堂橋の邊に一字の庵ありしを。元和元年に赤城社の麓に移し此二つの庵を合せて一の坊とし。庵主をして赤城の社務を司らしめけり。宗旨は天台宗にて時の住持を泉海と號せしとぞ。今此僧を以て開山とせり。今の如く全く一寺となりしは第五世榮賢の時にて。承應元年に本山及び山號寺號共に今の如く定りしと云ふ。客殿六間半に五間。本尊地藏は長一尺五寸許の立像にして春日の作なりと云ふ。土人は鼻取地藏と呼ぶ。姦馬を制するの誓ひありと云ふ。妖妄の説信するに足らずと云へども土人の説く所に任せて記せり。昔此地の里長が家に惡馬あり。田植の時農具を負せて田に行きしに馬をはへて進まず。時に此地藏小僧に現じたすけて馬の口をとてなだめしに惡馬もまた甚だ穩なりしとぞ。其次の日住僧看經の時此像の足に泥のつきけるを見て怪み人に語りけるに。里長始めて昨日の小僧のことを思ひ合せ奇異の思ひをなしける。是より鼻取地藏と名附けるとなり。今に至りて此あたりにてはさまて聞えずといへども。奥州南部のあたりにては此地藏の靈驗のあらたなる事を信じて遙拜す



るもの多しと土人いへり。いと怪きことなり。寺寶 辟支佛身觀音像一軀 立身にて銅像なり。長六寸許。此像はもと當國都筑郡茅崎村の治工秋田某が家にて世々藏せしが子孫年々に衰へ行けるにより。此靈像を俗家へ安置してなれけがすにより咎めあるならんとて當寺へ寄附せしと云ふ。大黒天像一軀 石にて作る。長四寸許。作しれず。觀音堂 村の良の方字稻荷谷通りにあり。造

立の年代を知らず。二間四方の堂にて南向なり。聖觀音の像長九寸許。木の立像なり。慈覺大師の作なりと云ふ。古より里長の家に傳へしをこゝに移せりとぞ。延命寺持。地藏堂 巽の方字向臺にあり。二間四方の堂にて東向なり。本尊は長七寸許の立像にて春日の作

なりと云ふ。檢地帳に東光坊とあり。今も庵主其坊號を襲ふといへり。廣宣坊 村の北にあり。四間半に二間。駿州富士郡大石寺の僧日永と云ふもの寶永元年に起立する所なり。故に大石寺の末寺。江戸下谷常在寺の持なり。

古城址 村北延命寺背後の山なり。此所から堀の跡と覺しき所あり。故に其邊の字を城山堀と云ふ。又字に矢倉塚。天守臺など云

ふ所あり。相傳ふ稻毛三郎が居壘なりと。させる證あるにあらず。按ずるに天守は織田信長の頃より始まりしと云ふ。稻毛三郎時代にはあるべからず。此邊はかの人領せし跡なる故にや。壘跡さへあれば附會するもの多きならん。因に云ふ此邊の俗にて婚姻の席には必ず謠ひものあり。それは稻毛三郎が妻の嫁せしとき鎌倉より召連し下部の謠ひし歌なりと云ふ。其風調いと故實なることなり。

舊家者百姓伊右衛門 三田を氏とす。彈正憲清が弟某が末孫なりと云ふ。今先祖の遺物なりとて八王子下原の鍛冶が造りし薙刀を藏するのみにて其餘所藏もなければ詳なることを知らず。

下作延村 上作延村の東に隣れり。昔の領主等の事は己に上作延の條に出せり。御入國の後戸田六郎右衛門、村上左衛門二人が知行なりしが、村上が知行は上作延と同一元祿十一年上地となりて御料所となれり。是は今小野田三郎右衛門が御代官所なり。村の大きは東西十五町許、南北十町程。其四境は十村ばかりに接せり。南は馬絹、末長、久本の三村に隣り、相州矢倉澤海道を界とす。又馬絹村の竝び

に土橋村の地も少く係れり。又此矢倉澤海道は村の南境を経ること六町許にして道の濶さ三間より六間に至り、東西への往來なり。東は溝口村に接し、良の方より北へかゝりて久地村に及び、北の方は堰、宿河原の兩村に隣り、乾の方に長尾村少くかゝれり。西は上作延村に犬牙す。日本橋より五里の行程なり。土性は上の村に同じ。陸田多くして水田少し。用水便あしきを以て屢旱損の患あり。又御料所の内には新墾の陸田六段五畝二十四歩あり。寶曆十一年伊奈半左衛門檢地して貢數を定めしと云ふ。村内秣場あり。北の方字北谷と云ふ所にて、廣さ一町二段許の原なり。又松雜木の林あり。三町六段二畝。四十二ヶ所に散在せり。當村は稻毛領諸山の尾さきにて、東西北に丘陵ありて其間に田圃ひらけり。南の方は平なれども其地形は高し。家數七十一軒、所々に散在せり。

高札場 二ヶ所あり。一は字大道通り。一は字北谷にあり。

小名 清水谷 村の東南にあり。平臺 村の南にあり。松安寺谷 今は正安寺とかく。古檢地帳には松安寺とあり。村の南の方なり。古は寺ありしならん。されど其事實は詳ならず。正光寺屋敷 村の西なり。是も名のみにして其よしを傳へず。城山 是も西の方にて上作延の續きなり。己に上作延の條下に出せり。天守臺 城山のあたりなり。是も己に上村の條に出せし所なり。鍛冶谷 上作延の地に續きたる所なり。彼村にても此地名あり。かうみ谷 今は小梅谷に作る。或はなまりてこゝめ谷と呼ぶ。これも村の南なり。中丸 同じ竝びなり。地藏ヶ谷 今の地藏堂の邊ならんと云へり。古檢地帳に見えたり。古池谷 是も檢地帳にあり。今は其唱を失せり。笹原 村の南にあり。街道内の小名なり。

根もちり坂 字松安寺谷より笹原へ出づる山丘の根通りを上る坂なり。此坂街道へもかゝれり。

谷川 上作延村の内。字前堰にて引分ち村内を流るゝこと四町許にして溝口村に達す。川幅二間程。當村の用水にも引用ゆ。此外は



溜井のみにして水利甚だ不便利の所なり。溜井 五ヶ所あり。村の北字勘左衛門谷。字六左衛門谷にあるもの大き各八畝許。又字鍛冶谷にあるもの大き二段許。字川谷にあるもの二段六畝二十九歩。此二ヶ所中央より少し西の方なり。其餘一ヶ所は字小梅谷にあり。是は大き一段五畝許。其地は村の坤の方なり。

五郎權現社

村の南字根もちりにあり。社地は丘の上なり。僅なる祠にて覆屋八尺に九尺。東向也。祭神及び鎮座の年を傳へず。例祭九月廿三日。村持。 神明社 同じ並びにあり。是も鎮座の年代を傳へず。本社一間四方。拜殿三間に二間。東向なり。例祭八月十九日。是も村持。以上の二社村の鎮守なり。 牛頭天王社 村の北字北谷にあり。一間半四方の祠にて東向なり。例祭六月七日。村持。

稻荷社

字北谷にあり。天王祠より三町許北に當れり。僅なる祠なり。村持。

圓福寺

村の東にあり。曹洞宗相模國高座郡遠藤村寶泉寺の末山なり。古は慧日山と號せしが後蒼龍山に改む。今は又蒼字をかへて青龍山と書す。開基益田駿河守滿榮大永二年當院を起立し。僧雪點を以て開山とす。雪點或は雪天とも書く。天正四年正月二十六日。八十歳にして寂せり。是よりさき滿榮は永祿元年六月十六日卒せり。圓福寺量海宗無と諡す。同郡清澤村能滿寺に葬せり。今村民忠左衛門は其子孫なりと云ふ。此後寛永十一年回祿にあひて舊記等悉く烏有となる。其時地頭戸田六郎右衛門清信。益田が子孫市郎兵衛と云ひしものと議りて本尊以下を造立せり。其後寛政七年再び丙丁の災に罹りて記録以下いよく失へり。今客殿九間半に七間半。南向なり。本尊釋迦。木の座像長一尺五寸許。 白山祠堂の背後なる庭中にあり。小祠。 天神祠 客殿より三十間程北の方にあり。一間に一間半。日向洞 客殿に向ひて三十間許左の方なる丘の側にあり。入る所は纒に四尺許なれども洞の内は疊十疊許をしくべきほどの廣さなり。開山袈裟掛松 客殿に向ひて左の方にあり。大き一間半許。高さ七八間。直立せり。 辨財天窟 境内丘林の下にあり。客殿の南へ去ること一町許にあり。神體は四寸許の座像なり。洞中常に泉ありて炎暑といへども潤ることなし。土人呼んで女郎洞或は鐵漿洞とも呼ぶ。其名の起りを詳にせず。 地藏堂 字北谷にあり。二間に二間半。東向なり。地藏の木像長二尺許の立身なり。村持。 屋敷跡 村の東にあり。背後に丘林ありて前は少し開けし所なり。増田駿河守が屋敷跡なりと云ふ。増田が事は小田原家人所領役帳にも載る處。已に上作延村の條に出せし如し。

堰村

郡の西北にあり。江戸日本橋へ行程五里に餘れり。當村の開けし年代は傳へざれど、さして古き村とも見えず。御入國少し前のことなりしに七人の民ありて草野に住し擧て開墾の事を處置せり。かれらが先祖も皆武家より出でしものにて武器舊記等を藏せしかど、屢の洪水に流失せりと云ふ。されど今も其子孫を七家と稱して總て村民の敬畏する所なり。今は家數三十五軒に至れり。村名の起りは開墾の始め多磨川の水を引かんとして堰を作りしによりかく呼びなせしと云ふ。村の四境東の方多磨郡宇奈根村は大抵多磨川を境とすれど、西岸にも僅に宇奈根の地續けり。又南の方へは久地村に界ひ、西は宿河原村に接し、北は多磨川を越えて多磨郡喜多見村に隣れり。凡東西七町に餘り、南北八町半餘なり。總て陸田多くして水田少し。土性は眞土砂錯はれり。又蘆原二段六畝二十七歩、芝原二町五段九畝二十九歩、柳原一段七畝四歩、林五段八畝十歩は松杉雜木生茂れり。竹藪二段八畝十四歩あり。何れも村民の持にて所々に散在せり。昔より御料所にして伊奈半十郎が家にて代々支配し、後又隣村と同一遷替ありて今は小野田三郎右衛門御代官所となれり。檢地は元祿十年十二月織田越前守糺す。其後水田二段六畝二十一步、陸田一町二段九畝十八歩の地を新墾せしかば、寶曆二年七月神尾若狹守、松浦河内守等奉行して檢地せしかど、皆川かけとなりて今は其所わづかに残り。又葭野を開發して同十一年伊奈半左衛門檢地せり。此餘玉川通りの新田は延享二年神尾若狹守檢地す。又當村より一里許坤の方へ隔りて大野原新田と云ふあり。享保十六年四月筥播磨守檢地せり。同所に原野二町八段あり。



高札場 村の中央にあり。

多磨川

西の方宿河原村より村の北を流れ、東の方多磨郡宇奈根村へ達す。水路凡五町。幅五十間許なり。この川洪水のたびごとに變遷ありて當村の地。川かけになり。古と大にことなりと云ふ。

橋 長六間。幅一間。稻毛川崎二ヶ領の用水に架す。南の方久地村へ往還の橋なり。

稻毛川崎大用水 村の南を流る。西の方宿河原村より來り。東の方久地村に入る。村内を経ること三町許。幅八間餘。宿河原地内より掛樋を設けて所々の耕地に沃ぐ。

堤 多磨川水除堤なり。長四百八十四間。北方多磨川に添うてあり。

稻荷、神明合社 村の中央にあり。本社五尺に六尺。拜殿三間に二間。共に南に向ふ。當村の鎮守にして例祭毎年二月初午。九月八日に神樂を奏す。勸請の年代を傳へず。稻荷の神體は右の手に寶珠を持ち左の手に劍を握り。白狐に腰うちかけし木像にて長六寸許の女體なり。安産守護の神にして昔より今に至るまで村内に難産の者をきかず。他村の者といへどもかりに當社を産神とするときは又難産の患なしと云ふ。神明の神體は長七寸許の立像なり。龍嚴寺の持。

稻荷社 是も同じ邊にありて同寺の持。古へ多磨川の傍にありしが水路變革せしより今の所へ移せりと云ふ。

龍嚴寺 村の中央にあり。自立山と云ふ。天台宗多磨郡深大寺村深大寺の末なり。開山開基は傳を失へり。中興開山は深大寺六十七世宣海なりと云ふ。本尊彌陀。立像にして長二尺許。客殿七間に五間。東向なり。

寺寶 大黒天像一軀 木像にて長三寸許。傳教大師の彫刻なりと云ふ。觀音堂 二間半四方。北向なり。聖觀音。木の立像長一尺二寸許なるを安ず。慈覺大師の作なり。

褒善者百姓源藏 源藏は極めて貧困のものなり。年十七にして父源左衛門におくれ。兄市五郎は其身體不具にして渡世なりが

たく。老母及び姉妹三人を合せて六口の奉養すべて源藏一人が力によれり。さればつとめて精力を勵すといへども。年若く殊に窮民なればはかなくしきこともあらず。剩さへ或時大風の爲に居宅倒れ崩れしかば。僅の得分を以てつぐのはんとて村民の助力を乞ひてやうやく家居をつくり。僅に風日を覆へり。しかりし後もいよく耕作をつとめ。其暇には母に仕へ兄弟を撫育せり。その後姉二人とも人に嫁せしが内一人は不幸にして夫婦ともに歿せり。三歳なる孤ありしを源藏まづしきが中にもあはれがり其家に移して養へり。源藏が所持の高

僅に二斗三升四合七勺の地あるのみなれば其困窮思ひやるべし。よりにて村民其志を感じ。折々ものなど贈りて生産の資とせり。且享和四年四月時の御代官菅沼安十郎へ其狀を訴へければ。米二俵を興ふべしとて其代として金をたまひて彼が奇特を賞せり。時に年三十一に及べり。

久地村 郡の北へ寄りて多磨川にのぞめり。古は小机領に係りしといへど今は稻毛領に屬せり。江

戸日本橋より行程凡五里に餘れり。東は荏原郡瀬田及び當郡内諏訪河原の二村に境ひ、南は二子、溝口、下作延の三村に接し、西は堰村により其中に宿河原村も係れり。北は多磨川を隔て、多磨郡鎌田、大藏、宇奈根の三村に及べり。此邊村内北に寄りたる所の小名を川、邊村と云ふ。是川の邊なるゆゑ唱へならはせるにや。其地も頗る廣く自から枝郷の如くなれど、もとより別に一村をなすにはあらず。此事は村内に川邊を氏とせる舊家あれば、猶そこにも載せたり。又多磨川水路洪水の折々に變遷して今は川の向ひにも此村の地の交れる所あり。村の廣狹は凡東西へ二十二町半、南北へは四町半に餘れり。村内多くは平地にて南方には山あり。土性は眞土に砂交り、荒砂、砂利、へな土の錯はれる處あり。水田は少く陸田は多し。民戸九十一軒、所々に散在せり。此村舊きことは傳へず。正保の頃は御料所にて伊奈半十郎の支配所なり。元祿十年織田越前守此地を檢せり。其後寛播磨守、神尾若狹守等も此地を檢せしことあり。御代官遷替ありて今は小野田三郎右衛門の支配所なり。

高札場 小名東前田にあり。

小名 いやのめ 西南の角を云ふ。山形 いやのめの續きにて南の方なり。御林のある所なり。古は大明神山といひしと。其由



來を詳にせず。砂原 東よりを云ふ。東前田 これも東の方なり。西前田 辰巳の方を云ふ。南前田 南の方なり。中通北によれり。下谷 北の方を云ふ。土手根 いやのめの下より東へ至る堤の邊を云ふ。

比丘尼山村の南にて字山形の東續きにあり。元祿の頃上杉氏に仕へし女の後尼となりてこゝに住せしゆゑ此名ありと云ふ。山形 古は大明神と唱へしかど。近き頃御代官所より山形と改め名付しと云ふ。

多磨川 村の北よりを通ぜり。屈曲して村内を経ること二十町に餘れり。

用水 稻毛。川崎ニヶ領の用水なり。堰村より入る。

村内にて四流となり所々に分流せり。村内を経ること凡八町許。川幅は五間許あり。

大丸用水 宿河原村より入る。是も村内の用水となせり。

堤 ニヶ領用水の堤なり。こゝより大師河原村まで續けり。村内に係ること長さ十五町に餘れり。此外に長さ十一間の塚樋又三間の堰等あり。何れも公よりの修理なり。

赤城社 村の南の丘にあり。此所の鎮守なり。社二間に一間半。東南向。前に石階あり。そこに木の鳥居たてり。祭禮九月十九日。

村内淨元寺の持。辨天社 小名久地山にあり。此邊比丘尼山ともいへり。社地に井あり。此井旱損の時も水の潤るることなきよし。土人は久地井戸ともいへり。又こゝに貞治四年の古碑一基あり。是は外より持來りて置きし物ならん。もとより何人の碑といへることは知らず。

富士淺間社 村の中央にあり。川邊の鎮守なり。社九尺に六尺。東向。前に木の鳥居を建つ。祭禮六月朔日。多磨郡鎌田村吉祥院の持。

伊勢宮 僅なる祠なり。北方多磨川のへりにあり。村の鎮守なり。例祭九月十六日。村内養周院の持。第六

天社 村民の持。稻荷社 是も村民の持。

淨元寺 小名久地山の東にあり。秋興山と號す。日蓮宗池上本門寺の末。開山日應。寂年を傳へず。客殿五間半に四間。東南向なり。本尊三寶を安ぜり。番神堂 客殿の前にあり。九尺四方。三十體とも立像にて長五寸許。拜殿は二間に一間なり。

養周院 曹洞宗 下作延村圓福寺の末。富風山と號す。開山吉山。慶長九年二月廿日寂せり。客殿八間半に五間半。北向。本尊釋迦座像長九寸なるを安ず。

觀音堂 門前にあり。二間に三間。觀音は立像。長一尺許。觀音、地藏合堂 是も門前にあり。二間四方。二軀共に立像なり。

長松院跡 南の方山上にあり。今は畑となれり。いづれの頃廢せしや。其年代及び廢せし故を傳へず。

舊家者百姓伊右衛門 川邊を氏とせり。先祖を伊賀守と稱せり。其頃の家臣の子孫なりとて七八軒今も此村の農民に残れり。舊記は失ひたれども長刀一振を存せり。長一尺餘。中心二尺餘。左文字の銘を鐫れり。此外にも武器ありしに今はなしと云ふ。按ずるに此家は川邊を氏とし村内にも川邊と唱ふる所あり。是等の事を以て考ふれば川の傍なるゆゑ氏とせしにや。若くは川邊氏の住居なればかへりて地名となりしも又知るべからず。

二子村 久地村の南に續けり。村名の起りは村内東南の境に二つの塚並びてあり、是を二子塚と云ふより起りしならんといへり。此塚の事は尙下に出せり。江戸日本橋より行程五里許。東西五町、南北十二町。村の四境東は諏訪河原村に接し、南は坂戸村に續き、西は溝ノ口、久地の二村に隣り、北も亦久地村なり。地形は總て平かにして田多く、畑少し。水旱の患あり。相州街道村の中程を南北へ貫く。民家八十二軒、此街道の左右に軒を竝ぶ。其内商家旅店も交れり。溝ノ口村と組合ひて宿驛の役を勤むと云ふ。當所は御入國の後より御料所にして、伊奈半十郎が家にて世々預り奉り、それより御代官遷り替りて今は小野田三郎右衛門が支配所なり。檢地は元祿八年織田越前守命を奉じて糺せり。其後新墾の田いでき寶曆十一年伊奈半左衛門檢地して貢數を定めたりと云ふ。

高札場 相州街道の中程にあり。

小名 上宿村の西にあり。中宿村の中を云ふ。下宿 東の方にあり。以上三ヶ所とも街道の内なり。南横町 是も

卷百二十九 村里部 橋樹郡 四

七一



街道の内にて文字の如く南の横町なり。北横町 是も文字の如く北の横町なり。本村 南の方。二子塚の邊をいふ。下河原 多磨川のほとり久地村の境なり。爰に庚申堂地として十二歩の除地あり。今其堂は廢せり。南田 南の方にあり。伊與田 南の方。溝ノ口村の境を云ふ。溝落 是も南の方。

**多磨川** 村の北の方を流る。石川にて川幅六十間餘。夏は船渡にて冬の間は橋を架せり。此船渡古より當村の持なりしが。水溢の度ごとに兩涯かけ崩れ。しばしば變革して隣郡瀬田の村内へ入りしかげ。其境界の事により遂に争論に及び。天明八年官へ訴へけるに當村及び瀬田兩村にて渡船を出すべしとの命あり。それよりしてかく兩村の持となれりとぞ。今川べりに當村の地所殘る所は僅に六十間餘。久地村より諏訪河原村に至る。堤 村の北方多磨川に傍ひてあり。長百五十三間。其内古堤と云ふもの長二十四間半。是は古よりありしゆゑかく唱ふと云ふ。坎三ヶ所 一は字下河原にあり。長七間幅三尺高四尺。一は字熊澤にあり。長七間幅四尺高三尺。此二ヶ所は悪水の坎なり。一は村の南六ヶ村組合の溝にあり。是は用水を引くための坎なり。三ヶ所とも公より修理せらる。

**神明社** 村の北の方にあり。鳥居を建つ。拜殿二間に三間。本社三間四方。南に向く。例祭八月十日。宮内村常樂寺持。第六

**天、稻荷合社** 村の中程田の畔にあり。小祠なり。此所を第六天の森と呼ぶ。例祭九月九日。稻荷は二月初午に祭ると云ふ。社邊に延寶年中建てし所の供養塔あり。

**光明寺** 村の中程街道の内にあり。淨土眞宗にて相模國大住郡岡田村長徳寺末。大悲山と號す。此寺古は天台宗なりし由。其頃は村の南の方にありて二子塚も其境内にあり。元龜二年專造坊といへるもの當宗を開基せりと。此僧文祿三年十二月六日寂す。其後何の頃か今の所に移りたれども。二子塚の内一は當寺の持なりと云ふ。此餘の事記録を失ひたれば詳にしがたし。客殿六間四方。巽に向ふ。本尊彌陀の立像にて長一尺五寸。作しれず。鐘樓門を入りて左の方にあり。二間四方。鐘の圓徑三尺許。寶曆十二年鑄しものなり。

**二子塚** 村の南の方に塚二つ並びてあり。其一は塚の數一段二十歩の除地にて高さ五丈許。形丸く芝山にて樹木なし。故に土人坊主塚などいへり。此塚の土性至つてよき故に庵など作る者多く掘用ゆるに。塚の中より茶碗のかけなどまゝ出づることあり。此ほとりを字して西屋敷と云ふ。古へ村民居住せしよし。ゆゑに古き磁器など出づるにやあらんといへり。一は少しく東の方へ寄りてあり。除地六畝二十九歩。高さは二丈五尺あり。南の方少しかけて上にわかぎの雜木生立てり。これ上にいへる光明寺の持なり。元祿年中檢地の事を承りたる織田越前守の家人吉田權右衛門といへるもの。光明寺の住持廓山と云ふ者に此塚の事問はんとて歌よみて興へけるに。廓山とりあへず知りたきよし返歌をぞしける。此頃さへはや斯の如くなれば今よりは糺しがたし。此塚のほとり稻毛用水の岸に古奥州海道の跡なりと云ふ小徑あり。此道は何の頃廢せしや詳ならず。今の相州海道ひらけて後此道は自づから往來もまれになりてつひに廢するに至りしなるべし。

**溝ノ口村** 郡の北二子村の西に隣れり。江戸日本橋より五里の行程なり。相模國矢倉澤道中の驛場にて、此道村へ係る所十二町程。其間に上中下の三宿に分ちて道の左右に軒を並べたり。總ての戸數は九十四軒に及び。村の四境東は二子、坂戸の二村に隣り、西は下作延村に接し、南は久本村に及び、北は久地村に至る。東西十二町餘、南北十三町半。村内總て平にして、たゞ西の方にのみ丘陵あり。水田多くして陸田少し。土性は眞土に砂交れり。土地の開けし年歴は傳へざれども、さまで古きことにはあらざるべし。いかにと云ふに往古は多磨川大河にして白波岡の下を洗ひ、渺々たる流なれば、今の水陸の田は其頃は皆水中なりしなり。後に川瀬もせばまり、砂場の地年を追ひて平陸となりしかば、自づから人家も出來しなるべし。其後今の川崎用水もなり、僅なる渠にて多磨川の水分れ入り川崎の方へ流る。當所は其溝の入口に當るを以て溝ノ口の名ありと云ふ。されば昔は溝之口とも書きしなり。小田原北條氏分國の頃當所にて、二十二貫四百文の地を海保新左衛門が知行せしこと役帳に載す。御入國の後齋藤攝津守に賜はりしが、所替ありて日野小左衛門が御代官所となれり。後田中休息愚右衛門、伊奈半左衛



門等かはりて支配せしが、今は小野田三郎右衛門預り奉れり。當所昔は今の二子村の地をも合せて村内なりしに、一旦分村し當村のみ宿驛にて其役を勤めしとぞ。然るに二子村盛なりける程に二村持合となり、今は月ごとに半月づつわかちて人夫を出すとす。檢地は寶永七年江川左兵衛、小長谷勘左衛門糺せり。新田の方は享保十八年に箕播磨守二段一畝十二歩を檢地し、又堀割新田と云ふ所田島ともに一町二段七畝十五歩は、寶曆十一年に伊奈半左衛門糺せり。此餘御林一段程村の西字藏山と云ふ所にあり。又薪木林一段五畝所々に散在す。是は百姓の持なり。又秣場四町程土橋村の内平原にあり。久地村の境に□多家數十九軒分三段六畝の除地あり。

高札場 往還の内下宿に建てり。

小名 産塚村の東を云ふ。塚も今存すれども二子村分村の時の村へ入りて當所には名のみ残り。

十三坊 坊を或は房ともかく。村の良の方なり。此邊の村々多く十三塚など云ふものあれば爰にもそれらの塚などありしにやといへり。

此邊の田地乾きやすくして灌漑の力を費すこと人の鹽味を食して後に水飲を欲するが如し。故に此名ありと云ふ。

柳町 南の端にあり。

馬上免村の西。七面山の下を云ふ。往還の内なり。相傳ふ昔村内の大石橋を修理せしめられし時。官吏の前にて旅人等下馬せしを道中なれば苦しからずとて免せしゆゑ此名起りしとなり。猿屋敷 下宿の西にあり。

大石橋 往還の内川崎用水に架す。長六間濶八尺。此餘にも同往還の内に小橋二ヶ所あり。何れも御普請所なり。

用水 二流あり。

共に久地村の境より入りて村内にて數派となり所々の水田に沃ぎ。残水は二子坂戸の二村へ入る。

川邊六ヶ村用水 是も久地村より入りて水田に沃ぎ餘水は二子村に入る。

根方用水 是も久地村より入る。村の西なる岡に傍うて南に流れ西南の隅にて掛樋を設けて谷川を越え。それより東に折れて數派となり一は久木村に入る。其餘は昔坂戸村に沃ぐ。此用水字藏山下にて分水し村の耕地に沃げり。

稻毛川崎大用水 是も久地村より入りて村の中央を過ること十餘町許。東して谷川に合し坂戸村に入る。此用水村の巽の方にてはことに迂曲せり。土人其所を呼びて大曲と云ふ。此川筋古は僅なる溝にて當所の地名も是より起りし事は已に前にいへるが如し。御打入の後掘割りて用水の便をなさしめられしにより。今は川幅六間以上に及べり。又谷川と云ふは村の西南の隅下作延村より來る。其村界に根方組合の塚あり。三間に八間。是も御普請所なり。此川も村内にて許多の水田へ沃ぎ。末は川崎用水に入る。

堤 久地村の境にあり。多磨川水除なり。村内に係ること五町許。又狭土手二ヶ所あり。一は村の南五ヶ村組合用水の中間にあり。長九十間程。一は村の巽谷川に傍うてあり。谷川こゝに至りて兩岐に分る、故なり。此堤も坂戸村まで續けども村へ係る所は百間餘あり。

赤城社 字上宿にあり。村の鎮守なり。勸請の年代を知らず。本社二間に三間。拜殿二間。石の鳥居を建つ。共に巽に向ふ。神體は女神男神の二體なり。其さま男神は毘沙門に似たるものにて右手に玉を持つ。女神は辨財天の如き像。例祭は八月十五日。宗隆寺の持なり。村内の社皆同じ。稻荷社 本社に向ひて左にあり。中宿の鎮守なり。末社といへど自ら一社をなす。番神堂 僅なる堂にて稻荷の並びにあり。

諏訪社 村の西の方岡の半腹にあり。勸請の年代を知らず。社前の畑を字法泉坊前と云ふ。是昔法泉坊と云ふ寮ありて此社は其頃かの境内に祀りしものなりといへり。法泉坊の事は猶下の宗隆寺の條下に出せり。

伊勢宮 久地村境の耕地にあり。勸請の年代を知らず。例祭は三月十日なり。稻荷社 二ヶ所。一は往還の西の方なる耕地の中にあり。除地二畝二十歩。其邊の字を後田とも或は上屋敷とも云ふ。此社は上屋敷一區の鎮守なり。一は往還の東字下屋敷の内にあり。下宿の鎮守なり。除地一畝六歩なり。

宗隆寺 下宿にあり。興林山と號す。日蓮宗池上本門寺の末寺なり。開山開基の由緒詳ならず。昔は天台宗にて本立寺と號せしとぞ。寺傳に明應五年時の住持興林僧都。或夜の夢に千眼天王より日宗歸依すべしと告を蒙りけるに。當所の地頭階方新左衛門宗隆と云ふ。もとより池上本門寺の檀越にて法華信心の人なりしが。是も同夜に同靈夢を蒙り語りあひて。互に奇異の思ひをなしける。興林つひに池上に登りて。本門寺第八世の貫主日調に謁して師弟の約をなす。日調頓て名を日濃と命ず。こゝに於て新左衛門を以て開基とし。其名を寺號に用ひ。日濃が舊號を以て山に名づけ今の山號寺號となれり。或は云ふ此事虚説なり。其實は興林日調と宗意を論じ辭屈して改宗せし



なりと。此日濃は頗る聰明の人なり。廿一歳にして關東の知識と呼ばれしとぞ。天正元年八月八日行年九十五歳にして寂す。後廿世日晋安永中に碑を境内に建て其本末を記せり。客殿八間に六間半。異向なり。本尊三寶祖師を安ず。千眼天王社 藥師堂山にあり。一間に一間半。南向なり。神體は帝釋天。長七寸許。立身の木像なり。過去帳に千眼天王とは帝釋千名中の一の別號にて帝釋もまた釋提桓因王事とあり。爰に祀れる千眼は則ち富士淺間にて日蓮宗にては經文の字をとりて帝釋を祀るといへり。當寺淺間の夢想によりて改宗せし故に祀れるなりと云ふ。例祭十一月廿三日。此日村内に市たてり。七面堂 藥師堂山の南の端にあり。此所田野を見おろして眺望いとよし。堂は一間四方程にて拜殿三間に二間。南向なり。神體は木の立像にて長七寸許。岡の下に鳥居をたつ。例祭九月十七日なり。鬼子母神堂門を入りて左にあり。二間四方。長向なり。鬼子母神の像の外に十二軀の木像あり。其内圓満具足。天歡喜女の二軀は長一尺許。各胎籠の木像あり。胎中の物は蓮慶の作なりと云ふ。其餘の十羅刹女は何れも長八寸許。祖師堂 鬼子母神堂の並びにあり。三間四方。是も長向なり。開山開運日蓮と號す。長八寸許の座像なり。其緣起を按ずるに明和年間荏原郡用賀村百姓八右衛門が妻。同村松林の中にて得し所にして其事を領主へ訴へ上げしかば。程へて後領主井伊掃部頭が代官某が計ひにて村内密院眞福寺へ預けり。時に安永二年なり。後此像の由緒を知る人ありて其由を聞くに。此像中老僧日法の作にして碑文谷村法華寺の看經佛なりしを結縁のため塔頭岸の坊へ移しけるが。元祿年中此坊廢して後分散していつしか用賀村の松林に埋れけるとぞ。然るに當村の農民彌次右衛門其弟六郎右衛門と云ふもの。當寺の檀越にして信心厚かりければ此像の他宗の寺院にあることを嘆きて。つひに眞福寺の十二世圭宥に請ひ。當寺の住持日義へ譲らしむ。これ安永六年十月なり。是より以來利益日々にあらたなりと云ふ。古碑七基 六基は庭前にあり。一は文和二年癸巳八月妙阿逆修とあり。一は文□六年八月十六日道慶禪門と彫る。此餘應永四年十一月と刻せしもの大抵剝落して文字讀むべからず。外の三基一字も讀むべからず。又一基は墓所にあり。貞治二年と彫る。藥師堂山 客殿の傍より後背を繞れる岡を云ふ。此岡は村の西小名藏山まで續けり。此寺の山林にて除地の數一段五畝五歩ありと云ふ。是昔天台宗を奉ぜし頃藥師堂ありしゆゑの名なりとぞ。改宗の後此堂は廢せしかど其像は今荏原郡古川村の藥師これなりと云傳ふれども是も誤なり。天正年間に記せし緣起によれば。かの藥師と同作なりとあり。今村内に藥師免と字して一段餘の地あるは。其免除地の跡なるべしといへり。千部塚 千眼社より少しく南にあり。廻り十四五間高さ八尺許。上に松樹兩三樹たてり。相傳ふ興林僧都改宗の時池上本門寺より日蓮の像を興へければ開眼のため此所にて法華經千部を讀誦せしにより此名ありと云ふ。又の傳へに左にはあらず。興林が手寫の經文千部を此所に埋めて築きし塚なりともいへり。第六天塚 千眼社の背後にあり。是も大さは大抵千部塚に同じ。法泉坊 門外向ひて右の方にある小庵なり。これ昔天台宗の時本立寺と號せしなごりに建置し坊にて元はたゞちに本立坊といひしといへり。其舊地は今の藏山の北に續きたる丘岡の麓にあり。今も其所に古碑六基あり。そこより北の方三十間許に諏訪社あり。其邊今陸田の開けたる所は皆法泉坊の境内なりとぞ。今の地へ移りしは何のころにや。されど舊地にたてる石碑の内に享保年間のものあるときは其後衰へて今の地へ移りしこと知らる。按ずるに宗隆寺天正年間の緣起によれば昔は法泉坊。本立坊。中正坊。仙光坊の四坊と富士淺間社人及び所化寮等ありしと云ふ。其内法泉坊は元より日蓮宗にて中正。仙光の二坊も寺家なれば同宗を奉ぜしが。たゞ本立坊は台家の寺跡など云ふ。されば本立法泉はもとより二坊にして名を改めしにはあらざるべし。二坊ともに衰へて後あはせてこゝに移せしなるべし。今本立坊の舊物なりとて法螺貝一口名主が宅に傳へたり。甚だ古色にして長一尺圍一尺四寸餘なり。其證とすべきものなし。

**大學屋敷** 村の西にあり。何人の館跡なりや詳ならず。廣さ一町三段許。或は此所を上屋敷とも呼ぶ。上に出せし稻荷社赤城社などのたてる所なり。此二社の間に牢屋敷と云ふ所あり。是獄屋の跡と見ゆ。かたゞ然るべき人の屋敷なるべし。  
**舊家者百姓七右衛門** 氏を鈴木と云ふ。先祖は鍛冶なりと云傳ふれども舊記を失ひたれば其證なし。其宅は天正年中の造作なりとて近き頃までありしかど損壞して後に修造せり。されど古の柱若干を用ひて今にあり。又古の棟札もあれど悉く煙にそみて文字讀むべからず。かたゞ舊家なること推して知るべし。因に云ふもとの名主松原某は世田ヶ谷吉良氏の浪人にてこゝに住せしもの子孫なり。舊記武具等も藏せしが天明中に家族大抵死亡して今纔に子孫の斷ざるばかりなり。由緒の書物武具等はゆかりにつきて豊島郡下澁谷村の百姓吉兵衛と云ふものゝ方へ譲りしと云ふ。ゆゑに其詳なることは知るべからず。



卷百三十 村里部

橋樹郡 五 稻毛領

久本村 郡の北にあり。小田原北條家分國の頃は、島津又次郎が知行稻毛、久本十四貫二百文、後藤惣次郎が知行小机、久本十三貫六百三十二文と永祿年中の役帳に記したれば、其頃ははや開けし村なることは知らる。されど今は小机の唱なし。江戸日本橋より行程五里に過ぎず。村の廣さ凡東西へ六町許、南北も又六町餘なり。四境東は坂戸村に界ひ、西は下作延、末長の二村に交り、南も末長村にて、北は溝ノ口村に隣れり。地頭は長坂血鎗九郎、川勝主税の二人にて民家三十九軒。土性は眞土或は野土交れり。田多くして畑少し。檢地は明暦二年地頭長坂十郎兵衛改めしよし水帳に見ゆ。川勝主税が知行の方は檢地の年代を傳へずと云ふ。當村に一條の街道あり。相州矢倉澤へ通ふ道なり。溝ノ口村より入り村内北の境一町半程を経て下作延村に達す。道幅凡二間ばかり。

高札場 村の南。長坂血鎗九郎が知行所の中にある。

小名 前田村の東。山の裾通りを云ふ。

頭田 六段田 西町 島しり 五明 むか田 池ふち ふか町 以上村の東にあり。

中島 こや田 舟ヶ町

しの町 そりまち 以上巽の方を云ふ。 屋か町 辻下 三常坊 以上

南の方にあり。

八段町 鴻ノ免 錢子町 やきわ すかる田 八幡義 長谷 坊谷 關免 以上北の方によりてあり。

猿田 このま 以上村の舊記に見えられたれど今其地を失せり。

用水 北の方溝ノ口村より流れ來り。村内を過ぎて末長村に通ず。土人はを根堀と云ふ。

八幡社 村の中央より良の方にあり。社一間半に二間。拜殿二間に三間。南に向ふ。社前に鳥居を建つ。柱一間七尺。例祭九月十一日。

末社 辨天社 本社に向ひて左にあり。

杉山社 村の良の方。丘上にあり。瀧臺寺の持。 杉山社 村の南の方にあり。

是も瀧臺寺の持なり。神體は十一面觀音像。長一尺許なるを安ず。是も丘上にあり。

神明社 村の中央丘上にあり。瀧臺寺持。

大蓮寺 村の中央にあり。淨土宗郡中上小田中村泉澤寺末。光明山金臺院と號す。寛永二年十一月十日起立せり。開山開能は延寶六年七月廿九日寂す。本尊彌陀。座像にて二尺許なるを安ず。客殿東向にて六間に四間半。 大日堂 客殿に向ひて左の方にあり。大日は座像にて長三尺許。行基の作と云ふ。堂は三間四方なり。

瀧臺寺 村の南の方にあり。天台宗にて多磨郡深大寺村深大寺の門徒なり。命符山理生院と號す。開山詳ならず。中興開基を

なり。 法印良辨と云ふ。延寶九年正月十一日寂す。初は瀧臺院理生寺といひしを後改め唱ふといへど。いつの頃よりの事にや詳ならず。地頭長坂血鎗九郎より寄附する所の石燈籠あり。命符山理生寺別當瀧臺院と記し。慶安二年極月十五日と刻せり。されば瀧臺院を寺と唱へしことは鎗安の後なること知るべし。客殿五間に五間半。東向なり。本尊は地藏の座像。長一尺許なるを安ず。

毘沙門 客殿に向ひて左の方にあり。小堂なり。沙門の像は傳教大師の作なりと云傳ふ。

末長村 久本村の東にありて、日本橋よりの行程も大抵同じ。古は稻毛庄と唱へしこと古き記録にも見ゆ。郷名は失せり。村名の起りしゆゑは詳ならず。村の四境東の方は新城村に隣り、南の方は新作村に接し、坤は梶ヶ谷村に傍ひ、西は下作延、久本の二村に及び、良は坂戸村に限れり。東西凡二十五町、南北は四町許。高低の地にして西北は高く、東南は水田多くして多磨川に續けり。相州矢倉澤街道



村内に係り、西の方作延村より村境三町を過ぎて坤の方梶ヶ谷村へ達す。道幅四間なり。民家七十一軒、山の麓に散住す。土性は黒ほく或はへな錯り、産物は柿菓土地に相應して味ひ他にまされり。村の開闢は其詳なることを傳へず。小田原家人役帳に『島津又次郎知行五十二貫七百五十文稻毛末長』とあり。御入國の後程なく國領七郎右衛門、淺井八郎右衛門、松波九兵衛に賜はりしと云ふ。今も其子孫等の知る所なり。檢地は三給ともに元祿五年二月改めありしと云ふ。

**高札場** 松波梶平が知行の中であり。村の中央宇松ノ木に建つ。其餘は未だたてず。

**小名** 新城前村の東の方を云ふ。 柳町 上に同じ。 五明前 是も同邊なり。 鴻ノ免 南の方を云ふ。

小高谷 上に同じ。 透毛臺 坤の方を云ふ。 笹ヶ原 西北の方を云ふ。 窪臺 乾の方を云ふ。 ついぢ 村の北の方にあり。三段許の地なり。土人此所をついぢの御殿の跡と云ふのみにて事實を傳へず。 松ノ木谷 村の西の方を云ふ。 四段田 中央を云ふ。

**根方用水** 十三ヶ村組合の用水なり。村の西久地村より入り南の方新作村へ通ず。幅四尺許。 **用水** 長の方坂戸村より入り南の方新作村へ通ず。

**杉山社** 村の南によりてあり。勸請の年代を詳にせず。社二間に三間。長に向ふ。神體は木の立像長一尺許。前に鳥居あり。例祭隔年九月十六日。十二座の神樂を奏す。社地上にて松樹あり。村内三給の鎮守にて明鏡寺の持なり。 **伊勢宮** 村の西梶ヶ谷村境にあり。小祠。東向なり。前に鳥居あり。例祭九月十九日。杉山明神と隔年にあり。村内三給の持にて明鏡寺のうけたまはりなり。

**増福寺** 村の西によりてあり。天台宗にて多磨郡深大寺村深大寺末。茂岳山觀音院と號す。客殿六間に四間半。長向なり。本尊阿彌陀。座像一尺五寸なるを安ず。開山開基詳ならず。寺内に了典法師と云ふ僧の墓あり。元祿三年二月十八日と刻す。是より古きは見え

ず。されば中興開基などにもあるべきか。 門 長向なり。兩柱の間一間。前に小き坂あり。 觀音堂 門に向ひて右の方少しく高き所にたてり。堂は二間半。南向なり。觀音は立像にて長二尺餘。 八幡宮 門外右の方に小鳥居を建つ。祠は客殿の後口丘上にあり。僅なる造なり。神體は丸き石にて圓徑二寸五分許。石色酢答に類せり。今客殿に安ず。寛延元年に記せし縁起一軸あり。されど近き頃のものといひ。殊に覺束なきこと多ければ悉く信ずるに足らざれども。しばらく其大略を下に記せり。曰『寛治五年正月十五日源義家奥州後度の戦に利を得て當國へ歸り來りし頃たま／＼長雨晴れて海水潔し。軍卒等と共に向の岳を詠むるに玉垣清らかなるに感じて各信心を動しける。やがて別當沙門に仰せて見せしめられけるに奇異の石あり。義家を始めかの石に武運を祈り。弓矢を納め。此里の民永く榮えんとて末長邑と號せり。此岳を八幡山。放生山とも云慣はせり。後北條早雲再建し小田原の方への往還を開きて崇めり。時過ぎて荒蕪し享保七年小祠を建立し上代の坂を發き。東都守護の爲に東向にせりと云ふ。末に茂岳山觀音院増福寺當住三部都太阿闍梨權大僧都堅者法印頂典。』とあり。又『降農八世梅原軍曹菅原時貞』と記し。己が家系を末に録したり。 舊家の條に出す。 **明鏡寺** 村の西へより天台宗東叡山末にて多磨郡深大寺村深大寺の進退によれり。松林山安樂院と號す。客殿八間に六間。長向なり。本尊阿彌陀。座像にして長一尺二寸許なるを安ず。開山及び起立の年歴は詳ならざれど。寺僧歴代の神に『寛永五年七月十三日慶丁法印』と刻するものあれば。若くは此人創建せしならんか。 **十王堂** 村の東丘上にあり。二間四方。巽向なり。石の十王を安ず。各一尺ばかり。中央に地藏二尺許なるあり。増福寺持なり。 **阿彌陀堂** 村の西の方にあり。三間に三間。南向なり。阿彌陀の座像一尺二三寸なるを安ず。是も増福寺持なり。 **塚** 三 村の西南の境にあり。十四五間を隔て、三つ竝べり。一は徑二間許あり。其餘は四尺程なり。たゞ古塚とのみ云傳へて由來を傳へず。

**舊家者百姓源右衛門** 秋元氏なり。持傳へし舊記もなし。村内増福寺八幡縁起の末に『天正十八年小田原落去の後。先祖梅原將監菅原正賢此里に來り八代を経たり。』とあり。又云ふ『正賢が父を梅原兵庫長盛として北條家に仕へしものなり。』と云ふ。其餘詳なることは傳はらず。



**平村** 郡の西にあり。江戸日本橋より五里半の行程なり。相傳ふ、古葛山平殿といひし人領せしゆゑ平村と唱ふといへり。今名主平左衛門が家に傳ふる所は、此平殿と云ふは杉田藤太といひしもの事なりと見ゆ。杉田氏は葛原親王の後裔にして平姓なりと云ふ。ゆゑに平殿と唱へしなるべし。又小田原家人所領役帳に『當村十一貫三百五十文は葛山某が知行』とあり。かたゞ由緒あるべきことなれども今より考ふるに由なし。御入國の後慶長年中木造七左衛門俊宣に賜はり、子孫世々知行せしが明和元年左衛門某が時、故ありて其家廢せられし後伊奈半左衛門が支配となり、寛政年中より伊奈助右衛門預り奉りしが、今は小野田三郎右衛門信利支配せり。村の地形は總て山間にして、中央の所平地なり。されど多くは地形に少しの高低あり。土性は黒土、赤土の二種にして水田少く陸田多し。檢地は元祿五年時の地頭木造五郎兵衛糺せり。又明和の頃新田を墾せしにより同き三年伊奈備前守忠宥改む。此後安永五年にも伊奈半左衛門檢地して新田高入となりしものあり。村の廣さは東西九町程、南北は十一町半に餘れり。村北及び東南の方は長尾村に界ひ、乾は上菅生村の飛地に限り、西は下菅生村にて、坤より南までの間は總て土橋村に接せり。民家は六十四軒、南北に別れて各軒を連ねたり。

**高札場** 字猪澤にあり。

**小名** 石崎村の中央にあり。

堀之内 村の南の端にあり。

天神谷 是も南の端なり。

馬場村の南の方なり。 大久保

馬場の東にあり。

猪澤村の西の端なり。 別所猪澤の北なり。

天臺猪澤の東なり。

柳町村の東の端なり。 高山村

の北端より乾によりてあり。

風久保村の北の端なり。

竹ノ澤 これも村の北の方なり。

かんえき山 竹ノ澤の西なり。

池ノ谷 石崎の北より乾にかへり。

**谷川**

西の下方菅生村より入り村の中程を流るゝこと九町餘にして東の方長尾村に至る。川幅三間許。無名の谷川にて僅なる流れなり。 **溜井** ニヶ所。一は村の西字宮脇にあり。一段程の廣きなり。一は北の方字原ヶ谷にあり。是は三畝許。 **板洗堰** 村の中程にあり。こゝより谷川の水をせきかけて水田に沃ぐ。堰は長三間半。幅二間半。高さ四尺。村持の普請所なり。

**八幡宮**

村の中央にあり。源榮山白旗八幡と號す。神供免三石餘なり。社傳に云『鎌倉の右大将源頼朝奥州の泰衡を征伐の時。此度の軍利あらば鎌倉より奥州までの海道の中十里ごとに八幡一祠を建立せんと誓言ありしが。果して勝利なりしかば建久三年に至りてつひに誓の如く鎌倉より奥州までの間に數ヶ所の八幡を勧請せらる。當社は其一なり。』と。此事東鑑等にはさらになき事なり。鎌倉の古海道は今隣村土橋村の内に其跡遺れり。神體は應神天皇の一座にて二尺許の木像なり。村の總鎮守にして例祭は二月初の卯の日と定め。社前に於て射術の式あり。尤その形ばかりなり。本社は一間四方許の宮作りにして覆屋あり。拜殿は二間四方。稻毛總社八幡宮の七字を扁す。前に石階ありて其下に鳥居たり。神主小泉信濃が事は村内熊野權現の神職を兼てしかど權現の傍に居る故其所に事實を出せり。天正十

九年東照宮の命ありて御武運長久の御祈禱をなせしにより。當社へ神供免七十石餘の御朱印を賜はれり。慶長五年台徳院殿關ヶ原御出陣の時。鈞命によりて御祈禱のため太々神樂を興行せり。御凱旋の後神器等御寄附あり。同き十九年大坂御出陣御首途の時。先年の御吉例を以て御祈禱を命ぜらる。御凱旋の後も神主伊豫を召出されて銀子若干を賜はる。後いつの頃にか社地回祿の時御朱印鳥有となりしかば是まで賜はりし七十石の地は收公せられ。又其後願上げて三石免の地を除せられしより今に至るまで先規の如く御祈禱怠らず。 **熊野社** 村の西字別所にあり。社地は小丘の上なり。相傳ふ壽永元年草創なりと。末社は宮作りにて四尺四方。拜殿は二間に三間。本社も此内に安ぜり。拜殿に稻毛總社の四字を扁す。前に石階十二級ありて其下に鳥居を建つ。例祭は九月廿一日にて村内神明祠と隔年なり。

**末社**

**辨財天社** 本社に向ひて左にあり。 **稻荷社** 本社に向ひて右にあり。 **疱瘡神社** 同じ並びにあり。 **神主** 小泉信濃

本社に向ひて左に住す。村内八幡。神明。天神。五所稻荷等の神職を兼務む。先祖は泉三郎忠衡より出づ。忠衡が子新太郎常衡その子常忠の子孫小泉を氏とする者ありと云ふのみにて其間の世系を失せり。天正の頃小泉左京亮と云ふ者より後の事は詳に傳へたり。左京亮は



天正八年二月十五日歿す。其子を左京亮政次と云ふ。政次が嫡男出雲勝重は同き十五年に荏原郡品川稻荷社神主宇田川出雲勝定が養子となれり。政次は同年二月四日歿せしにより次男伊豫守政安家業をつぎたり。此人の時東照宮及び台徳院殿よりしばしば賜物ありしことは已に前に見えたり。今の信濃は其子孫なり。近村神主の少き故何れの村にても祭事あることに必ず信濃に託して今の俗に用ゆる所の十二座及び五座等の神樂を行へり。

**神明社** 村の南字堀之内にあり。僅なる祠なり。相傳ふ文明六年の草創なりと。されど證とすべき事なければ定かなる事を知らず。例祭は九月廿一日にて村内熊野の社と隔年に行へり。

**天神社** 村の南天神谷にあり。正治二年の鎮座なりと云ふ。是も定かなる事を知らず。例祭は年々十月廿五日なり。

**五所社** 八幡宮の坤にあり。山上に建てり。上ること一町許なり。是も小祠にて南向なり。天文十八年の建立なりと云ふ。祭神は詳ならず。例祭年々六月二十日なり。

**稻荷社** 村の巽にあり。永祿四年の鎮座なりと云ふ。僅なる祠なり。

**東泉寺**

村の東字堰下にあり。此寺近頃までは今の所よりは南の方にありしと云ふ。其跡今も當寺の墓所となりてあり。もとより除地なれども坪數も詳ならず。其地の字をせがき田と云ふ。曹洞宗にて郡中下作延村福壽寺の末。泰平山と號す。開山最初安慶。天正十二年九月二十七日示寂。開基は一翁全閑居士。清室體寒大姉の二人なり。其位牌の傍に記して葛山平とあり。是のかみの地頭なりと云ふ。北條家人所領役帳に載せたる葛山某が夫婦の法名などにや。詳なる傳へもなし。猶墳墓の所合せ見るべし。客殿八間半に五間半餘。前に石階あり。二間許。本尊聖觀音の座像にて長五寸。門は兩柱の間九尺。控作りなり。

**寺寶** 般若地藏像一軀 銅像なり。寶曆年中大般若轉讀の折しも境内より掘出せしゆゑ此の號を得たりと。長六寸許の立像なり。古碑二基 墓所にあり。二基共に青石の板碑なり。一は文明十三年月待の供養塔なり。一は正實禪門三月十六日とありて年代を記さず。

**觀音寺** 村の南によりてあり。曹洞宗にて東泉寺の末寺なり。慈光山と號す。開山は圭州祖嚴。元文元年十月十三日示寂。本尊は聖觀音。座像にして長四寸。客殿四間半。巽向なり。

**藥師堂** 村の西。名主平左衛門が屋敷地の内にて即同人の持なり。大き三間四方。藥師堂の三字を扁す。本尊藥師如來は座像にして長八寸。

**葛山某墓** 字柳町にあり。しるしにいたの木を植う。古の地頭の墓なりと云ふ。小田原家人所領役帳にいへる葛山某なるべし。猶舊家の條并せ見るべし。

**舊家者百姓平左衛門** 氏を山田といへり。今村の名主なり。かれは小田原北條家の浪人片山彌兵衛が子孫なりとて家系一

卷を藏す。其文によれば片山氏もかの葛山が一族の如く見ゆ。今其大略を摘みて下文にしるせり。昔稻毛領平村の住人に杉田藤太と云ふ人あり。もとやんことなき人なりしが。如何なるゆゑにや洛中を遁れて關東へ下り。初め鎌倉鶴が岡の邊杉田と云ふ所に住し。在名を以て杉田と號しける。其頃鎌倉將軍家の世となりしゆゑ武家をさけ。ゆかりに付て當所に來り住せしが。農民のわざも又ものいとはしければ止む事を得ず武家に仕へて僅に此平村一郷を宛行はれけり。それが子孫に至り諸國亂れてしばしば兵革の事ありける。然るに駿州の今川家に北條新九郎と云ふ人あり。本國は勢州のものにて北畠の浪人なりといへり。此人武道に勝れたりしかば相州小田原へ下りて武相二州を今川より預けられしにより。其頃も藤太が子孫を土人葛山平殿とて仰ぎ尊びけるが。僅の地なれば獨立しがたくやがて小田原へ仕へける。然るにかの北條家は四代の其間關東に武威を振ひしが。左京大夫氏直に至り天正十八年小田原落城の時杉田氏も討死して所領を失へり。其時かの庶流なりし片山彌兵衛と云ふものあり。もと當所の名主にて小田原分國の頃村の長をつとめ。其身はいやしけれど武勇の聞えありしかば。其頃の戦記にも名を顯せしものなり。落城の時彌兵衛は其子圖書とくしば奮戦し。辛うじて死を免れ遁れ歸りける。按ずるに北條五代記總州國府臺合戦の條に云「天文七年十月七日巳の刻に至りて合戦始まる。片山彌兵衛前登にす。み首をうち取る所に味方大藤左京亮弓手をはせ通る。幸と甲の袖にとり付き片山彌兵衛一番首の證人と云ひし。」とあり。此時より小田原落城まで五十餘年に及べば彌兵衛已に極老の年に至りしなるべし。年代疑ふべし。かくて平殿が二人の女子を養育しけるに成人の後下菅生の内藏敷と云ふ所の名主長左衛門と云ふものへ嫁しける。いま一人の女も山田久左衛門とて故あるもの弟平左衛門と云ふものを迎へ。彼を婿となし。是に妻せ己が跡を譲れり。かの彌兵衛は片山氏にて久左衛門は山田氏なれば。しばしが間其兩氏を合せて片山田と名乗けるが。後

は又山田氏にかへれりと云ふ。此平左衛門後に薙髮して昂運と號す。寛文二年三月廿六日百歳にて歿せり。今の平左衛門は其子孫なり。こゝに又平殿の伯父に荏原新左衛門と云ふ人ありしが貉澤の邊に山居せり。文祿の頃歿せり。其葬所を新左衛門塚と云ふ。圖書は實子某



を率ゐて下菅生の内下長澤に移り地所を買ひて相續せしめたり。平殿の系圖は長女なればとて藏敷の方へ持行きしかばかの長左衛門が家に藏せり。其子の内に出家せしものありて多磨郡北見の慶元寺へ住職の頃。かの平殿の系圖は俗家に收るも憚りありとて慶元寺へ納めけるが後回祿に逢ひて失せりとぞ。今平左衛門が傳ふる所は先祖昂運が曾孫女の長壽にて尼となり近き頃までも世にありしかば。其覺えしことどもを記せしものなりといへば實を傳へし事もあるべけれど年代の差ひたる事多くして疑ふべき事少なからず。

**土橋村** 昔は平村の内なりしが後に分村せしむ。天正後の事ならんと土人いへり。されど長尾村の農家に天正十八年の制札あり。其文に『作延郷長尾村平土橋村以上三ヶ所』と記せり。此頃已に土橋と云ふ地名はありしなれど、いまだ平村の内に屬せしこと知らず。此土橋と云ふ地名の起りを尋るに村民の傳へによれば、古は太田といひしが其頃は鎌倉街道此地へ係りしにより、右大將頼朝此地を過ぎ給ひし時新に土橋を架せしめしことありと、實なりや。今も此橋僅に其跡を存せり。此故に太田を改めて土橋と號せりと云ふ。されど今も太田庄と號せり。又小名にも太田と云ふ所あり。これ古名の名残なりといへり。其地は中原海道に傍ひし所にして、江戸日本橋より六里の行程なり。家數三十九軒、村内に散住せり。村の四境東は馬絹村にて中原街道を界とす。南は有馬村に隣り、西は下菅生村に境ひ、北は平村に續き、東北の隅は長尾村に接せり。東西十二町、南北十町あり。押なべて村の中央より東の方馬絹村の地へかゝりて細き平地なり。水田は其邊に開けり。されど用水便あしければ、水田は僅にして陸田多し。土性は野土、黒土なり。又村の東北に秣場あり。是は字を大野原と號して兩給入會の所なり。當村は御入國の後程なく長坂血鎗九郎、戸田六郎右衛門の二人に賜はりしより、今に至るまで子孫相續して

知行せり。檢地は長坂が知行の方は寛文九年にて、戸田の方は萬治三年三月なり。何れも地頭の改めなり。

**高札場** 小名太田前にあり。

**小名** 大野原村の北より東に係りし地なり。 牢場合村の西なり。 太田前村の中程なり。 持田谷 東北の隅なり。

**原臺** 南の端なり。 西臺 村の坤の方なり。

**土橋** 字太田前にあり。僅なる溝に架せり。長一間幅四尺あり。初めにも云ふ如く相傳ふ此橋は右大將頼朝の架せしめられしと。其頃は此流もさまざまでさらざりしゆゑ。ことさらに橋をも作られしか。今は川幅狭みて僅にかたばかりの橋を存せり。されど村名の起る所なればこゝに記せり。

**太神宮** 村の北にて字大野原と村境の山間にあり。それより二町許を下りて木の鳥居を建つ。村の鎮守なり。例祭は年々八月十五日にて平村の神主小泉信濃來り祭事を司る。 正福寺持。 **御嶽社** 村西字牢場合の丘上にあり。稻荷を相殿とす。木の鳥居を建つ。村内正福寺持。 **御嶽社** 同所にて正福寺の西に並びて是も正福寺持。 **八幡宮** 村の東馬絹村の境にあり。鳥居より社まで一町餘の坂なり。此道半は當村の地にて。半は馬絹村の内なり。土人はを片大門と號す。八幡の社二たてり。一社は馬絹村の持にて。一社は當村の内長坂血鎗九郎が知行に屬せり。是は社地一畝免除地なり。例祭は九月十二日。百姓持。 **稻荷社** 村の中央にあり。僅なる祠なり。前に木の鳥居をたつ。正福寺持。 **神明社** 村の南にあり。僅なる祠なり。 **稻荷社** 同邊にあり。是も小祠なり。 三

**島社** 字持田谷にあり。是も小祠なり。 **天神社** 字原臺にあり。小丘の上に僅なる祠を建つ。是も小祠なり。 **荒神社** 村の中央小丘の上にあり。小なる祠にて南向なり。 **第六天社** 村の南にあり。小祠なり。 **大野稻荷社** 字持田谷にあり。南向なり。以上七社共に百姓持。



**正福寺** 字太田前にあり。天台宗多磨郡深大寺末。醫王山法徳院と號す。客殿六間四方。南向なり。本尊は薬師の立像にて長二尺許。今はいと衰へゆきて定まれる住僧もあらざれば開山の年代等も尋ぬるに由なし。**観音堂** 村の乾にあり。二間四方の堂なり。本尊は立身の木像にて長一尺五寸。百姓持。**地藏堂** 字西臺にあり。二間四方の堂にて東向なり。本尊は木の座像にて長一尺四五寸あり。百姓持。

**古跡鞍掛松** 村の西南の隅にあり。相傳ふ右大将頼朝鎌倉より此地を經歷の時乗鞍を此松の枝へ掛られしと。又の傳へに北條氏の家人横山監物が出陣の時鞍を掛けしともいへり。今は枯木となりて纒に根ばかりを存せり。圓徑九尺許。元祿四年の村圖には『えんざ松』とあり。いかさまにもゆゑある松と見ゆ。此所鎌倉古海道の名残として道幅一間許より二尺程に至れり。**茶筌松** 村の南。字さき沼臺にあり。大き二圍餘。相傳ふ頼朝此松の葉を以て茶筌に用ひ。其用はて後此處へ棄てられしが根生ひて大木となりしといへり。うけがたき説なり。**陣屋跡** 村の東北の隅にあり。今は陸田となれり。地頭長坂血鎗九郎が昔の陣屋跡ならんかと土人いへり。

**馬絹村** 土橋村の東に續けり。御料の地。又川勝主税、遠山政之助の二給あり。江戸日本橋まで五里に餘れり。郷庄の唱はいはず。當村東は梶ヶ谷村より末長村に接し、西は即土橋村にて、乾の方は長尾村なり。南は有馬、野川の兩村に續き、北は上、下作延の二村に隣れり。東西へ凡十町餘、南北も十町に過ぎず。家數九十軒。良の方に一條の道あり。相州矢倉澤街道なり。下作延村より入り村内に係ること長さ凡八町許にして有馬村に達す。總て田多くして畑少し。土性平地の方は黒土にて山よりは赤土交れり。御料の方は元祿十年織田越前守檢地す。御代官の遷替も前村に同く今大貫次右衛門支配せり。**高札場** 字長坂の下にあり。

**小名** 長坂 東の方に長さ三町許の坂あり。其邊を云ふ。宮前 東の方なり。笹ヶ原 村の北の方なり。下神戸 是も同く北なり。上神戸 村の乾の方なり。千駄丸 同く乾の方なり。矢尻 南の方を云ふ。矢中耕地 巽の方を總て云ふ。梅ヶ木 村の中央なり。鍵ヶ崎 良の方を總ていへり。回リ澤 坤の方なり。**用水** 西の方土橋より來り。村内凡長三百間許を経て東の方梶ヶ谷村に入る。幅七尺許なり。**溜井** 四ヶ所。内所々にあり。何れも僅なる溜井なり。

**女體權現社** 村の東の方にあり。垂迹は『伊奘諾尊』とも又は『伊勢太神宮』なりとも云うて定かならずと云ふ。本地は阿彌陀なり。神體は長八寸許。左手に巻物を持ち右手に笏を持ちて裝束したる立像なり。按ずるに昔伊勢太神宮遙拜の爲に此社を建てしにや。字に神戶など云ふ所あれば此邊は其神領なりしと思はる。本社は僅なる祠にて拜殿三間に二間。村の總鎮守にして例祭年々九月廿二日なり。社前に石の鳥居を立つ。柱間八尺。泉福寺持。**末社** 神明社 本社に向ひて左の後なり。**秋葉社** 本社の方丘上にあり。**熊野社** 村の良の方にあり。例祭は十月廿一日。村内三島明神と隔年なり。泉福寺持。**八幡社** 村の西の方。土橋と入會にあり。川勝主税が采地に屬せり。前にいへる如く二社の地域混してあり。當村の地三畝。地頭の免除なり。社前に拜殿あり。一間半に二間。南に向ふ。例祭九月十二日。村民の持なり。**稻荷社** 村の中央の丘上にあり。遠山政之助が采地にして社一間半に二間。村民の持。**泉福寺** 村の中央にあり。平榮出と號す。天台宗にて多磨郡深大寺村深大寺の末なり。開基を義天法印と云ふ。其寂年を傳へず。本尊不動は長一尺五寸の立像なり。客殿七間半に五間半。**観音堂** 村の西の境字小臺坂にあり。三間に三間半。西向。正觀音。立像一尺四五寸なるを安ず。近き頃稻毛領の内に西國三十三所の觀音の札所を擬せしものあり。此堂も其一なり。

**有間村** 馬絹村の南なり。江戸日本橋を距ること六里餘。古は稻毛庄に屬せしが今は郷庄共に唱を



失ふと云ふ。按ずるに小田原役帳に有馬の地名に小机と旁標す。されば小机は郷名か庄名か、何れにて  
も當村當時其下に屬せしこと知るべし。又村名の字、古は『有間』中頃『有馬』に換へ、今古に復すと云ふ。  
今按ずるに隣村に馬絹あり。役帳當村を『有馬』と記す。當所乘馬の縁ありて起りし地名なるも知るべか  
らず。且後世も或は『間』に作り或は『馬』に作り、參差として一ならざる時は『馬』に作るを得たりとせん  
か。然れども今『間』字を用ゆれば姑く『有間』に従へり。東は上、下野川の兩村に錯り、南は都筑郡山田、  
牛久保の兩村にして、西は同郡石川村及び當郡下菅生村に續き、北は馬絹、土橋の二村なり。東西へ二  
町餘、南北へ五町に餘れり。又村内に一條の街道あり。相州矢倉澤道にて村の北馬絹村より村内八町餘  
を経て、南の方都筑郡牛久保村に貫き道幅四間許あり。民家は總て九十六軒、東西に散住せり。村内總  
て高低の地にして土性赤土、黒土、砂交りなり。泥田、陸田及び丘山等分なり。此村は泥田深くして苗  
代を用ひず、水田毎に種を播きて耕す。農耕の隙に薪をとり、炭をやきて都下へ鬻ぐ事を餘業とせり。  
當村古き事傳はらず。永祿の頃は『北條家人窪田又五郎が知行十貫六百十八文』と役帳に記せり。御入國  
の後遠山政之助、曾根主税に賜はりし年代を傳へざれど、正保のものに遠山七郎左衛門、曾根半兵衛知  
行の由載せられたれば其頃よりの采地なる事は知らる。此餘新田あり。御料所にして民家なく私領持添の地  
なり。今は小野田三郎右衛門支配せり。檢地せし人は里人の傳へに、竹川監物など云うて年月も詳なら  
ず。古田は延寶六年地頭より改めし事もありしと。新田は延享二年神尾若狹守糺して稅務を沙汰せり。

**高札場** 二ヶ所。一は村の中程神明社の前にあり。遠山政之助の持なり。一は是も村の中程にありて曾根主税采地なり。  
**小名** 前野村の北の方にあり。 島田谷 是も北の方にあり。 大塚村の南の方にあり。 影取 これも南にあり。 道城

谷 前に同じ。 金くそ谷村の西の方にあり。 鷺沼 是も前に同じ。 高山 是は鷺沼の邊にあり。 狛谷 是も西にあり。  
城山村の北にあり。城跡なりといへど何人の住せしと云ふことを傳へず。又別に考ふべきなし。恐らくは北條家人窪田又五郎が此所を  
領せしこと。初に載する如くなれば彼が屋敷などありし跡にや。丘上にして凡一町許。今は兩給入會の地なり。されど曾根主税の采地の  
方多し。 下屋敷村の南にあり。遠山政之助某の給地の内なり。御入國の頃地頭住せし所なりといへり。今の遠山政之助の祖の住居  
せし地なるにや。詳ならず。

**用水** 村内山丘の谷間より湧出づる僅かの清水を以て水田に沃ぐ。此用水常に不足なれば旱損の患多し。古は村内に溜井二ヶ所あり  
と。一は字鷺沼にありて一段許の地なり。一は字影取にありて八畝許の溜井なりしに。二つとも近頃廢して今は芝地となれり。

**神明社** 村の東丘上にして遠山政之助の采地の内なり。同人給地中の鎮守なり。社八尺に四間ありて拜殿に續けり。拜殿は四間に二  
間半。前に木の鳥居三基を建つ。それより石階四壇あり。例祭六月廿一日。九月七日の兩日にして平村より社人來りて興行せり。村内の  
總持なり。 **神明社** 村の西丘上にあり。曾根主税が采地の内にて其所の鎮守なり。社三間に二間なり。前に鳥居を建てり。例祭八  
月廿四日。杉山社と隔年なり。 **杉山社** 是も西の方丘上にて曾根主税が采地の鎮守なり。本社九尺四方。拜殿三間に二間。前に僅  
なる鳥居あり。例祭は前の神明社と隔年に執行す。末長村明鏡寺持なり。

**長善寺** 村の東の方遠山政之助が采地にあり。淨土眞宗東本願寺末。有間山と號す。當寺昔は淨土宗なりしが。住職轉運社眞譽安立

の時改宗ありて今の宗旨となれり。此僧は天正十九年七月十三日寂せり。淨土門の頃の開基等は傳へず。本尊彌陀の立像二尺餘。裏に元  
祿八年二月二十一日再興せしよしを記す。客殿八間半に六間半。東向なり。 **福王寺** 村の中央にあり。臨濟宗鎌倉圓覺寺末。壽榮  
山と號す。開山は雪□。慶長七年三月三日寂す。相傳ふ當寺は昔圓覺寺塔中に福王寺といへるありしが。廢寺となりしを官へ願ひ當所に  
再立して寺號とせしと。何れの頃にや。年代も傳へざれど開山を以ていはゞ。天正。慶長頃の事なるべし。本尊十一面觀音。立像一尺許  
なるを安ず。客殿四間四方あり。又境内に古碑あまたあれば古くよりの葬地なりしにや。建武二年。建武四年丁丑十二月十六日(建武四



年とあれども建武は三年にして延元と改元す。貞治四年六月。永享十三年。文明十六年十月等の古碑あり。此餘斷碑あまたあれど文字磨滅して見えず。吾妻權現社 客殿に向ひて左の方にあり。前に鳥居をたつ。不動堂 村の東の方。丘上にあり。不動立像長一尺許なるを安ぜり。堂二間四方。南向なり。堂の前より丘の下へは四丈許の斷崖にして瀧あり。されど水勢いと細し。下に瀧壺ありて村民祈念する時の垢離場となせり。

西明寺跡 不動堂の森の後にあり。郡中小杉村西明寺は此所より移れりと云ふ。大塚 村の東にあり。よほど高き塚なり。土人も何人の塚なることを傳へず。又古の一里塚なりともいへり。それをいかにと云ふに。此所より馬絹村の方へ古道ありて此塚其路傍にあたりしと云ふ。されど其體なることを知らず。

梶ヶ谷村 馬絹村の東にあり。江戸日本橋より行程六里餘。村の四境東南の方は上野川村に界ひ、西は馬絹村に隣り、北は末長、新作の二村に續けり。村の廣さ凡東西へ七町、南北へ十二町に餘れり。家數四十軒。村内谷多く、土性黒土、砂交れり。田多くして泥土深く畑少し。當村は昔御料、私領打交り、私領の方は正保の頃、蜂屋源右衛門が知る所なりしが、其後故ありて元祿十一年采地を收公せられたりと云ふ。是より一村全く御料となれり。初め元祿十年織田越前守檢地す。其後新田の檢地は寶曆二年神尾若狹守、松浦河内守等なり。御代官も前村に同くして今は小野田三郎右衛門支配せり。

高札場 村の中央より少しく東によれり。

小名 矢中耕地 南の方にあり。

中島耕地 是も同邊を云ふ。

寺前耕地 村の巽の方にあり。

屋敷前耕地 同じ邊を云ふ。

宮前耕地 西の方をいへり。

清水耕地 村の北の方によりてあり。

林二ヶ所 何れも御林にて西の方にあり。一は五段許。一は三畝許なり。

明地坂 村の中央にあり。登ること凡一町あまりの小

徑なり。

溜井 村の北。字池ヶ谷にあり。六段二畝十五歩。

子神社 村の東丘上にあり。例祭隔年九月十四日なり。村の鎮守にして西福寺の持なり。

末社 牛頭天王社 本社に向ひて左にあり。

神明社 村の西の方にあり。例祭九月十四日。是も西福寺持。

末社 三峯社 本社に向ひて左の方にあり。秋葉社 是も同じ並びにあり。

西福寺 村の東にあり。天台宗多磨郡深大寺村深大寺門徒なり。光永山壽明院と號す。開山を傳へされど。歴代住僧の内に『秀榮法師文祿二年二月二十日寂す』といへば。古き寺なること知るべし。本尊彌陀の座像にして一尺餘。客殿七間に五間。巽に向ふ。境内に傍ひて松林あり。總て三段七畝十歩の見捨地なり。

阿彌陀堂 村の東の方にあり。三間に二間。本尊は一尺許の立像なり。西福寺の持。

塚二ヶ所 一は北の方にあり。西福寺の持。四畝二十四歩許の所なり。又一も同邊にあり。たゞ塚とのみ云ひて其故を傳へず。

方貝塚 村の北の方にあり。五間四方許の地なり。是も其故を知らず。

上野川村 下野川村 野川村は郡の西によりてあり。今は上、下の二村に別てども元一村なれば其地犬牙して別ちがたし。江戸日本橋より行程五里餘。布施家譜には『稻毛庄野川』とあり。小田原家人所領役帳に小机の内に屬せし由を記す。然るに今は小机庄の唱を失せり。又云『布施彈正左衛門康則が知行十五貫三百文は野川地頭方』とあり。其餘十六貫三百三文は後藤惣次郎が知行にして、元は太田新六郎康資が知行とあり。今上野川の方は家數六十五軒にして、これは台徳院殿の御靈屋料及び増上寺領なり。此内御靈屋料の方は昔は戸田久助が知行なりしが、其地を替賜はりて今の如くなれり。下野川の



方は家數六十四軒。是は影向寺領と大岡雲八が知行所なり。村の四境東は清澤村にて、西は有馬村なり。南は久末村及び都筑郡山田村隣れり。北は馬絹、梶ヶ谷、新作の三村に接す。東西二十三町許、南北十町程。土性は黒ほくにて水田、陸田相半せり。此餘秣場ありしを新墾せしもの、石高四十石餘にして陸田なり。是は御代官所にして小野田三郎右衛門が預り奉る所なり。檢地は慶安二年なりとのみ云傳へて其詳なることを知らず。當所の傳へに『文祿年中の水帳ありしをいつの頃か遺失せし』と云ふときは、文祿年中にも檢地ありしなるべし。

**高札場** 總て三ヶ所あり。一は南の方字籠場谷の前にあり。は大岡雲八が采地に屬せり。一は字天屋坂前にあり。是も南の方なり。増上寺領の高札なり。一は北の方の山下にあり。是は御料所の内なり。

**小名 耳され谷** 村の中央なり。 **兒ヶ谷** 村の東の方なり。 **天屋** 南の方なり。 **籠場谷** 同邊なり。 **天神谷** 中央

の方にて新田の中なり。 **法螺貝谷** 中央の方にて新田の中なり。 **池谷** 中程なり。 **十三本堂** 中程なり。又十三菩提とも十三本塚とも呼べり。古は古塚十三ありしと云ふ。今は其状のみ残り。中古此所より甲冑の朽しものを掘出せしと云ふ。

**矢上川** 村の北方梶ヶ谷村より入りて南の方久末村へ達す。村内を延互すること十四五町許なり。

**韋駄天社** 村の長の方にあり。上野川の内なり。内陣二間半四方。拜殿四間に三間。南向なり。前に木の鳥居を建つ。總村の鎮守

にて例祭は年々九月二十三日。神供免。畑一町餘見捨地あり。鎮座の年代を傳へず。上野川西藏寺持。 **子ノ神社** 村の西境。新田の

間にあり。前に鳥居を建つ。神體は石像にて長一尺許。例祭は十月四日にて神明と隔年なり。西藏寺持。 **神明宮** 村の東の方字領

家谷にあり。又此地を一に影向寺臺とも呼べり。前に木の鳥居をたつ。例祭は前に辨じたる如く子ノ神と隔年に行はる。是も西藏寺持。

**第六天社** 上野川の内にて村の東方によりてあり。僅なる祠なり。

**影向寺** 村の長の方にあり。當寺あるを以て字をも影向寺臺と呼べり。境内は即ち寺領五石の内なり。抑も當寺は行基菩薩開闢の古刹にして醫徳山月光院と號せり。天台宗多磨郡府中領深大寺の末山なり。古榮は興寺と書して後養光寺と改めたり。然るに萬治年中同祿の時本尊堂前の石上にとまりてより今の如く影向寺に書改めしと云ふ。本堂八間四面。南向なり。本尊。行基菩薩の作る所の薬師の像は今頭ばかりを存す。再興の本尊は長五尺許の座像なり。是は慈覺大師の作と云ふ。日光。月光の二立像。長各五尺五寸。是も慈覺大師の作なりと。縁起の略に云ふ。當寺は聖武天皇の御願によりて行基菩薩開基せり。其由來を尋ぬるに天平十一年九月十二日の頃より皇后俄に御惱ありしにより帝も御心に薬師如來に御祈願あり。明年二月十二日の夜御夢の告ありしかば。やがて四月八日此地に勅使を立てられけるに果して靈石ありければ帝御心にたのみ給ひ。御祈願ありしに果して皇后の御惱御平癒ましませしにより。こゝに於て當所に伽藍を御建立ありて薬師佛を彫刻せしめられて供養ありける。頓て寺領として橘樹郡を殘らず御寄附ありて。伽藍堂宇つひに天平十二年十一月に功竣りしかば。開山行基勅使と共に歸洛せり。遙の後清和天皇の未だ皇子にてまじける時。惟高親王と帝位を争ひ給ひける時。慈覺大師の夢想によりて當所へ御祈願ありて御望み空しからざりしかば。天安元年勅使下向あり。又大師に命じて薬師佛一軀を彫刻せしめ給ひ。明る戊寅の秋七堂伽藍の御再建落成して頗る美觀をなせり。こゝに於て醫王山を改めて威徳山とす。こゝに又慈覺大師彫刻の薬師を同き八月。當寺へ安置せしめんとして駿河國青島の里に一宿す。其夜かの本尊忽ち失ひて見えず。盜賊などのしわざにやと思ひしにさはなくして。當山靈石の上に現じ給ふ。こゝに於て諸人の渴仰大方ならず。靈石を名けて影向石といひ。寺をも影向寺と改めたり。叡感の餘り元の如く橘樹一郡を寺領とし。其餘江州蒲生郡を御寄附ありしと云ふ。故に當山は聖武。文徳。清和三代の勅願所にして行基菩薩を開山とし。再興は慈覺大師なりと云ふ。縁起に載する所かくの如くにして尤も妄誕にわたること多くしてうけがふべからず。されども古の盛なりし事は論なかるべし。今も近邊の土中より古瓦を得ること多し。是又伽藍の舊跡たるの一證とすべし。 **鐘樓** 本堂に向ひて左にあり。鐘徑二尺六寸。高四尺六寸。銘文あり。

**敬白武藏國橘樹郡榮興寺 奉治鑄槌鐘一口 右伏以。當山蒲牢。開基已來。革更其數不一。或雖治**



鑄有破裂。而無聲。或雖討得有薄略而不鳴。肆縑素數輩勵筋力。廼梟氏終鑄。當知三寶垂感。諸天降臨。仰願皇鳳永煽。佛日彌明。伽藍鎮靜。法輪常轉。將文結緣貴賤。感衆病悉除之。勝利奉加道俗仰願。願主東方之盟誓。仍昭銘功德。其辭曰。寺號榮向。山名醫德。萬治□星。應鐘日擇。新鑄梟鐘。磬形卓犖。百千萬劫。定朝渺邈。驚起塵夢。消除煩濁。滅罪生善。令人正覺。于時萬治三年庚子十月二十三日。大願主三國傳燈傳戒大和尚位堅者辨盛法印。山城國愛宕郡二條釜坐住人鑄物師御大工。大西五郎左衛門尉藤原村長作。下野川領主大岡次郎兵衛尉藤原朝臣直利。已下交名略す。泰教院殿耀譽天清原月大姉。寶龍院殿花月壽永大姉。光臺院殿從五位前兵部少輔養譽推安道山大居士。悟眞院殿從四位前典廩。無量院殿觀譽妙壽大姉。長譽日秀了山大姉。風山景程白日照月翁大禪定門長壽院清月光譽花月永照大姉。權大僧都堅者法印快曉。

影向石 堂に向ひて右の方にあり。四方へ垣を廻らして猥りに人の近づくことを許さず。石は六尺餘に四尺許にして高さ一尺八寸許。中に僅ばかり凹き所ありて水を湛へたり。此水たとへ汲みとるといへども一夜の間に又元の如く水湧出づと云ふ。石性色白くして青き所もあり。今世燧に用ふる石の如し。苔むしていかにも古よりこゝにありしものと見ゆ。縁起に云ふ所は天平年中此地開闢の時帝の御夢に入る。其後此石の水中よりしばし龍燈あがりし事を初めとして此水の奇特をさまざまに記せり。元より妄誕にして取るにたらず。今參詣の諸人竹筒の内へ此水を盛りてかへり。眼病及び諸病に用ひて驗ありと云ふ。

影向石碑

嗚呼神道之妙。聰明正直也。此地堂構。往昔天平之年初基焉。

文德帝之御宇中興焉。悉因王造。有石象凹。清泉常滿。一飲其水。則沈痾盡人至誠所以感於神也矣。

余曾患眼也多年矣。醫藥極術而未得其驗。偶至此禱之。則雙明漸愈。雖未如平人焉。大半獲快矣。

嗚呼靈泉之妙。何潤千里也哉。敬拜神靈之威德。而片石以識不朽。且表尊信之志也矣。延享丙寅季

秋東都法眼桂川先生門人和州城下郡下郡村森本宜直建之。

東都 菊池政房代撰  
平林惇信書

白山、山王合社 本堂の良にあり。僅なる祠なり。傍に銀杏の古木あり。圍一丈八尺許。十王堂 本堂に向ひて右方にあり。二間半四方。閻魔の像長三尺。餘の九軀は長一尺。塔頭舊跡 古は十二寺ありて各藥師の十二神一體づつ安置せしが。何の頃か皆廢して其跡だに知らざるもの多し。寺名左に載す。金剛寺 當寺の西の方にありしと云ふ。今其跡は畑となれり。本尊は不動にして十二神の内寅の神を祀れり。金剛院 卯の神を祀れりと云ふ。今は舊蹟もいづかたなることを傳へず。下竝に同じ。東光院 辰の神を祀る。福

聚院 巳の神を祀る。西藏寺 午の神なり。觀音を本尊とせり。今村内の聚海山西藏寺は天台宗にて。しかも正觀音を本尊とするときは。是則ち古へ影向寺の塔頭にてありしも知るべからず。然れども數度の回祿に記録を失ひたれば今より考ふるに由なし。慈眼院 未の神を祀る。華藏院 申の神を祀る。西光院 酉の神を祀る。西明寺 本尊は大日なり。戌の神を祀る。今小杉村西明寺も大日を本尊とす。且昔は隣村有馬村にありしと云ふときは若し此西明寺の事なるも知るべからず。されど彼寺は眞言宗なり。もししからんには後に改宗せしものなるべし。正覺院 亥の神を祀る。常樂院 子の神を祀る。安養院 丑の神を祀る。西藏寺 村の中央にあり。天台宗多磨郡深大寺村深大寺末。聚海山正觀院と號す。開山の年代を知らず。今第一祖とするは了海法印なり。これは中興開山なりと云ふ。されども長享二年三月寂すといへば。此人の開闢なるも知るべからず。客殿六間四方。本尊正觀音を安ず。木の立像にて長一尺五寸。運慶の作なりと云ふ。慈教院 下分の寮なり。天屋坂にあり。三間四方の堂なり。辨財天社 寮に向ひて右にあり。



小祠なり。神體は木の座像にて長五寸許。地藏堂上方の持の寮なり。字くぬぎ坂の下にあり。四間に三間。西向なり。地藏は木の立像にて長二尺許。觀音堂村の良の方にあり。二間半に三間。こゝに聖徳太子の像あり。長三尺許。太子十六歳の御時の貌を寫せしなりと云ふ。佛工運慶が作なり。此像もと影向寺のものなりしが何の頃よりかこゝに安ぜり。僧圓海墓村の中央農家墓所の側にあり。青石の碑にして正面に『權大僧都圓海』と刻し。下に『寶徳三年辛未正月十四日』と彫る。此僧の履歴を傳へず。いかさまにも故ある人なるべし。何れ天台宗と見ゆれば影向寺の世代ならん。

舊家者名主新右衛門 御靈屋料の民なり。先祖を龜谷玄蕃吉家と云ふ。家傳の古系圖と云ふものあり。中古何人かあまた偽作せし假名書の本なり。元よりとるに足ることはなけれども舊家なる事は論なし。名主翁助 影向寺領の民なり。和田を氏とす。小太郎義盛が子孫なりと云傳ふ。系圖も藏せしがゆゑありて失せり。太刀一腰を藏す。長二尺八寸あり。又分家長藏と云ふものあり。是も古き長刀を藏せり。

卷百三十一 村里部

橘樹郡 六 稻毛領

久末村 郡の西の方にあり。江戸日本橋より五里半の行程なり。家數五十八軒、村内に散住す。其四隣は東に蟹ヶ谷村あり。南は駒ヶ橋村及び都筑郡高田村なり。西も亦都筑郡の内山田村に界へり。乾の方は野川村にて、北は清澤、子母口の二村なり。東西へ十八町、南北は十町ばかり。陸田多くして水田少し。土性は黒土多く亦のはくの所も少しく錯はれり。故に糞培にあらざれば穀物繁殖せず。相州中原海道、村の西の方へ一町ばかりかゝり、野川村へ達す。村の土地高低ありて小山多く、近隣の村よりもことに高き所あり。西南より中央まではすべて山なり。檢地は元祿六年と云ふ。當村古より私領なるにや。正保の頃のものには佐橋源太夫知行とみえ、今も其子孫兵三郎が知行所なり。

高札場 村の西の方。字財神にあり。

小名 小貝谷村の乾の方にあり。財神 同邊なり。御堂谷 これも同邊なり。觀音堂あるゆゑにこの名あり。後ヶ谷村の西の方なり。山の後なる故にかくよべり。勝田屋敷 これも西の方なり。地名の來由詳ならず。番匠免 同邊なり。梅ヶ久保 これも同邊なり。芋ヶ谷村の巽の方なり。伊勢原村の南の方なり。神明の社あれば此名を唱ふるなるべし。大谷村の南の方にあり。籠場谷 これも同邊なり。横大道 これも南の方なり。隣村野川村の影向寺。古へは大寺なりし故當村まで横大門かゝりし故この名ありと。又此邊に別當久保と云ふ所あり。これも同寺の別當所ありし跡なりと。

錢神坂 村の東蟹ヶ谷村の境にあり。或は長坂とも呼ぶ。谷戸坂 村の西北の方にあり。高橋川 矢上川の下流なり。村の西。野川村よりいり東の境をふること十九町餘にして北の方。子母口村へいる。川幅二間ばかり。この川の中に堰あり。村内の水田へ水をせきかけて用水とす。この川に橋あり。高橋と號す。故に橋より起りて川の名となりしならん。

杉山社 蟹ヶ谷村の境。字下宮にあり。二間に三間の社にて西向なり。前に木の鳥居をたつ。例祭は八月廿八日。村の鎮守なり。蓮華寺持。神明宮 字伊勢原の中央にあり。例祭は杉山の神社と同日にて。これも村の鎮守なり。蓮華。妙法二ヶ寺の持なり。杉山社 字宮原妙法寺屋敷の内にあり。例祭は前の二社と同じ。社地は丘の上にて雜木生ひ茂りたる所なり。妙法寺持。道祖神社 字後ヶ坂の下にあり。わづかなる祠にて北向なり。これも妙法寺持。第六天社 字下の宮にあり。小社なり。蓮華寺持。十二天社 城法谷にあり。小祠にて西向なり。妙法寺持。稻荷社 字久末谷の丘上にあり。村民持。稻荷社 字いもの谷にあり。



土人「原の稻荷」と呼ぶ。蓮華寺持。 **稻荷社** 字大谷戸の丘上にあり。村民鈴木を氏とするもの土神とする所なるゆゑ。土俗に鈴木稻荷とよぶ。蓮華寺持。 **財神社** 字小貝谷にあり。もと道祖神とかくべきを。かく文字を假借せしなるべし。小祠なり。蓮華寺持。

**蓮華寺**

字久末谷戸と小貝谷との間にあり。村の北の方なり。新義真言宗荏原郡等々方村満願寺末。南林山普門院と號す。さまでふるき寺院にもあらざれど開山開基等詳ならず。安永の頃の住僧を源覺と云ふ。これ今の法流開山なり。客殿七間に五間半。東向にして向拜を設けたり。本尊十一面觀音の立像にて長八寸ばかり。境内すべて小丘の上にて前に杉林あり。その中より平田をのぞみて幽邃の所なり。 **妙法寺** 字後谷戸にあり。天台宗多磨郡深大寺村深大寺末。祇王山龍頭院と號す。開山の年代を傳へず。客殿六間に七間。東向なり。本尊釋迦。座像にして長七寸。作しれず。境内すべてすこしく高き地なり。 **護摩堂** 客殿に向ひて左の方小丘の上にてあり。二間四方。南向なり。辨財天。不動。毘沙門の三軀を安ず。 **古碑** 上に梵字あり。明徳二年七月と刻す。その餘はかけ損じて文字よむべからず。 **觀音堂** 字芋谷と小貝谷との間なる丘上にあり。三間四方の堂にて東向なり。本尊正觀音の座像。長五寸ばかり。作しれず。蓮華寺持。 **墳墓十三本塚** 字伊勢原と云ふ所にあるもの高七尺にして。すその廣さ二十一歩なり。今一も同じ邊。小名明石穂と云ふ所にあり。高三四尺。その狀堤のごとくにして長さ二十間餘あり。これもと十三所の塚なりしが陵夷して混合し。今はその塚とさすもの二ヶ所のみなり。又來由も詳ならず。恐らくはこれをはじめにいへることく供養塚なるべし。

**清澤村**

郡の西へよりてあり。江戸日本橋より行程五里に餘れり。家數四十八軒。東は岩川、新城の二村に隣り、巽は子母口村にて、西は上、下野川村に接し、南は久末村に界ひ、北は新作村に及べり。村の地二つにわかれ、その間に岩川、野川二村の地ありて隔をなす。南の方にあるもの東西へ三町半、南北五町ばかり。北なるもの東西十一町、南北三町ばかり。村の地すべて東の方は平にして、南北は低

し。ゆゑに水田多くして陸田少し。土性陸田の方は赤土、野はくにて水田はへな眞土なり。すべて糞培の力を待ちて耕す。農業の暇繩などをよりて生産の資とす。村内に相州中原海道かゝれり。岩川村より入りて下野川村へ達す。道幅三間ばかり。村の地をふることに四町餘なり。この村開墾の年代を傳へず。寛永十六年松波九兵衛、鈴木七郎右衛門二人に賜へり。これより二人の子孫今に至るまで知行せり。檢地は慶長十八年八月二十日伊奈熊藏が承りてたゞせり。その頃より寛永までは伊奈が支配所なりしと云ふ。又元文三年長崎七郎右衛門、蛭間清兵衛等檢地せしことあり。

**高札場**

村の巽の方にあり。今の松波梶平知行の内なり。

**小名**

上宿村の南の方なり。

中宿 是も南へよりてあり。

下宿 これも大抵同邊なり。

井戸尻

西の方影向寺の下を云ふ。

ふ。 **蟻山** 北の方なり。

谷 是も同邊なり。

別所 東の方野川界。

西の方影向寺の下までを云ふ。

**花井坂**

野川界にあり。この邊に八つの谷。八つの峯あり。ゆゑに八葉の蓮華にたとへて花井坂と云ふ。井の字をそへたるは傍に井戸ある故なりと土人傳へり。 **井戸坂** 隣村影向寺薬師の後に接したる所なり。井ある故この名あり。 **塔中坂** 西の方野川の界にあり。昔影向寺の塔中ありしと云ふなるゆゑこの名あり。

**矢上川**

村の南久末村の界を流ること百四十六間ほど。川幅凡二間半。の餘昔は新作村の溜井を引きしが。今はそれもわづかに谷間の水田へ引用ふるのみなり。

**稻毛用水**

新作村より引來りて水田にそぐ。この餘昔は新作村の溜井を引きしが。今はそれもわづかに谷間の水田へ引用ふるのみなり。

**神明宮**

村の南の方字上宿の内にあり。村内の惣鎮守なり。勸請の年代を傳へず。八幡。稻荷の二神を相殿とす。社は二間に二間半。南向なり。前に木の鳥居をたつ。その前に石階十七級あり。例祭年々九月十三日。村内能滿寺持。 **神明宮** 村の東の方なり。是も例祭同日なり。能滿寺持。 **第六天社** 村の東。字下宿の内にあり。村の鎮守なり。例祭同じ。村持。 **神明、天王合社** 村



西にあり。例祭六月七日。是天王祭なり。村持。春日社 字谷戸の山上にあり。神體は運慶の子孫何某が作なりと云ふ。木の立像にて長八寸許。社前に石階數十級ありて石の鳥居をたてり。例祭年々九月十七日。これも村の鎮守なり。社地に注連引松とて古木あり。神明宮 字谷戸の西にあり。社前に木の鳥居をたつ。末社 稻荷祠 本社に向ひて右にあり。

能満寺 村の西にあり。字花井坂と云ふ所なり。星王山寶藏院と號す。天台宗多磨郡深大寺村深大寺の末山なり。開闢は行基菩薩なり。されど古きことにより詳なる證もなければ。しばらくおきて近き世の中興開基を觀空と云ふ。此人は正徳四年五月十五日寂せり。本尊は虚空藏。木の立像にて長三尺。慈覺大師の作なりと。昔の本尊は聖徳太子の作り給ふ所なりと云ふ。これはいかゞして失ひたりや今はなし。客殿は六間四方。南向なり。門は柱間八尺。前に石階二十八級あり。鐘樓 客殿に向ひて左にあり。八尺四方。鐘銘

は正徳四年二月十二日。現住觀空鑄成の由及び當山は行基菩薩起立の古蹟なることを刻せり。不動堂 客殿に向ひて左にあり。則ち護摩堂なり。本尊は木の座像にて長三尺餘。この餘辨天及び松尾明神の像を安ず。寮 字下宿にあり。四間に二間半。南向なり。本尊

地藏は木の立像にて長一尺八寸許。腹籠の像あり。長六寸ばかりの座像なり。運慶の作と云ふ。又十王の像あり。各長八寸ばかり。是も運慶の作にして鎌倉新井の閻魔彫刻のとき試に造りしものなりと。村民忠左衛門が先祖益田内膳が寄附せし由にて臺座の裏に『内膳』の二字を書付けてあり。能満寺持。阿彌陀堂 寮の東にあり。今は破壊して未だ再造せず。是も能満寺持。舊跡善福寺跡

村内能満寺の門徒なりしよし同寺の過去帳にのす。

舊家者百姓忠左衛門 増田を氏とす。松波梶平が知行の農民なり。かれは小田原北條家の家人増田駿河守滿榮が子孫なり。滿榮が孫内膳が時より當所に住せり。されどその間の事歴を傳へず。

子母口村 清澤村の巽の方にあり。郷名の唱へを傳へず。古は稻毛庄と唱へしが今は庄名をいはず。天正の頃は稻毛領と唱へしなり。又村名の文字も古き文書に『澁口』としるせり。按ずるに此地は昔岩松家代々の領地なりしと見ゆ。文永三年七月しるせしかの家の本領所々註文の内に『武州春原庄内萬吉郷澁口郷云々』とあり。此萬吉郷は大里郡の内なり。澁口は當郡の内にて或は『澁江』と書きしもあれど、是は誤りにて則ち此所なるべし。又下にのする至徳元年の文書に『岩松禮部代國經申武藏國稻毛新庄内澁口郷事云々』と云ふによりて考ふるに、岩松家の領所たることいよく明なり。是等のこと土人も傳へざる所なれば、その始末の詳なることはしらず。永祿の頃太田新六郎稻毛澁口十貫文を領せしと。御打入の後正保年中までも村名の文字はおなじさまにかきしが、其後いつの頃改めしにや、元祿年中のものには子母口と書きたり。村の廣さは東西へ八町ばかり、南北へおよそ七町ほど。四境の村々は東の方下小田中、明津の兩村につゞき、南は蟹ヶ谷村に隣り、西は清澤、久末の二村にさかひ、北は岩川村、新城村なり。此邊すべて平地多く丘すくなし。村内陸田少く水田多し。民家七十四軒、丘の上に散居す。此村の邊より多磨川のあたりまでは、すべてうち開きたる平地にて、西南の方村々は山丘高低の地多し。土性は丘の方は黒赤にて、水田は黒真土、早損の地なり。御入國よりこの方御料所となり、其内百四十二石七斗九升餘は元祿九年、江戸淺草誓願寺領に賜はれり。昔高林氏の領地もこの所なりしが、享保四年又兵衛某が時故ありて家廢せしかば其地も公に入れり。檢地は寛永元年小泉次太夫がうけたまはりなり。此後もありしなるべけれど其年代を傳へず。世々の御代官は連綿と傳ふれど、わづらはしければ略せり。今は小野田三郎右衛門なり。又此地につきて古く沙汰せし文書あり。左にのせ後の考へにそなふ。



澁口郷目録

一町 大戸宮神田

二段 立花宮神田

領家方 能登出作

宇田壹町四反

田壹町 散在

合貳町四反 此内四段小せきにん御公事免のそく以上一貫二百三十七文分錢

領家方 きやうみち作

一字田壹町一段 此内二反四分せきめん御公事免のそく

以上分錢三貫五百五十七文

仁木方 淨法作

一字田二町八反 此内四反大せきめん公事免のそく分錢九貫六百八十文

たゝ免方 左近五郎作

一字田壹町五段 此内二反半せきめん御公事免のそく

以上分錢五貫文

立河方 七郎分

一字田二町 此内六反田成二段御公事免のそく

立河方 かゝ糸ん分

一字田三段 此内一反のそく以上分錢六百七十七文

一散在 立河方

田壹町五反 此内一反半のそく以上分錢五貫四百文

一横山殿分

田六反六百四十文せきめん一反田成島

以上分錢壹貫九百文

惣都合三拾九貫六百十三文

永徳四年二月廿六日

岩松禮部代國經申武藏國稻毛新庄内澁口郷事任被仰下之旨差遣使者欲沙汰付下地於國經候也處江戸藏人入道希全同信濃入道之貞同四郎入道之儀等率多勢構城郭無是非擬及合戰候間不能相渡候若此條偽申候者

八幡大菩薩六所大明神御罰於可罷蒙候以此旨可有御披露候恐惶謹言

至徳元年七月廿三日

沙彌聖顯 花押

進上 御奉行所

高札場 村の中央にありて少し南の方なり。是は御料所の方なり。寺領の高札は中央より少し西よりあり。

小名 久保 村の西の方にあり。 鳴子下 西南の隅にあり。 根田 北の方にあり。又中央にあり。 宮原 岩川村の境にあ



り。大久保 南の方にあり。

朝日前 鳴子下の邊にあり。

舟河原村の中央なり。

長久保 西の方にあり。

矢上川 水元は菅生村なり。清澤村より當村にあり。南の方村境をながれ。蟹ヶ谷明津村の方へ流る。幅三間半。長六町ばかり。此支流に谷川と云ふあり。小流にして用水なり。

溜井二ヶ所 村の北寄にあり。一つは六畝十三歩。一つは一段にたらず。

用水

根方十三ヶ村の組合用水と云ふ。隣村岩川村より當村に入り。明津村に落つ。幅凡一間。村内をふる。こと十一町ばかり。尤も屈曲して流る。八ヶ所。一は字西ヶ崎にあり。一は字岩川橋にあり。一は字朝日前にあり。

土坂 二ヶ所。一は字岩川橋にあり。一は字西ヶ崎にあり。すべて百姓持の普請なり。

立花社 村の西に寄りてあり。祭神は日本武尊。橘姫の二神なり。日本武尊は束帯にて劔を杖つき。御首に鉢巻をなし給へる姿なり。

長一尺三四寸。橘姫も装束にて璣珞の下りたる女冠をめされ。兩手に鏡をさしげたまふ形なり。むかしは玉なりしを今は鏡にかへしと云ふ。尤も古き像にはあらざるべし。社は小宮づくりにて覆屋あり。拜殿三間に六間半。南向。前に鳥居たてり。柱間八尺。土人の説に此立花の社あるを以て郡の名起れりといへり。されどまさしく證據とすべきものなければおぼつかなし。たゞし立花を以て唱ふれば古き宮なることは論なし。永徳四年二月二十六日神田二段を附せし事前に載する文書にみゆ。もし中古郡の名によりて祭そめたらんにも古きことしるべし。例祭九月九日なり。村内蓮乗院の持なり。末社 稻荷社 社の右の傍にあり。辨天社 左の方なり。大戸

社 字宮原にあり。祭神は橘の神社の神體に同じ。立像にて長一尺二寸ばかりなり。大戸明神と號す。或は青戸ともかけりと。此外社の

内に石劔二振あり。共に三つにをれたり。是をいつになさばその長さ四尺の餘なり。是は神體なりともみえず。いつの頃にをさめしや詳ならず。是も『永徳四年二月二十六日。大戸宮。神田一町。』と文書に見ゆれば。古き宮なる事しるべし。當社も蓮乗院の持なり。神

明社 村の北。宮原の内なり。小祠。南向なり。前に木の小き鳥居あり。是も同院の持なり。

蓮乗院 村の中央にあり。長唱山實相寺と號す。淨土宗にて小杉村西明寺の末山。開山詳ならず。本尊は薬師の立像。長一尺六寸。客殿七間に五間半なり。天満宮 不動堂 共に境内に入り右の方なり。其内小しく高き所に不動堂あり。堂は三間に二間。不動は

たけ三尺ばかり。立像にて古物なり。古碑 三基。一は『正應五年十月六日』としるし。一は『建武三年□□八日。』一は文字磨滅してよむべからず。その存する故を傳へず。圓融寺 村の中央より未申の間字下ノ寺と云ふ所にあり。法性山と號す。日蓮宗にて池上本門寺

の末。開山は日純上人と云ふ。天文五年三月二十一日寂す。本尊は釋迦。座像にて長一尺八寸ばかり。作詳ならず。客殿七間に六間。東向なり。古へ此寺は修驗者にて正善坊といへり。前にのする蓮乗院の境内にある不動堂の不動は此寺の修驗たりし時のものなりといひ傳ふ。今も不動免と云ふ。字朝日前の内にあり。此説うけがたし。開山上人は天文年中に卒せし人なりといへば此寺修驗たりしは夫よりまだ前のことか。されど寛永の頃の舊記に修驗正善坊とあればはるかに後のことなり。尤もうたがふべし。番神堂 門に入りて右の方

にあり。二間に二間半。番神の大き長三寸ばかり。立像なり。前に木の鳥居をたつ。觀音堂 村内にすめる百姓重四郎といへるものの抱地なり。堂は二間に二間半。南向。觀音は座像にして長一尺ばかり。此所は墓所にて此堂主は墓もりなり。

舊家者百姓藤七 小曾川氏なり。此村の舊家なりといへど。さして證とすべきものも傳へず。按ずるに今豊島郡中里村の宗傳

寺の境内に稻荷の小祠あり。その祠にかけし鰐口の銘をみるに『天正十年壬午八月一日稻毛郷澁口運川兵庫助作者』としるせり。是則ち藤七が先祖なるべし。此頃は運川とかき。且この頃より當所に居りしことはしらる。

明津村 もと子母口村の内にて、かの村の西につゞけり。文字も『惡津』とかきしが、字のよからざる故にや近き頃『明』の字にかへたりと云ふ。古は『稻毛庄』とも或は『稻毛新庄』などともいひしが、領名

行はれてより庄名は廢せり。江戸日本橋より五里餘の行程なり。家數十軒、村内に散住す。村の四境は東南は井田村にて、坤は蟹ヶ谷村なり。西は久末、子母口の二村につらなり、北は下小田中村なり。東西四町ばかり、南北は四町半におよび、土地平にして村の南境矢上川ある故干損の患なし。領主の遷替及び檢地のこと詳ならず。又村の東の方井田向と稱して飛地あり。一段餘の地なり。今は文昭院殿御靈



屋料及び増上寺領なり。

高札場 字向の前にあり。

小名 向ノ上村の中央なり。 諏訪下村の西南の方にあり。 堰免 是も中央の邊なり。 左近作り 是も同じ邊なり。

矢上川 水源は有馬村より流れ出て村の坤の方蟹ヶ谷村より當村に入り。 井田境にて悪水と合して一流となり。 村の南の境を流るゝこと七町ばかり。 川幅四間程。 多磨川分水 川崎用水の源なり。 子母口村より入りて村内にそぐ。

熊野三社 村の中央にあり。 當社あるにより此地を呼びて熊野森と云ふ。 鎮座の年代詳ならず。 社九尺に二間。 南向なり。 前に木の鳥居をたつ。 例祭年々九月二十七日。 村の鎮守なり。 村持。 諏訪社 村の西の方字諏訪の下にあり。 これも鎮座の年代を傳へず。 九尺四方の社にて東向なり。 例祭七月二十七日なり。 村民持。 辨天社 村の中央にあり。 わづかなる祠なり。 村持。 第六天

社 村の中央にあり。 これも村持の小祠なり。 常專寺 村の東の方にあり。 淨土眞宗伊勢國一身田專修寺末。 道本山松風院と號す。 天台宗にてありしが住僧淨源のとき今の宗に改めたり。 是を開山とす。 淨源は永正元年十月二十八日遷化せり。 この後牛久保の長徳寺の弟子を養ひて嗣とせしことあり。 世代はすべて十一世に及ぶといへり。

水塚 村の西の方水田の間にあり。 一畝餘の地にて高さ八九尺ばかり。 洪水のときも水のぼることなきゆゑ。 土人或は浮島などいへり。 上に古松四五株あり。 又稻荷の祠をたてし置けり。 この塚あるにより其あたりの小名をも水塚とよべり。

蟹ヶ谷村 郡の西の方なり。 古は神庭村と云ひしが後今の如く改めしと云ふ。 それもふるさごととみえて正保改定の頃はすでに蟹ヶ谷村と號せり。 江戸日本橋より五里の行程なり。 家數十八軒、中央の山

下に住す。 四境は東の方は明津村にて、それより巽の方は井田村に境ひ、南は駒ヶ橋村なり。 西は久末村に隣り、北は子母口村に接す。 東西二町ばかり、南北四町あまり。 すべて山ありて不平の地なり。 陸田多くして水田は少し。 土性は眞土のはく交りにして土中に岩石あり。 干損多くして水損は少し。 當村開闢のことは傳へず。 小幡家譜によるに太郎左衛門正俊、北條氏直に仕へて當所を領せしが、天正十九年東照宮へ召出されしとき、本知安塔せしめられ、ふるさにより當所を領し、慶長五年致仕して當所に住せしと云ふ。 正俊四代の孫太郎左衛門正重が時、元祿十年罪ありて蟄居せしが、御免をかふむらざるうち同十二月二十六日歿せり。 この時當所をも收公せられしと云ふ。 それより伊奈半左衛門忠順が支配所となり、子孫に傳へて預り奉りしなるべし。 近き頃は菅沼安十郎、中村八太夫、伊奈助右衛門等をへて、今は小野田三郎右衛門が支配所となれり。 檢地は古のことを傳へず。 近き頃新田を開きし時は川崎平右衛門、田中休愚右衛門等檢地せりと云ふ。

小名 寺ノ下村の中央なり。 こしまき谷村の東の境よりの方までを云ふ。 大なこ村の巽なり。 井田境 同じ邊なり。 西ヶ原村の坤の方なり。 西ヶ角 同邊なり。 瀧ヶ谷村の北の方なり。 上清水 同邊なり。 下清水 これも同邊なり。

溜井 字大なこにあり。 五畝ばかりの池なり。 この餘は谷々より涌出づる所の清水を引きて用水とす。

神明社 字こしまき谷にあり。 村内の鎮守とす。 社地は山上にして二町ばかり登りて上にあり。 この所は東海を臨みて風景いとよし。 例祭は年々四月十一日なり。 村内専念寺持。 八大權現社 神明宮の邊にて丘の半にあり。 幣束を神體とす。 これも村の鎮守なり。 社頭に老杉五六株あり。 圍各五尺六七寸。 例祭は年々九月十六日。 これも専念寺持。 稻荷社 こしまき谷の丘の下にあり。 わづか



なる祠にて北向なり。

**稻荷社** 村の東の方にあり。字曲り松の邊なり。小祠にて西向なり。

**専念寺** 村の中央字寺ノ下にあり。淨土眞宗東本願寺末。高林山と號す。開基祐覺は永祿十二年四月十八日化す。客殿七間に六間半。南向なり。本尊彌陀を安ず。

**舊跡鞍掛松** 村の南の方井田村の境にあり。老松なり。この所古は鎌倉街道なりしかば其頃右大將頼朝この邊に來りたまひしとき。駒林村の邊にて駿馬逸し走り來りしをこの所にてとらへ鞍をこの松の枝にかけしゆゑこの名あり。一名を曲り松ともよべり。

**井田村** 郡の中央より少しく北によりてあり。昔は『稻毛庄』と唱へしよし。郷名は失せり。按ずるに小田原役帳によれば『小机井田』とあり。永祿の頃は小机庄に屬せしが、昔井田攝津守某と云ふ人の壘ありし故に地名起れりといふ。江戸日本橋より行程五里に餘れり。家數九十六軒、村内に散在す。村の四境東は木月村に隣り、巽は矢上村につらなり、南は駒ヶ橋にて、坤は蟹ヶ谷、明津の二村なり。良は今井村に接して、北は下小田中村に隣れり。東西九町ばかり、南北十三町程なり。水田多くして陸田少し。地形西南は高くして野土なり。東北の方は自ら低く平らかにしてかた眞土なり。その所に多く水田をひらく。されどこゝは水損の患あり。さまで土地に宜き産物なきゆゑ多くは柿を植ゑ、その實を鬻ぎて以て生産とす。御林五畝十二歩あり。この所の字を向と云ふ。秣場四五町ばかり。古は二十六ヶ所あり。天正年中の記録には『二町二段餘』としるせり。當村永祿の頃は小田原北條の家人中田加賀守が知行『十貫文沼上分』の由かの役帳にのせたり。この中田は世田ヶ谷へ附屬の人にて、沼上は小机城主右兵衛佐氏堯が家人なり。御入國の後御家人へ賜はりしはいつの頃にや、正保の頃は八木勘十郎、加藤甚右衛門、

鈴木七右衛門、高林又兵衛、倉橋長右衛門等知行せしよし記録あり。その後高林が知行はめしあげられて御代官所となり、伊奈半左衛門が支配所となり、その後菅沼安十郎、中村八太夫等遷替して、今は小野田三郎右衛門が御預所なり。八木が跡はいつの頃か新見七右衛門に賜はり、その餘三人が子孫加藤萬之丞、鈴木七右衛門、倉橋作次郎知行せり。檢地は天正十九年伊奈熊藏承りてたゞせり。後のことはくはしく傳へず。

**高札場** 字和田と云ふ所にあり。村の中央にて新見七右衛門が知行の内なり。

**小名 六百谷** 村の南の方なり。和田村の中央なり。或は和田出口とも呼ぶ。觀音町 中央より東へよりたる所なり。古

觀音堂ありしゆゑ此名ありと云ふ。中町 これも中央なり。川井町 東の方なり。東町 村の東の堺なり。杉山 西の方

なり。三枚 北によりたる所なり。昔此に芝地三枚ありし故に此名あり。俗に田地の一區を一枚と云ふ。砂子 西の方なり。辻

下 西より東への往還の邊を云ふ。中原 川崎への往來の辻なり。丸山 西南の方なり。御伊勢山 同邊なり。

**金堀川** 水元は詳ならず。野川村より一條の流となりて西の方明津村より入り。巽の方矢上村へ達す。村内を流ること十四五町ばかり。川幅四間程。相傳ふ此村内御料所の名主久右衛門は古の金賣吉次が子孫にて久くその地に住せり。此川彼がかまへの内を流るゝ故。金賣川と唱へしが後いつとなく金堀川と唱ふと。川崎用水 上小田中村より引來りて所々の水田にそゞぐ。

**太神宮** 村の南の方字御伊勢臺にあり。村の鎮守とす。社は二間に三間。東向。前に木の鳥居をたつ。例祭九月十六日。以下の三社を合せて村内四社と稱す。以下三社の祭も當社と同日にて。次第を定め年々一社づつまつれり。駒林村金藏寺持。神明社 村の中

央にあり。社二間に二間半。南向なり。前に木の鳥居をたつ。村内四社の一なり。例祭は既に上に辨せしごとく。下の二社も同じ村持。**第六天社** 村の中央字菩提木にあり。これも四社の一なり。社九尺四方。東向なり。前に木の鳥居をたつ。古は社頭に菩提樹の大木



ありしが。今は枯れて圍三丈ばかりの株のこれり。そのめぐりに芽生ぜり。故にこの地の字をも菩提樹とよべり。 **杉山社** 村の北の方にあり。この社あるを以て地名をも杉山と呼ぶ。これも村内四社とて村民尊敬するその一なり。二間に三間の社にして南向なり。前に木の鳥居を立つ。村持。 **末社** **稻荷社** 本社の西にあり。小祠。 **十二天社** 二ヶ所 その一は字東町にあり。西向なり。これを上の十二天と呼ぶ。その一は字和田にあり。東向なり。これを下の十二天と呼ぶ。例祭は二月十二日。互に隔年に行ふ。村持。 **御嶽社** 字丸山にあり。社五尺四方。東向なり。駒林村金藏寺持。

**善教寺** 村の東の方字和田にあり。近き頃回祿にあひて今に至り。本堂再造に及ばず。本尊は彌陀。木の座像にて長三尺。運慶の作なりと云ふ。今はしばらく庫裡に安ぜり。當寺は淨土宗にて上小田中村泉澤寺末。井田山と號す。古は應恩院と稱せしが今院號は廢せり。開山實譽。寛永十一年八月十一日寂せり。寺傳によれば。この實譽より先三代道心者のすみ庵なりしが。それにつき起せし寺なり。又寺記に云ふ當村開發の時。小名觀音町に一字の觀音堂あり。應龍院と號せり。一年洪水のためにながされて矢上村に至り。松樹にかゝりて止る。今矢上村の觀音寺の本尊これなり。こゝに於て巽の方。なつみ臺と云ふ處の山下に一字の庵室を建立して。道全と云ふ禪門を迎へて開山とす。この頃は天台宗にて駒林村金藏寺の末に屬せしともいへり。これより三代にして實譽住せりと云ふ。後今の地へ移りし年代は傳へず。 **閻魔堂** 庫裡の南にあり。石像にて長三尺ばかりの閻魔を安ず。 **藥師堂** 字御伊勢臺の下にあり。二間に三間の堂にて東向。藥師は木の座像なり。古は彌陀を本尊とす。其たけ二尺ばかり。今はかはりてこれをば傍におけり。駒林村金藏寺より僧を置きて守らしむ。

**舊跡古城跡** 村の西南の隅にあり。此所をいりの上と云ふ。五町四方ばかりの間にかたち残り。されど何人の居城なりしことをしらず。此所の土中より壺の形したるものおよび種々の陶器のかけたるものを出すことあり。この所はもし彼の北條の家人中田加賀守某がをりし所にや。されどその傳ふる處もなければさして知りがたし。 **壘跡** 村の南の方の丘にあり。今その土を見るに平地丘陵を合せて一町ばかりの所なり。この地を掘るとさまゝ太刀。刀等の折れしものを得ると云ふ。相傳ふ此壘は井田攝津守某が居住せし所なり。

この攝津守は鎮守府將軍源義家に隨ひ。陸奥國九戸合戦の時討死せしといひ傳ふ。尤もうげがたきことなり。されど今その子孫は多磨郡是政村及び堰宿河原村等にありて農民となれり。中にも是政村の民佐兵衛が先祖は天正の頃までも井田攝津守是政と名のりて。北條家へつかへしことは已にかの村の條にも出せり。又この壘跡の中にも雀の宮と號せる小祠あり。これは井田氏が住せし時の鎮守なりと云ふ。 **陣屋跡** 村の巽の方にて川より南にあたる山崖にあり。今その跡と云ふ所は七百坪ばかりもあるべし。相傳ふ此所は鎌倉將軍の時本間五太夫某と云ふ人の陣屋あととなりとぞ。本間が事はその詳なることをしらず。今名主甚右衛門が藏する所の伏せ鉦は。古へ本間が望にまかせてかへ物にせしものなりと云ふ。猶舊家の條にのせたり。

**白塚村**の南の方にあり。高二間ばかり。廣十坪ばかり。此邊は古の鎌倉街道にて隣村蟹ヶ谷村の内。字曲り松と云ふ所よりこゝへ達す。その頃の事なるよし頼朝卿何の合戦にや。しのゝめの空のしらむ頃ほひに。此所へかゝりけるにより塚の名起れりと云ふ。もとよりうげがひがたき説なれど。聞くまゝにしるしおけり。別に故あるなるべし。

**舊家者名主久右衛門** 御料所の名主なり。田邊を氏とす。古の金賣吉次が子孫なりといひ傳ふ。その頃よりの物とて皮籠に入れし舊記を藏せしが先年洪水に流失せり。その餘證とすべき物は傳はらず。しばらく土人の傳ふる所によるのみ。 **名主甚右衛門** 青山を氏とす。加藤萬之丞が知行の里正なり。世々當所に住せりといへど舊記等は失せり。たゞ鎌倉將軍の頃當所の侍本間五太夫某が所持の鉦あり。其ひゞき他にことなりとて己が所持の鉦とかへしと云ふ。かの本間とかへし鉦。今家に秘して置けり。この餘古き鉦を藏せり。先祖の名は郷右衛門と稱せしとぞ。

**岩川村** 郡の西の方へよりてあり。江戸日本橋まで五里。村の廣さ東西四町ばかり、南北へ五町餘。その四境は東に新城村あり。南は子母口、清澤二村にさかひし、西は野川村にて、北もまた清澤村なり。此に相州中原道かゝりて村の眞中を貫けり。幅三間、長二十四町ばかり。新城村より當村にいり、清澤



村に至る。又殿坂と云ふ所あり。村のなかばよりすこしく西の方なり。是は往古鎌倉街道といひ傳ふ。一町餘の坂なり。その名の起るところたしかならず。此道は清澤村よりこゝにいり、又同村へ達せり。民家三十三軒あり。皆山のすそ通りにすまへり。昔、伊奈熊藏が檢地せしなどいへどその年歴を傳へず。地勢は畑多く田少し。村内高低の處多くして、へな眞土まじはれり。すべて稻毛領の内玉川の邊、平地の村々より當村に至り、夫よりや、山丘にかゝればこゝより都筑郡の方へは、いよゝゝ高低の地つゞきなり。此村は昔より鈴木七郎右衛門が知行する所なり。いつの頃より賜はりしや。その年歴を傳へず。

高札場 村の中央にあり。

小名 新道端 新城村の方へよりし地なり。

太田 新道端の邊にあり。

竹ノ内 是も同じ。

岸ノ根 村の中央にあり。

大窪谷 村の西の方にあり。

立町 村の北の方にあり。

巖窟 村内に三ヶ所あり。土人の傳へに。小田原北條の時世の亂れによりて。此邊に遁れ來りしものかくれをりし所なり。一つは殿坂の下農家のかまへ内にあり。その入る所は四五尺ばかりにて。内の廣さ凡十疊もあるべし。いる所は二つ竝びてあれど内はたがひに通ぜり。一つは村の東の方にすめる農民の屋敷内にあり。是は一穴にてそのさまほゞ同じ。一つは不動谷の傍なる山田氏なる百姓が屋敷内すまひのほとりにあり。是も同じさまなり。いづれも帷をかたどりてその内をうがらしものなり。山田氏がまへにあるものは慶安年中。その内より古き鎗四五本を見出せり。柄など朽はてければその後つくるひて今も傳へたり。按ずるに此邊より多磨郡などにかけて舊き穴のあとまゝあることなり。その故を詳にせず。かの芝生村の富士の人穴などと云ふものもこのたぐひなるべし。

岩川橋 新城村の境相州道の用水堀にかゝる橋なり。長三間。幅六尺五寸。普請は地頭のおづかりなり。

内膳橋 村の東の方隣村の境。用水堀にかゝれり。その名の起る所。故あるべきなれど詳なることを傳へず。普請は清澤村の承りなり。

用水堀 村の

耕地の方なり。清澤村より當村にいたり。子母口村に達す。堀の幅四尺。村に係ること五町許。

天王社 村の西よりにあり。例祭九月九日。隣村清澤村能滿寺の持なり。

御嶽社 村の中央にあり。神體一尺ばかり。立像にて藏王權現なり。前に木の鳥居あり。その下に高さ三丈ばかりの石階をまうく。同寺の持。末社 稻荷社 鳥居をいり左の方にあり

小祠なり。

伊勢宮 子母口村の方へよりてあり。例祭以上三社年ごとにかはるゝ行へり。是も同寺の持なり。

長命寺 村の南中原道につきてあり。天台宗にて清澤村能滿寺の末寺。青林山聖觀院と號す。開山開基詳ならず。境内に入り正面に建つは觀音堂なり。正觀音にて立像。長三尺五寸。裏書ありて聖德太子の作なりと云ふ。此像は昔鈴木某の持傳へたりしを此地の地頭鈴木氏へゆづり。夫より此寺に納めたりしなり。此堂にならびて庫裡をたつ。土人すべて觀音堂のみよべり。堂の前に少しの石階あり。白米稻荷社 寺の後の山にあり。小祠。前に小鳥居あり。白木といへる故を傳へず。古碑 墓所の後の山上にあり。文祿二年正月日としるせり。何人の碑なる事をしらず。又斷碑一基あり。是は年號もさだかに見えず。

不動堂 村内の百姓傳右衛門なるものの屋敷内に建つ。わづかに一間四方の覆屋あり。只名のみなり。その内の小宮には昔不動の像ありしなるべし。今はたゞ古き碑ををさむ。其碑に曆應二年辛巳二月としるす。外にも斷碑四五枚あり。其内文明の文字見ゆるもあり。何れもいかなる人の碑なりや傳へず。また不動によれるにもあらず。たゞ古きものなれば此所にをさめ置きしなるべし。八人塚 殿坂の邊にあり。その渡り九尺ほど。高さは五尺ばかりにて丸き形なり。いつの頃の合戦にや打死せし八人の者をこゝに葬りし塚なりと。里人は足利尊氏の頃の人といへり。近き世明和年中土人はかりて塚上に石の觀音を建てたり。

今井村 郡の北によりたる地なり。小田原家人所領役帳によるに『稻毛庄』とも或は『小机今井』と記

せしもあり。其頃は稻毛も庄名にして又は小机庄ともとなへし歟。江戸日本橋より行程四里ばかりをへだつ。家數四十軒、村の北と南との方に住せり。東は上丸子村に隣り、南は木月村に堺ひ、西は下小田



中村に接し、北は上小田中及び小杉の二村につゞき、巽の方は一ノ坪、中丸子の二村に及びべり。東西三町餘、南北十町餘。水田多くして陸田は少し。村の西の方に秣場一町五段あり。洪水の時は多磨川の水、田地をひたしてしばしば水損の患あり。土性はかた真土にして、川へよりたる所は真土に砂交れり。檢地は元祿十年十二月織田越前守信久が承りにてたゞせり。當村建武の頃は江戸遠江守、同下野守が領せしよし土人の口碑に傳へたり。太平記に竹澤監物が謀計によりて畠山入道、江戸遠江守、同下野守が領地稻毛十二郷を沒收せしとある是なり。この後の事は傳へず。小田原家人役帳に蒲田助五郎が知行『三貫文稻毛庄木月郷今井やけべ方』とあり。又『小机今井拾八貫五百文』谷泉が領せし由をしるせり。これによれば、そのかみは木月村の内に屬せしか。やけべ方は今隣村新城村の内に燒部と云ふ小名あり。これも昔は木月村内に屬せしか。又小机とあるは當所にては廣き地なれば小机城付の所もありしならん。御入國の後は伊奈半十郎が家にて支配する所と服部五兵衛、筒井次左衛門等が知行交はれる由、正保の頃の書に見えたり。この後御代官所の分は江川佐兵衛が支配をへて、桂昌院殿、清揚院殿の御佛供料として、増上寺へ御寄附ありしは寶永二年のことなり。又いつの頃か勝部某に給はりしもの、今に子孫勝部新左衛門知行せり。

高札場 村の中央より北によりてあり。

小名 中通り 村の南の方なり。 下田通り 乾の方なり。 上田通り 西の方なり。 田向西のはてを云ふ。

川崎用水 北の方上小田中村の堺より入り東の方小杉村の堺を流れて一ノ坪村へいる。川幅四間ばかり。末流鹿島田村を過ぎて當村の水田へそゞぐ。又上小田中村の用水を用ふる所もあり。

山王社 村の北の方なり。例祭は年々九月十四日。相傳ふ當社の勸請は鎌倉右大將家の頃にして。もと小宮筑後守入道重康が靈を祭りしなりと。重康がことは後に詳なり。末社 稻荷社 本社に向ひて右にあり。辨財天社 村の南の方にあり。神體は木の座像なり。是は増上寺の代官奥住惠十郎が建立する所なり。されば近き頃よりのものなり。前に木の鳥居をたつ。大乘院持。稻荷社 村の中央にあり。是も大乘院持。末社 稻荷社 本社に向ひて右にあり。

大乘院 村の中央にあり。曹洞宗末吉村寶泉寺末。今井山と號す。開山は本山第五世盧州吞匡。寛永二十年九月十三日寂せり。開基は松平土佐守の女。泡影院觀窓幻夢大姉なり。故ありて此一寺を建立せり。この人は延寶八年六月二十八日卒す。本尊正觀音。長一尺一寸。木の座像なり。惠心僧都の作なりと云傳ふ。客殿は八間に五間にて西向なり。稻荷社 客殿に向ひて左にあり。境内の鎮守なり。

舊跡館跡 村の西の方なり。相傳ふ此所は秩父次郎重忠が一族小宮筑後守入道重康が住せしといふ。今は萱野となれり。筑後守がことは詳なる事蹟を傳へず。今にその子孫を數右衛門とて村の里正をつとむ。系圖もありしかど何の頃よりか鎮守山王の社に收め置きしが後失ひしといへり。

舊家者百姓源藏 同傳左衛門と共に御靈屋料の百姓なり。何れも和田小太郎惟盛末葉なりと。系圖武器等も藏せしが今は失へり。百姓數右衛門 小宮氏なり。後に北條家へもつかへしと云ふ。そのあらまはは館跡の條下に辨じたり。

新城村 郡の北の方にあり。古は小机庄と號せしが、今は郷庄ともに唱を失せり。江戸日本橋より行程五里。家數四十軒、村内に散在す。東は上小田中村にて、南は下小田中村なり。新作村に隣りて、北は坂戸、岩川の二村なり。東西へ四町、南北へ十三四町ばかり。水田多くして陸田少し。土地平かにして土性は真土なり。専ら糞培の力をまちて耕す。男女ともに農業の暇には布の絲を繰り、菰席を織り



て生産の助とす。村内に中原海道あり。下小田中村より村内へかゝり三町餘をへて、北の方岩川村へ達す。幅二間ばかり。當所は天正年中御家人中川某に賜ひしより、今に至りて子孫中川勘左衛門知行せり。檢地の年代等詳ならず。されど今も田畝の數大中小を以て割合とすれば古き檢地なるべし。

高札場 村の北安養寺の側にあり。

小名 田島 村の北の方を云ふ。 燒部 村の西の方なり。小田原家人役帳に今井やげへ方とあるはこの地なるべし。

稻毛用水 上小田中村より入りてたゞちに水田にそゞぐ。 岩川溜 岩川村の境にあり。岩川と當村と二ヶ村組合持の溜井なり。

天満宮 村の北。小名田島にあり。勸請の年代を傳へず。村の鎮守なり。神體は木像にて長一尺ばかり。社前に木の鳥居をたつ。例

祭は九月二十三日。神明。杉山二社とて互に祭る。安養寺持。 神明社 村の東にあり。是も安養寺持。 杉山社

村の巽にあり。これも同寺持なり。 石神、神明合社 村の南にあり。同寺持。

安養寺 村の北の方字田島にあり。新義真言宗小杉村西明寺末。天輪山無量院と號す。客殿七間に六間。南向なり。本尊彌陀。長八

寸。當寺今は衰廢して住僧もたえしなれば。開山開基の由緒も詳ならず。 又玄寺 村の中央にあり。臨濟宗江戸麻布光林寺末なり。

正覺山と號す。開基は地頭中川左平太重興と云ふ。この人享保九年六月二十一日歿して後境内に葬り。又玄寺と謚せり。寺號もこれを用

ひたれば近き頃の開關なる事しらる。されど開山の名をば傳へず。客殿七間に六間。南向なり。本尊釋迦の座像。長六七寸。 門 冠木

作にて西向なり。 觀音堂 村内にありて客殿に向へり。二間に九尺。正觀音を安ず。長四寸あまりにして立像なり。 稻荷社 門を

入りて左にあり。小祠にして東向なり。

卷百三十二 村里部

橘樹郡 七 稻毛領

新作村 郡の北の方にあり。小田原家人所領役帳に小机の内とあり。又國領氏の傳によれば、この

村を稻毛庄とするせり。その稻毛に屬せし年代は詳ならず。今は稻毛領なり。されば後に領名起りてよ

り庄名は廢せしなるべし。江戸日本橋より行程五里餘なり。家數五十四軒、村の中央なる山の根に住す。

四境東の方新城村に隣り、巽は清澤村にて、南は上、下野川村に接す。西には梶ヶ谷村あり。北は末長

村にさかへり。東西十八町餘、南北四町許。其内東の方は平田にして、西より南へは山なり。水陸の田

相比すれば陸田の方少し。土性は野土へな錯はれり。山は野土、赤土なり。永祿の頃は後藤惣次郎が知

行『十五貫六百三十七文』と北條の役帳に見ゆ。御入國の後はしばらく御料所なりしが、寛永四年村内を

ささて増上寺に賜はり、彼寺の隱居料及び臺所料となる。又その頃のことによ、國領七郎右衛門吉次、

門奈又左衛門某二人に賜はりてより、今にその子孫國領又兵衛、門奈傳十郎二人の知行所なり。檢地の

事さだかならず。今は元祿七年に地頭よりあらためし水帳を用ゆと云ふ。

高札場 二ヶ所あり。一は村の中央にあり。これ増上寺より建つる所なり。一は中央より北方字間際根にあり。これ地頭二人よりの

高札なり。

小名 間際根 村の中央なり。 池ノ谷 西の方溜井の邊なり。 神明谷 乾の方なり。 佛手臺 中央八幡山の側を云ふ。



田畑上村の南の方なり。

**岩穴** 字間際根の邊なる山の下にあり。その數九あり。土人はこれをほら穴と稱す。口はわづかに匍匐して入るべきほどなれども。内は疊五六疊もしくはほどなり。其内に三階洞と唱ふるものあり。三つかさなりたる穴にて廣さ各十疊をしくほどなり。此外二つ々きたるもあり。土俗に古へ穴居の時の跡なりと云ふ。是も前の岩川村の穴などとおなじく兵亂のとき穀など畜へし所なるべし。

**川崎用水** 多磨川分水なり。隣村久永村より流れ來りて村内に引せり。溜井 小名池ノ谷にあり。一段許の池なり。今は用水にも用ひずと云ふ。

**八幡社** 字佛手臺にあり。社地すべて丘の上なり。鎮座の年代を傳へず。村の鎮守なり。神體は木にて長一尺二寸。社前に石階九十四級ありて下に石の鳥居をたつ。例祭は六月十九日。十月十五日の二日なり。村内養福寺の持。末社 三峯社 本社に向ひて左にあり。牛頭天王社、これも同じ。

**飯綱社** 中央より北の方佛手臺のつゞきなる丘にあり。小祠にて覆屋を設く。神體は立像にて長五寸ばかり。側に大小天狗の像二體を安ず。此社勸請の年代を傳へず。養福寺持。熊野三社 飯綱權現除地の内にあり。神體は三軀ともに木の立像にて長一尺一寸許。養福寺持。神明社 村の西にあり。小祠にて東向なり。養福寺持。例祭は九月十六日にて此日村民寄りつどひて飯を多くかしぎ互に強ひてはましむ。是日光山の強飯などの類なるべし。

**養福寺** 村の中央にあり。天台宗多磨郡深大寺村深大寺末。無量山昌谷院と號す。客殿六間に七間半。東向なり。本尊彌陀。上品の座像。長二尺五寸。開山は常範法師と云ふ。文明元年寂せり。觀音堂 客殿に向ひて右の方奥ふかき所にあり。三間に二間半。正觀音の立像。長二尺許なるを安ず。藥師堂 村の中央小間際根にあり。丘の半腹なり。土人は庵と呼ぶ。四間四方。南向なり。藥師の長二尺餘の立像。行基の作なりと云ふ。江戸麻布光林寺の住持槩桂の開基なり。槩桂は濟家の内にて別に一派をなし。一時大に宗法を振ひし頃此庵を建て、休息所とせしといふ。

**古塚** 四ヶ所あり。一は村の南。字田畑の上にあり。此塚六七年前農人誤りて鋤を入れしに土崩れて坑開け。中より古陶器二つ徳利

の如き形のものを出せり。其穴をのぞむに上の方左右へ青石を建てたるさま楸の形なり。土人その石の内三枚を出して今四間の橋とせり。一は村の南野川村の境にあり。辨天塚と呼ぶ。上に辨天の社ある故なり。塚の廻り二十八九間もあるべし。近き頃土人掘穿ちしに小蛇出て足に嚙付し故。恐れてやみしなど奇怪の話あり。是も内より徳利の状にて銷子の如くすき透り。其色いとうるはしきもの出てしとぞ。一は同塚の東の方にあり。今は七八坪許にて縁にその状を遺せり。これも農耕の妨なりとて先年掘崩せしに崇寧通寶の古錢あまた及び矢の根三寸ばかりなるもの出てたり。その數おびたゞしきことなりと云ふ。又太刀四振。長刀二柄。鎧のされ及び金具まはりの朽たるもの冑の天空の金物の如きもの出てたり。これらをあつめ俵にして埋めしと云ふ。一は字田畑上にあり。これも甲冑の朽しものなどありしと云ふ。この外佛手臺と云ふ所に二つほどありしが。これは皆掘崩して今は平地となれり。何れも故ある人を葬りし所とみえたり。

**坂戸村** 郡の北にて二子ノ渡の方へよりたる所なり。昔は稻毛庄の内なりしが、今は稻毛の領なり。

村名の起りを詳にせず。されど正平の頃美作左衛門大夫といひし人、此所を領せし南朝の下文あれば、古くより開けしことは論なかるべし。その文左にのす。

判

下 美作左衛門大夫家泰

可令早領知武藏國稻毛庄内

坂土郷事

右爲勳功之賞所宛行也早先例可致沙汰之狀如件

正平七年二月廿一日

是によれば昔は坂土と書きしを、後に今の如く戸の字にかへしこと知らる。江戸日本橋より行程五里



に餘れり。村の四境東は小田中村にて、南の方は末長村に隣れり。西は久本村、溝ノ口村に界ひ、北は二子、北見方の兩村に交れり。村の廣さは東西へ七町にすぎず、南北四町餘なり。民家五十七軒。村内平にして田多く畑少し。檢地は元祿十年織田越前守たゞせり。御入國の後は御料なりしに、享保二年有章院殿御靈屋料となれり。

高札場 村の中央にあり。

小名 上村の西の方を云ふ。高橋通り村の中程なり。下村の東をいへり。

石橋 川崎用水に架す。長五間幅六尺ばかり。北の方によりてあり。川崎用水 村の西の方溝ノ口村より入りて北の境を流るること長凡七百三十間餘にして上小田中村へ達す。川幅六間許。されどみづかさ卑きを以て當村の用をなさず。

御嶽社 村の東にあり。當村の鎮守にて安養院持。例祭年々九月十七日なり。

根方堀 是は川崎用水の分流なり。溝ノ口より入り北にそひ上小田中村に達す。當村の用水とす。

第六天社 村の中央木ノ元耕地にあり。安養院の持なり。

稻荷社 村の西字三町耕地にあり。村民持。

安養院 村の中央にあり。御嶽山眞性寺と號す。新義眞言宗小杉村西明寺門徒なり。開山は覺淳と云ふ。慶長十五年二月朔日示寂。本尊彌陀。立像長二尺許。客殿五間に七間。東向。

稻荷社 境内つゞきにて同寺の持。

諏訪河原村 多磨川邊なり。古へ北條家没落の後、かの家人諏訪左近頼久と云ふ者此地に住して開發せり。依りて家號を以て村に名づくると云ふ。或は小黑左近といひし者、この村を開けりと。おもふに

諏訪左近後に小黑氏になりしならん。村内明王院に此小黑左近が墓あり。慶長十六年七月廿五日死せしと云ふ。江戸日本橋より五里の行程なり。東西五町餘、南北十一町餘。四境は東の方北見方村に傍ひ多磨川を隔て、荏原郡下野毛村に對せり。西南はすべて二子村にて、北は瀬田村の飛地に接せり。多磨川に添ひし所缺所三百間餘、又百七十間餘二ヶ所あり。家數五十五軒、村内に散住す。此村すべて平地にて土性は眞土なり。川の邊は砂石錯り、水田多く陸田少し。兩毛作の田高低によりてあり。水損繁く旱損は稀なり。産物は柿の木地に應じて實のりよければ、秋ごとに江戸へ鬻げり。又耕耘の暇に菰を織りて生産を助く。開闢の時より御料にて正保四年に清水一庵に村内を分ち賜へり。孫龜庵の代承應二年の頃その所も上地となれり。此後ほど歴て増上寺御靈屋料として江戸巢鴨の代地にあてらる。檢地は元祿四年伊奈半十郎にて、新田檢地は四ヶ度ありて次第に開墾せり。御代官は伊奈氏より川崎平右衛門に至り、これより八人遷替して今は小野田三郎右衛門支配と御靈屋料入會の地なり。

高札場 村の南の方にあり。

小名 東向 村の東の方なり。塚田通 村の南の方を云ふ。寺前通 中央を云ふ。熊澤通 西の方を云ふ。諏訪前通

北の方を云ふ。中河原 北の方を云ふ。川附通 前に同じ。兵庫島 北の方にあり。飛地にて二子村を隔て、多磨川岸の源原

を云ふ。向河原 北の方多磨川を隔て、向ふを云ふ。飛地にて増上寺御靈屋料。江戸巢鴨の代地なり。

多磨川 村の北を流る。瀬田村より東の方北見方村に通ず。村内を流ること三町許。平水の時四十間餘の川幅なり。沼 村の

北の方多磨川の邊にあり。六畝ばかりの沼なり。堤 村の北へよりてあり。多磨川の水除堤なり。二子村より北見方村へ貫く。長さ

四百五十九間と云ふ。叭 村の乾の方字熊澤にあり。悪水をそぐ坑なり。長七間。高三尺。横三尺五寸。



**諏訪社** 村の北の方にあり。諏訪左近頼久が勸請なり。その年代は天正。慶長の頃なるべし。頼久が子孫今も此村にあり。例祭は九月十七日に杉山明神と隔年になせり。此時明王院の不動をこゝに奉じ來りて神座に安ずるを例とす。古は二子。坂戸。北見方。諏訪河原四ヶ村の鎮守なりと。されど今は菅村ばかりにして明王院の持なり。**杉山社** 字寺前にあり。大門の入口に木の鳥居を建つ。例祭はすべて諏訪の社に同じ。是も明王院持。**第六天、神明合社** 字東通りにあり。小祠。明王院持なり。**稻荷社** 字寺前にあり。小祠。明王院の持。

**明王院** 村の中央にあり。新義真言宗同郡小杉村西明寺の末なり。諏訪山圓能寺と號す。客殿七間に五間半。南向。本尊不動の座像二尺なるを安置す。又不動一尺二寸許なるあり。これは諏訪。杉山兩社祭禮の時出せり。開山開基詳ならず。古は西明寺門徒にてありしが。寛保元年住持盛賢の時本寺の住僧隆眞より免許ありて末寺となれり。元祿四年當寺の來由を書上げし書に云ふ。開山の僧は年久しきことにて詳ならず。中古は定りたる住持もなくして堂宇大破に及びけるを。慶長年中良識と云ふ僧住して再建せりと。村の水帳には圓能寺と記したりしが。寛文八年より今の如く明王院に改めたりと。**觀音堂** 客殿に向ひて左の方にあり。二間半に二間。東向。本尊は立像にて長一尺許なるを安置し。側に圓魔の像長二尺二寸なるあり。共に作しれず。**塚** 三 一は字塚田通にあり。百姓傳八と云ふもの住居の後に高さ三四丈ばかりの塚なり。上に富士淺間を勸請し。石の祠を立つ。裏に諏訪左近七世の孫小黑傳八と鐫れり。寶曆の頃造立せしものなり。故に土人淺間塚と云ふ。今も同じ邊にあり。古は廣さ百坪許ありて高き塚なり。一年土人掘くづせしに武器財寶の類出でしが。その人大に煩ひなやみけり。恐れて其まゝ瘞めおけりと。今は僅の塚なり。今も同じ邊にあり。四五十坪許にてさまで高からざる塚なり。上に天神の社あるゆゑ。土人天神塚とよべり。

**舊家者百姓傳八氏**は小黑と云ふ。曩祖は本國信濃にて諏訪安藝守源頼忠の末孫。諏訪部宗右衛門が弟諏訪左近頼久と云ふ。頼久北條家につかへ。天正年中に至り左京大夫氏直没落の時その身は遁れて寺尾村小黑の里に來り。此所に暫く住せり。祖先はゆゑあるものなれど。かく民間に落しかば氏をも改めて地の名により小黑とぞ云ひける。この稻毛の地は多磨川にそひてよき地なればとて。二人の子をして其ほとりに新墾の田を開かしめ。居宅などかまへ。それより農民のわざをのみ勤めしかば。次第に家富まかえけり。因て村名をも諏訪河原と名付けたり。彼が家に祖先より傳へし武器寶物もありしが。かゝる農民となりしかば今は用なきものなりとて。ことごとく前なる塚へ埋めたりと云ふ。その外舊記などもありしを慶長の頃洪水の災にかゝりし時流失せり。その後もしばしば村内水災ありしかば。堀を鑿ちてその水道を通じ。是が爲に大に力を盡せり。その頃の御代官小泉次太夫も溝洫のことをつとめしかば。かの指揮に従ひ近村の人夫などかりたてしすみやかに事なれり。その後又稻毛。川崎兩所の用水を開かれし時。かの次太夫奉行せり。その時此村より多く竹をきり出して御普請の材料とせり。此等のことその功すくなからず。又諏訪明神はもとよりおのが尊敬する所なればかの社をも此地に造立せり。慶長十六年七月二十五日左近頼久死せり。その後歴代の事蹟は傳へれど。世々連綿して今の傳八に及べり。家に傳ふるものわづかに存する所左の如し。**法華經八卷一函** 此は先祖の讀誦せしと云傳ふれど。さして古きものとは見えぬ。**刀一腰** 無銘にて長さ二尺五寸五分。中心六寸。鑄甚しくて身やきはのさまも見え分らず。鐔のわたり三寸二分。銕にて透しあり。尤も古様なり。拵もあれどさせるものならず。**脇差一腰** 長さ一尺三寸。中心二寸五分。銘は下坂とのみあり。鐔も亦銅拵なり。

**北見方村** 諏訪河原村の東につゞけり。土人の傳にはむかし住吉の庄と云ひし事ありといへどたしかなる證なし。又他の村にも此庄名ありし事を聞かず。村名の起りを尋ねるに、此村の里正が先祖某なるもの今川家の臣にて後、北見氏に仕へ故ありて農家にくだり、荏原郡瀬田村に住せしが當地を新開し、主の氏を以て北見方と名づくこと云へり。是もうけがたき説なり。江戸日本橋より行程四里半。四境は北より東の方は下野毛村に接し、南は上小田中、坂戸の二村に隣り、西は二子、諏訪河原の二村に接せり。東西へ十町、南北十八町。民戸四十三軒、四方に散住せり。地形は平にして土性は眞土なり。田畑は等分といへど、その實は陸田多き方ならん。常に水災は多くして旱損はなし。北の方多磨川の向に飛地あり。農民の耕作場なり。こゝに作場渡もあり。檢地は慶長十五年八月朔日なり。その頃の水帳今も残れ



り。その末に川原七右、植木兵左、村右衛三人の名をしるせり。又同十七年八月廿九日にも改めあり。その水帳に吉田源左衛門、植木兵左衛門、黒田左近、有馬清兵衛の名をのす。それより程へて後寶永四年四月にもあり。其時の水帳には御代官江川左兵衛、小長谷勘左衛門二人の名あり。多磨川附新田の檢地は享保十八年寛播磨守、延享二年神尾若狭守、寶曆十一年伊奈半左衛門なり。地頭は御入國の後齋藤攝津守にて、元祿十一年故あつて上地になれり。御代官の遷替は寶永四年より江川左兵衛、正徳三年より同き太郎左衛門、享保十五年より田中休藏、寛保元年上坂安左衛門、同年伊奈半左衛門、寛政四年より菅沼安十郎、文化元年より中村八太夫、同三年より伊奈助右衛門、同十年より小野田三郎右衛門が支配なり。

高札場 村の東よりあり。

小名 道下 村の中央なり。

たかひ上 村の程より南の方上小田中村の境までを云ふ。

大道根 村の東の方。

堀合

南の方。

高橋 西の方。

古屋敷 前に同じ。

土腐 同じ邊なり。

多磨川 村の北の方を流る。西の方諏訪河原村の境よりいり。長三百間餘にして東の方下野毛村に通ず。川幅六十間ほど。水増されば七十間餘に至るといふ。

古多磨川

村の東の方一段許の沼にて其形風曲せり。今の多磨川よりは南にあたり。堤二

一

は村の中央を南北に貫けり。長四百八十間餘。敷の幅七間なり。一は村の北古多磨川に添ひてあり。長三百八間餘。敷の幅三間。

用水

水村の中央を流る。西の方二子村より入り。中程にて二流となる。一は東へ通ず。これを宮内用水と云ふ。一は南へ流る。これを小杉村。上丸子村用水といふ。共に村内をふるること三百間許。當村にても水田に引用ゆ。

川崎用水堀 村の南境を流る。二子村より入り。東の方小田中村に通ず。

石堰 四ヶ所 共に村の西の方にあり。長九尺。横八尺。四ヶ所ながら同じ大きなり。

悪水吐

水道 四ヶ所 村の中央堤通りにあり。自普請所なり。

白髭社 村の北の方よりあり。神體は故あつて村内正福寺に安ず。社前そこばくを隔て、木の鳥居をたつ。例祭は九月十三日。

村の鎮守にて正福寺持なり。

伊勢宮 村の東の方にあり。尤も小祠。前に木の鳥居を建つ。是も正福寺持なり。

第六天社

村の東の方にあり。小祠。同寺の持なり。

正福寺 村の南の方にあり。新義真言宗にて同郡小杉村西明寺末なり。白玉山と號す。客殿七間に五間。西向なり。本尊は大日。座像なり。長一尺許。開山は法印快雅と云ふ。天和二年二月二十一日寂せり。村の鎮守白髭の神體いつの頃よりかこゝに移して客殿の左の方に安置す。長一尺許に見ゆ。年々例祭の時社内へ移し。常はこの所にある。寶物 三幅對の畫像中は不動。左右に赤童子。白童子を畫けり。各長三尺五寸許。横一尺餘なり。本覺大師の筆と云ふ。これは慈覺の法脈を續きし人と云ふ。觀音堂 客殿に向ひて左の方にあり。九尺に二間。南向。聖觀音。立像長一尺なるを安ず。

彌陀堂 村の中央にあり。四間半四方。西向なり。本尊は立像にて。長一尺二三寸許。正福寺持なり。境内に古碑三四基あり。何れも文字は磨滅して讀得ず。

古塚 村の北の方にあり。田間に突出せり。高七尺餘。敷の徑六間許。何塚と云ふことも傳へず。中古里正掘りて平田を開かんとせしに。古陶器并に壺など出てしが。さまたて證となすべき物なし。古へ故ある人の葬地などにもあるか。今は上に石の地藏を建つ。

宮内村 郡の北の方にて多磨川にそひたる地なり。村内春日社にある鰐口の銘によるに稻毛本莊と云ふ。此村名古き世より起りしことと見ゆれどその初をしらず。土人の傳ふる所は早魃のとき、嵯峨天皇雨乞のため當所春日明神の社へ宮内卿藤原朝臣某を奉幣使として下されけることありしに、その驗ありしかば、かゝる故に宮内村と稱すと。此事妄説にして更に取るべからざれど、姑く傳ふるまゝをしる

卷百三十二 村里部 橋樹郡 七

一二七



せり。おもふに昔神社のことによりにて、かく名づけしもしるべからず。されば『くない』とは唱へずして『宮うち』といへり。家數三十六軒、村の中央にあつまり住す。此村は昔より民戸定めて三十六軒とかざり、此餘戸數をまさざりしことなりしが、安永年中よりその定もやみぬといへり。江戸日本橋より四里半の行程なり。村の四隣東は小杉村にて、南は上小田中村に隣り、西は北見方及び荏原郡下野毛村に接し、北も同郡等々力村に隣りて大抵多磨川を界とす。東西五百七十間、南北四百三十間。水田多くして陸田少し。土地は惣て平なり。土性は眞土砂交りにて専ら糞培の力を待ちて耕種す。河邊の地なればややもすれば水災あり。永祿の頃北條の家人曾根外記が知行二十貫文、小机宮内郷の内にあり。それより上の事は詳ならず。御入國の後には御料所なり。其頃より寛永五年までは小泉次太夫支配せり。同六年より十五年までは中野吉藏、伊奈兵藏等預り奉れり。明る十六年齋藤攝津守に賜はりしが、元祿十年ふたたび御料所となり、江川太郎左衛門、日野小左衛門、川崎平右衛門、田中休愚右衛門、同休藏等かはるがはる支配せり。其後は伊奈半左衛門が家にて世々支配せり。寛政年中より菅沼安十郎、中村八太夫、伊奈友之助等が支配をへて今は小野田三郎右衛門信利支配せり。檢地は慶長年中ありしとのみ傳へて詳なることをしらず。その後多磨川堤の外は慶安三年地頭齋藤攝津守たゞせり。又同き五年堤の内も同人檢地す。享保十八年寛播磨守正鋪新田をたゞし、延享二年神尾若狹守春央うち出しの檢地せしなり。

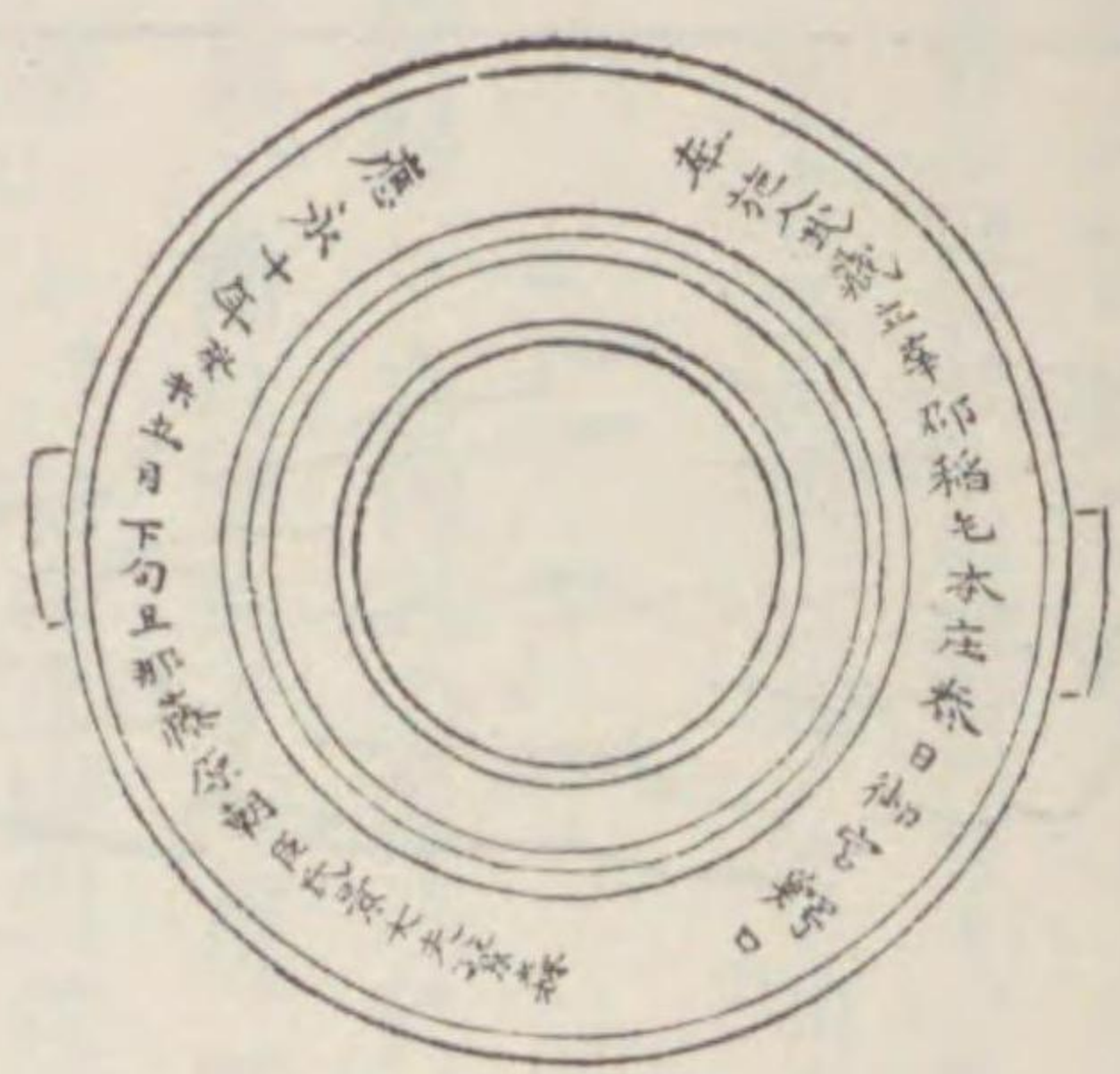
**高札場** 村の中央御藏前にあり。

**小名** さんさい耕地 北の方なり。又西の方より南へかけても此字あり。古川耕地 南の方なり。川田耕地 東の方あり。前耕地 北よりあり。堤外耕地 是も北の方なり。

**多磨川**

村の北を流ること千間餘。平常川幅四十間許。古は多磨川村西より北見方。上野毛の堺に係り長へ向ひて流れしが。慶安年中地をかへて今の如くなりしかば。古の流は沼となれり。金井橋 西の方の堀に架す。わづかなる橋なり。村民云ふ慶長年中のことなりし金井木工之助と云ふ者。此所にて賊の爲に討れしが。後に祟をなせしゆゑ塚をきづきて觀音に視へり。しかりしよりかれが氏をとりにて橋の名とせり。稻毛川崎用水 西の方北見方より流れ來り所々の水田へ注ぐ。又小杉用水。上丸子用水と云ふ細流も同村より來る。これらもみな稻毛用水の支流なり。川除堤 多磨川の川除なり。長千三百間餘。敷の幅五間。高六尺。この内少く東の方に二條の堤ありて多磨川涯までさし出たり。是を横堤と號す。

圖版五 八幡社鰐口

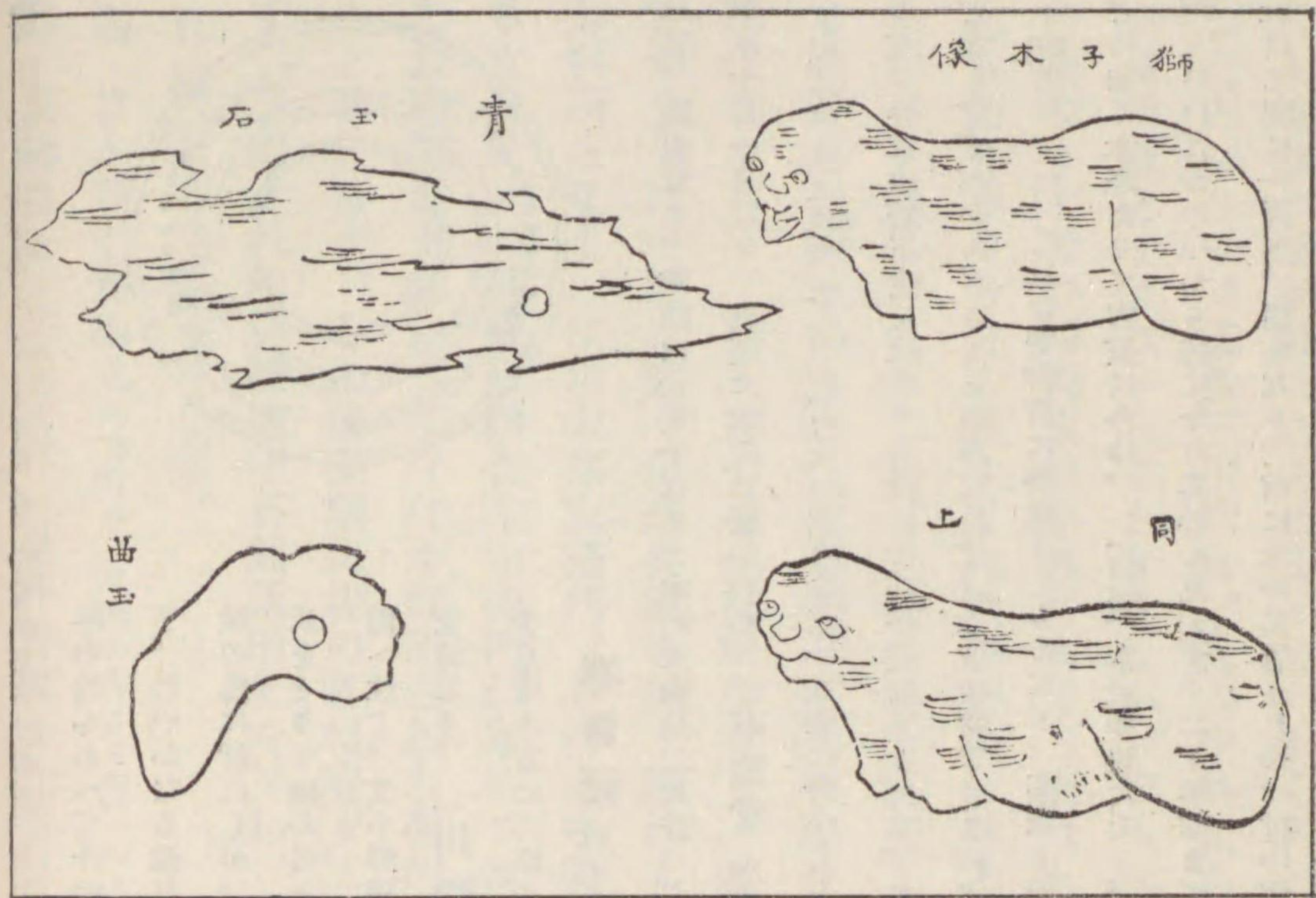


**春日社** 村の東の方字高瀬と云ふ所にあり。村の鎮守なり。勸請の年歴をしらず。社

五間に三間。南向なり。神體は赤童子なり。木の立像長二尺許。この神體昔は畫像にていと古き物なりしを近き頃其形を彫刻せしと云ふ。例祭は年々十月一日なり。社頭に木の鳥居をたつ。本地堂 本社に向ひて左にあり。本地薬師。木の座像長三尺許。堂は一間半に二間なり。末社 八幡、牛頭天王、稻荷合社 本社に向ひて右にあり。別當 常樂寺 社地のつゞきにあり。新義眞言宗小杉村西明寺の末。春日山醫王院と號す。開山は行基菩薩なりと云ふ。本堂十一間に七間。南向なり。本尊大日。木の座像にて長二尺許。縁起もあれど尤も信ずべからざることをみればはぶきて載す。されど應永年中の鰐口等ものこりしを見れば古社なることは疑ふべからず。寶物 鰐口一口、これは昔神前に掛置きしものなり。其圖上の如し。獅子木像二頭 いかなることに用ひしや由緒詳ならず。木は檜などの如く木理ありて古質にみゆ。石櫃 本社の後にあり。神靈いとあらたなれば近づくときは祟ありとてあへて近づくものなし。苔むし埋りければおのづから朽て今は其形も見えず。二十年前までは纒に見えたりと云ふ。牛頭天王社 東樹院の境内つゞきにあり。社は二間に一間半。南向なり。前に木の鳥居をたつ。村の鎮守なり。例祭は十月一日。天満宮 北の方多磨川の岸にあり。



玉曲及石玉青像木子獅 六版圖



小祠。例祭六月二十五日。東樹院持。五郎社村の長にあり。小祠なり。東樹院持。神明宮 五郎の社より少く北にあり。小祠にて南向なり。東樹院持。稻荷社 坪の方にあり。九尺四方の祠にて東向なり。前に木の鳥居をたつ。此所昔は春日の旅所なりし故。土人呼びて旅所稻荷と云ふ。稻荷社 中央にあり。是も九尺四方の社にて南向なり。前に石の鳥居をたつ。東樹院持。

東樹院 村の中央にあり。新義真言宗小杉村西明寺の末。大榮山多門寺と號す。開山の年代等詳ならず。中興開基は石井源左衛門と云ふものなり。天正の頃の人と云ふ。今も村民に其子孫遣れり。客殿九間に六間。本尊不動の木像を安ず。毘沙門堂 客殿に向ひて左にあり。九尺四方の堂なり。多聞天の像は木の立像にして長一尺五寸。相傳ふ當寺昔は多磨川の邊にありしが。洪水のために境内彼川へ崩入りしより後こゝへ移せり。今も昔の跡を字して毘沙門堂と云ふ所あり。これによればこの堂も古き造立なるべし。高元寺 東の方小杉堺にあり。淨土真宗京都西本願寺末。本堂六間に四間。東向なり。本尊彌陀。木の立像にして長二尺許。當寺も開山の年代等詳ならず。慶安年中の水帳に彌陀堂

料と云ふことあり。これ當寺のことなりと云ふ。その頃既に起立せしことしるべし。

舊家者百姓榮八 石井を氏とす。先祖石井源左衛門下野國より出て隣村小杉村に移り。それより天正四年當所へ移りしと云ふ。これ東樹院を開基せし源左衛門なり。然るに神奈川宿の名主石井源左衛門が先祖も同名にて。北條家以來の舊家なりと云ふときは同族なとにや。系圖を失ひたれば考ふるに由なし。

小杉村 宮内村の並びにて多磨川に傍ひてあり。江戸日本橋より行程四里に餘れり。村の四境東は上丸子村、南は中丸子、市ノ坪、今井の村々にて、西は上小田中、宮内の二村及び荏原郡等々力村飛地の邊に堺へり。北は多磨川にてこの川の向ひは、又同じ郡の内等々力、上、下沼部の三村にとなれり。東西六町半にあまり、南北へ十五町餘なり。土性真土へな砂土交り、田多く畑少し。家數百二十三軒。村内に相模國中原街道貫けり。丸子村より入りて上小田中村に通ず。この村開墾の初は傳へず。寛永二十年伊奈半十郎忠常が承りにて檢地あり。其後元祿十年織田越前守も檢地せり。この頃は御代官所にて伊奈半十郎うけたまはり、それより世々彼家にて支配し、享保年中田中休愚右衛門喜古より引續き、上坂安左衛門、川崎平右衛門等支配し、今は小野田三郎右衛門御代官所及び増上寺御靈屋料の所交れり。

高札場 小名片町にあり。

小名 總山耕地 村の東の方にあり。中町耕地 東の方を云ふ。反町耕地 同じ邊なり。東町耕地 東寄なり。

新田 西の方を云ふ。御殿跡 北寄なり。由來は舊蹟の條に出せり。山谷 陣屋跡のあたりを云ふ。宿 中原道の西寄なり。

片町 同じ邊にあり。榎戸 村の中程中原街道の側にあり。古は此邊榎の古木あり。旅人小杉の榎とて目あてになせり。かゝる故の



名なりと。

**多磨川** 村の北方を流る。村内を通ずること七八町。幅平水の頃は二十間許。耕地橋 上小田中村の境にあり。川崎用水に架せる板橋なり。破損の時は官より修理あり。長さ六間。幅八尺。この村と上小田中兩村の持なり。稲毛川崎用水 西南の方上小田中。今井二村の境を通ぜり。上丸子村の方へ達す。水路不便なれば村内の用水にはならず。

**林** 多磨川水除堤の北側にあり。

**杉山社** 西明寺の境内つゞきにあり。村内鎮守三社の一なり。いつの頃の勸請なりやその年月を傳へず。例祭は九月二十九日。隔年に行へり。村内西明寺の門徒正覺院の持なりしが廢院の後本寺の持となれり。神明社 小名山谷にあり。神明の例祭隔年九月二十

九日。村民の持。相殿總社權現。神體は木の立像。長一尺五寸。束帶の狀なり。この社は正徳の頃迄は村のはづれ多磨川の傍にありて。則ち村内成就院の持なりしが。多磨川の岸缺崩れ其地を失ひたれば。神明の社に合せ祭れりと。この二社に前の一社を合せて村内三社の鎮守とよべり。元徳三年の斷碑一枚社地にあり。こゝに傳ふるゆゑんをしらず。

**西明寺** 村の中央街道のほとりにあり。新義真言宗京都醍醐三寶院の末山なり。龍宿山と號せり。古くは二宿山とも云へりと傳ふ。最明寺時頼入道道崇の開基なりと云傳ふれど慥なることを知らず。寛永十九年八月十七日寺領十石の御朱印を當村の内にてたまはりしより今もかはらず。境内も則ち寺領の内なり。當寺元は郡内有馬村にありしに。元弘の亂に鎌倉北條氏没落の後當村に鎌倉の浪人潛居してありし故。其ゆかりを以て此村へうつりしといへどたしかに其年歴を傳へず。客殿十二間に七間半。本尊大日如來。木の座像を安ぜり。

**天満宮** 境内東北の隅にあり。小祠。南向。境内の鎮守なり。八幡宮 境内の長の方にありて西に向へり。觀音堂 境内に入り左にあり。四間四方。東向。十面觀音立像一尺二寸。木佛なり。閻魔堂 表門を入り左にあり。三間四方。鐘樓門を入りて右にあり。九尺四方。享保十七年壬寅十二月の銘を鐫れり。寺中 正覺院跡 境内南の方にあり。是も本尊御朱印地内なり。その廢せし年月を傳へず。成就院 村内多磨川の傍にあり。新義真言宗村内西明寺の末。惠日山と號す。開山の名を傳へず。境内に法印尊秀寛文二

年十月十四日』と鐫りたる石碑あり。是等もし開山ならんか。もとより小寺なるが上に。今は村持にて住職なければず。すべてのことをしるべからず。客殿七間に六間。南向。本尊大日。座像八寸なるを安ぜり。妙泉寺 同じ邊にあり。日蓮宗川崎宿妙遠寺の末。爰も住僧なければ山號以下のこと。すべて尋るに由なし。たゞ小泉次大夫が開基せしと云傳ふるのみ。されば次大夫吉次か其子次大夫某二人の内なるべし。客殿五間に四間。東向。本尊三寶祖師を安ぜり。

**古蹟小杉御殿蹟** 村の中程にあり。此御殿は昔將軍家此邊へ御鷹狩の頃又は相州中原の御殿へ渡らせたまふ時。御中やどりの爲に慶長の頃此所にかりの御殿出來しなり。その後寛永十七年新に御造立ありて安藤市郎兵衛。小侯平右衛門といひしもの兩人その事をうけたまはれり。其頃のさまは表御門。裏御門などいかめしくして御門の外には下馬札を立てられ。内には御馬屋敷。郷藏。御賄屋敷。御殿番屋敷などさまざまたちつゞけり。しかるに明暦元年に至り其御殿の造營をわかつて品川の東海寺に賜はりしかば。其頃よりはわたらせたまふこともまれくになりしにや。寛文十二年にのこれる御殿をば。江戸上野の弘文院へ賜はりしと云ふ。或は萬治三年に御殿を悉く廢せられしといひ。又寛文元年御殿地の内にありし竹木等も御拂となりしかば。その頃御殿をまもりし井田七郎左衛門願ひあげしにより。かの竹木及び三千坪餘の地をば其まゝ同人にたまはれりと。今は皆田地となり御守殿跡とて纔に二百坪餘。長く除地となれり。そこに稻荷の小祠をたつ。かの子孫は清五郎とて江戸に居り。當所にも子孫のこり。喜左衛門といひて世々この所に居り。今もその地を進退す。

**陣屋蹟** 御殿屋敷の後にあり。昔御代官小泉次大夫が居住せし跡なりと云ふ。

**舊家者百姓平作** 安藤氏なり。小田原北條の家人安藤大炊助と云ひし者あり。その四代の孫を久左衛門重祐と云ふ。其子を平作といひしよし。是今の平作が先祖なり。されど詳なる事歴はつたへず。百姓源五右衛門 菅田氏なり。系圖を失ひたれば詳ならず。されど舊家なり。先祖より傳へしとて古刀一腰をもてり。長二尺九寸。中心六寸一分。外に矢一筋。又めぐり二尺餘の古釜一を持ちたれど。そのみにて古のこををしらず。



**上平間村** 郡の北にあり。江戸日本橋より行程四里に餘れり。村の四境東は大抵多磨川を堺ひとし。荏原郡矢口村に接し、南は下平間村にそひ、西は鹿島田、市ノ坪の二村に隣り、北は中丸子村に境ひたれど、多磨川を隔て、下丸子村に及べる所もあり。東西八町餘、南北へ九町に餘れり。民戸八十四軒。村内平地にて水損の患あり。田多くして畑少し。土性は眞土なれども砂交れる所あり。按ずるに東鑑建長八年六月二日辛酉の條に『奥大道。夜討強盜蜂起。成往反旅人之煩。仍此間度々有其沙汰。可致警固之旨。今日被仰付于彼路次地頭等。』と書し、其下に廿四人の名を盡くのせたれど其間には交名を記さずして、葦野地頭平間江地頭など書せるあり。又式目新編追加にも此事をのせ、彼廿四人を記せり。其内に平間江には武藏の二字を加へ、江の字を郷となせり。東鑑に『江』の字を書きたるは『郷』と音通にて記せしにや、又郷の艸書、江の字の形に似たれば、かく誤りしにや。このみに非ず、此書にはかゝる類あり。さらば平間郷と云へるはこのことなるべし。もとより武藏の中に平間といへる郷名はなく、平間村といへるもこゝより外に唱ふる所なければ、此所古は鎌倉より奥州への往還にて、建長の前より此名をおひしといはんも、理り然るべき事にて舊き郷名なるべし。遙の後永祿の頃は此所一貫八百文の地を、北條の家人太田大膳亮といひしもの領せり。小田原記にも『永祿十二年甲斐の武田信玄江戸の邊を追捕せしとき、矢口の渡を船にて稻毛の平間と云ふ所へわたり、稻毛十六郷を追捕す云々。』と見えたり。いづれにも舊き村なるべし。此村今見る所は二村共に多磨川の南にあれども、往昔は上下をわかたず一村なりしに、一旦多磨川の瀬かはり中央を流れしより上下に分ちしと云ふ。今上村は稻毛領に屬し、下は川崎領に屬したるは、多磨川を堺として左右にありし故に、かく領名も分ち唱へしならん。其後ふた

たび川の瀬かはりて、今の如くなりしも亦さまで近きことにもあらずと云ふ。御入國の後には御料にて寛永廿一年伊奈半十郎忠治檢地し、新田は享保年中寛播磨守正鋪、其外伊奈半左衛門忠達、神尾若狹守春央等の檢地なり。御代官もしばしば遷替ありて今は小野田三郎右衛門信利の支配所なり。

**高札場** 村の中央にあり。

**小名** 梨ノ木村の中央にあり。 池淵 同じ邊にあり。 石原 是も同じ邊にあり。 蒲田 南の方にあり。 柴新田 蒲田の邊にあり。

**野新田** 南の方を云ふ。 八反張 前と同じ邊なり。 大耕地 柴新田の邊にあり。 この所の土中に大石埋れありしと云ふ。

**押切** 同じあたりを云ふ。 古川 西の方にあり。 古へ多磨川この所を流れたりと土人云傳へり。 本村村の中央なり。

**北村** 北の方を云ふ。 大村 西寄を云ふ。

**多磨川** 中丸子村より入りて矢口村に通ず。其間屈曲して流れたれど村内を経ること五町餘。川幅平水の頃は三十間許。 **平間**

渡村の北多磨川の中に渡船の場あり。江戸より往來の渡にて是を平間の渡といへり。十月より三月までは假に橋を架し。其餘は舟を以てわたせり。其あたりを萩原瀬と名づけたり。この渡船の運上として年毎に若干錢を出せり。これは明和三年より始りしといへど。渡船の始りしは舊きことなるべし。 **川崎用水** 市ノ坪村より當村の田地にそそぎ。下平間村に達せり。 **堤** 村の中程より下平間村の方へ至る。堤上は川崎往來の直道なり。

**八幡社** 村の中央江戸への往來の傍にあり。拜殿二間に三間。内陣一間半に二間。本地彌陀の座像。長九寸。例祭八月十五日。社前に石の鳥居及び石階あり。法田寺の持。此以下三祠も同寺の持。 **天王社** 社地は小高く南向の祠にて前に鳥居を立つ。神體不動。長九寸許。例祭六月六日。 **天神社** 天王社の竝びにあり。南向の小祠なり。神體八寸許。東帯の木像なり。例祭二月廿五日。 **神**

**明社** 社二間半に二間。南向。神體立像にて一尺餘。例祭十一月十五日。いづれも鎮座の年代を詳にせず。



**法田寺** 小名大村にあり。日蓮宗池上本門寺の末。平等山と號す。慶長十一年寶藏院日光起立し。寛永十九年十月朔日寂す。客殿七間半に六間半。本尊三寶を安ぜり。 **毘沙門堂** 境内の鎮守にて各殿の背後にあり。二間半四方。神體木の立像。一尺二寸。中老日法

の作。 **西福寺** 村の中央にあり。一向宗京都東本願寺の末。涼榮山と號す。寛永三年の起立にて開基教覺。承應二年六月二十七日寂せり。客殿四間半に五間。南向。本尊彌陀の立像。長一尺五寸なるを安ぜり。 **寮** 村の西の方にあり。村民の墓所を守る人の居る寮なり。二間半に四間。西向。本尊彌陀の立像。長二尺許なるを安ぜり。もとより寮なればいづれの頃たてしと云ふことをも傳へず。 **銚**

**子塚** 村の西にあり。高一丈許。上に稻荷の小祠あり。土人云ふ塚の形銚子に似たれば名づく。 **舊家者百姓五郎左衛門** 加藤氏にて世々村の里正をつとむ。先祖加藤駿河守と云ふは甲陽軍鑑等に見えたり。此人甲斐國よりこの稻毛庄の内へ落來りたるよしなり。按ずるに駿河守が稻毛庄へ來りたりと云ふことは外に所見なし。荏原郡上目黒村の里正を加藤定右衛門と云ふ。これも駿河守の子孫なりと云ふ。家系を藏せり。かの定右衛門の祖先是上目黒村に來り。この五郎右衛門の先祖はここに來り。居をとめ今に至れるにや。さあらんには定右衛門は兄の家にてこは弟の家なるべし。なほ目黒村定右衛門の條に出せり。

**百姓庄太夫** 田島氏なり。是も舊家なるよしへども家系を傳へず。按ずるに田島兵部左衛門之房など云ふ人は。小田原北條家に屬してしばしば戦功ありしことその頃の記録にまゝみえたり。これ等の子孫なりや。土人もしか云へり。

**上丸子村** 郡の北にあり。古へ丸子の庄といへり。江戸日本橋より四里半。民戸百十一軒。東は多磨川を隔て、荏原郡下沼部村に堺ひ、南も同村の飛地に隣り、西は小杉村にそひ、北は又多磨川を隔て荏原郡上沼部村なり。東西五町餘、南北十三町に餘れり。村の中央に一條の往還あり。そのかゝること五町餘、下沼部村より入りて小杉村に達せり。これを中原街道といへり。この邊地形低ければおのづ

から水田多く陸田少し。土性は上に同じ。この村名は舊くより唱ふることならん。按ずるに東鑑に『治承四年十一月十日戊午。以武藏國丸子庄。賜葛西三郎清重云々。』とあり。此丸子庄は則ち此邊をいひしなるべし。後世其村名のみ残りしにや。上、中、下丸子は其庄名の起る所にして、外にも此頃は丸子の庄に屬せし村々もありしならん。今は失ひて傳へず。又古河の成氏兩上杉と矛盾の頃『文明十年正月廿五日扇谷の家老太田道灌入道出馬して、豊島勘解由左衛門が平塚の要害へ押よせ攻めければ、其曉沒落して敵なほ丸子城、小机城に籠る云々。』と鎌倉大帥紙にみえたり。此丸子の城と云ふは當村にありし城なるべし。小机もこゝより程遠からざれば、地理も亦然るべし。又其頃城主の名は傳へざれど、成氏に屬せしものども籠りしと見ゆ。今村内を尋るに其舊地を傳へず。又文明十八年道興准后丸子の里にてよめると云ふ歌あり、『東路のまりこの里に行きかゝり足もやすめずいそぐ暮かな』と。其ありきし次は、江戸の方芝浦よりこゝに至り、それより駒林にかゝれり。駒林もこゝより近き邊の村名にあれば、此丸子といへるもこの所なるべし。されば相模國丸子村などとはもとより異なり。此頃は何人の所領なりしなど云ふことは定かならず。星霜おし移りて永祿の頃は、北條氏支屬の所領なりき。其家の所領役帳に『廿貫文小机上丸子千葉殿』とのせたり。郡内長尾村の舊家太郎兵衛が家に傳へたる文書にも『丸子之内云々。千葉殿御老母堪忍分。』と見えたり。末に『甲子三月廿三日』とあり。こは永祿七年なるべし。此村上下に分れしも、その初の年歴はしらざれども、彼役帳に『上丸子』とあれば、永祿より以前に分ちしは論なし。又村内山王社に藏せる丁亥及び庚寅等の文書にも上丸子の名あり。これなん天正十六年丁亥、同十八年庚寅なるべし。此頃は誰人の所領なることは傳へず。御入國の後正保年中は齋藤攝津守の知行



に山王領交りしことはものに見えたり。其後齋藤氏は所替ありて、元祿十年より御料所となれり。其頃  
檢地あり。又寶永より寶曆の間にもありしと云ふ。それより御代官の遷替は度々にて、今は小野田三郎  
右衛門信利支配所と山王領も交れり。

高札場 村の中央字宮地にあり。

小名 青木前耕地 相州往來の中程にあり。二本松 同じ邊にあり。石井田耕地 是も相州往來の西の方を云ふ。

芝耕地 多磨川の方によれり。古川耕地 南寄にあり。以下いづれも同じ邊にあり。五町免耕地 五段田耕地

多磨川 村の東北にあり。平水の頃は川幅六十間許。小杉村より入りて荏原郡下沼部村の飛地向河原村へ達す。村内を流るゝこと屈

曲したれば凡十七八町あるべし。丸子、渡 村の東多磨川の中。下沼部村の飛地に渡船の場あり。船四艘を以て常に往來の人を渡せ

り。そこを丸子ノ渡と云ふ。こゝも十月より三月までは舟を止め。長四十六間に幅一間の土橋を架して行人の便となせり。おもふに古は

當村の西を多磨川流れしならん。何の頃か川流變遷したれば。今の如くこの川の西にも下沼部村の飛地出來しか。されど古へのさまなれ

ばこの渡船のことは沼部の村民はあづからず。故に今この渡を當村の條にかゝげたり。稻毛川崎用水 纒なる流なり。隣村小

杉より入りて中丸子村に及べり。

山王社 村の東方にあり。御朱印二十石。本社二間に三間。幣殿二間に二間半。拜殿は二間半四方。前に鳥居を立つ。鎮座の初は詳

ならず。御朱印を賜ひしは寛永十九年八月十七日なり。當社の縁起あれど後人附會せしものとみえて取るべきことなし。ことに『承治庚

申』などあらぬ年號をしるしぬれば考ふるによしなし。もし承治は治承の誤にて。支干は更に誤り載せしにや。これのみならず其載する

所何れもうけがひ難きことどもなればこゝにのせず。寶物 劔一振 長さ纒に九寸五分なり。銘はなし。鎗一筋 銘。日向守正

氏の五字を鐫りたり。これらは小松内大臣重盛の納めたりといへども。たしかなることをしらす。古文書二通。

上丸子郷四十二貫五百六十六文此内三貫文兩名主に永代御免殘而卅九貫五百六十六文可致御藏納旨

被仰出者也依如件

北條氏虎印あり

丁亥八月十八日

今阿彌 承之

丸子郷名主百姓中

上丸子之内近年川成ニ付而世田ヶ谷領□目之郷興問答以依之去年己丑九月興津加賀中田加賀安藤代

福田三人之檢使以被爲見候所ニ於上丸子者無紛由申上以間急度作職申付令授之御年貢可指上者也

仍如件

北條氏虎印あり

庚寅三月十六日

今阿彌 奉之

中村五郎兵衛丞

上丸子百姓中

駒形社 本社に向ひて左にあり。九尺四方。稻荷社 本社に向ひて右にあり。一間四方。釋迦堂 境内にあり。是は村内大樂院持。

神主山本丹波 吉田家の配下なり。いづれの頃より當社の神主となりしや。家系を傳へざれば詳ならず。按ずるに社傳にも神宮寺の名

は見え。神主のことは記さず。且社地の釋迦堂は村内大樂院の持なれば。昔は當社も大樂院の持にて山本氏の神主となりしは遙に後のこ

となりと主人いへり。今は大樂院にては當社のことにはあづからず。熊野社 小名古川にあり。小祠。西向。例祭八月十五日。村

内大樂院持。熊野社 南方にあり。大樂院の持。諏訪社 東北の隅にあり。西藏院の持。八幡社 村の中央にあり。社

二間に二間半。西向。前に鳥居あり。例祭は三年に一度あり。勸請の初をしらす。大樂院の持。伊勢宮 村の北にあり。纒なる社。

祭禮八月十五日。是も大樂院の持。天満宮 村東多磨川の邊にあり。本社三尺四方。覆屋二間四方。拜殿二間に二間半。南向なり。



前に石の鳥居あり。例祭九月二十五日。西藏院の持。末社 子權現社 本社の後にあり。右にて造れるわづかなる祠なり。杉  
山社 村の西北の隅にあり。小祠。勸請の初を詳にせず。是も西藏院の持。

大樂院 小名青木前耕地にあり。新義眞言宗大和國城上郡長谷寺の末。日吉山神宮寺と號す。開山の年月を傳へざれど。山王の社傳  
に當寺を載せたり。彼社傳の事がらは疑はしきにもせよ。いづれ舊くより成りたるものなれば。此寺の舊地なる事も自らしるべし。中興  
開山延寶七年寂すとのみ傳へて其名をしらず。本堂九間半に六間半。本尊大日。座像長二尺五寸なるを置けり。門 西向。門外に石を  
以て造れる地藏及び觀音の二軀を立つ。觀音堂 門を入りて右にあり。四間四方。北向。正觀音。立像にて長一尺二三寸。辨天社

稻荷社 不動堂 觀音堂の傍にありて。いづれも纒なる造なり。西藏院 村の東多磨川の邊にあり。新義眞言宗郡内小杉村西明  
寺の末。青木山冷水寺と號す。開山の年歴を傳へず。按ずるに當寺の山號を青木と云ふ。今村内の里正久藏は青木氏なれば。もしくは此  
家の開基にもあらん。されど其家にも傳へざれば今よりは定かに知るべからず。客殿五間四方。南向。本尊大日。立像長二尺許なるを安  
ず。閻魔堂 村の中央にありて村民の葬地なり。土人此堂を『三昧場』とも『善性寺』とも呼ぶ。されど纒に二間四方の庵にて寺と云  
ふほどのことにはあらず。昔は一寺なりしにや。いづれの頃建てしと云ふことも傳へず。觀音堂 村の南方にあり。二間四方。東向。  
千手觀音の立像。長一尺五寸なるを安ぜり。又此堂を大日堂とも唱ふといへば。昔は大日を本尊とせしにや。村内西藏院持。

中丸子村 郡の北にあり。江戸日本橋より行程四里にあまれり。東は多磨川を堺として、向ひは下  
丸子村、南は上平間村、西は市ノ坪村にて、乾の方には上丸子、小杉の二村、北は下沼部村の飛地向河  
原と云ふ所となれり。東西八町餘、南北へ六町にあまれり。地形東の方より北へかけては低く、土性  
は眞土に砂交り、水田多く陸田少し。民戸六十四軒。村名の舊くより傳へしことは、前村の條照し見る  
べし。御入國の後寛文年中木造五郎兵衛の采地たりしが、其後伊奈半十郎支配せり。安永年中新田の地  
をば、伊奈半左衛門忠敬の檢せしことあり。今は小野田三郎右衛門支配所と本郷丹後守の知行交はれり。

高札場 御料所は村の東方にあり。私領は北方にあり。  
小名 前田通 村の中央の方にあり。塚田 前田通の邊にあり。長島耕地 塚田のあたりにあり。たで原 多磨川べり  
を云へり。

多磨川 村の東の方を西より南へさして通ず。下沼部村の飛地向河原より入り上平間村の方へ通ず。村内にかゝる所の川長さ四百間  
にあまれり。幅平水の頃は五十間もあるべし。この川向にも當村の飛地あり。梶ヶ谷橋 村の東の方多磨川の邊惡水堀に架す。長七  
間の一枚なる板なり。是をわたれば上平間村に至れり。

羽黒社 多磨川の方へよりあり。本社三間に二間。拜殿六間に二間半。東に向く。本地彌陀。藥師。觀音は行基の作なり。社地の  
さま雜木茂りていとふりたり。當社勸請の始を尋るに明曆三年の縁起あり。こは時の社僧天順と云へるが記せしものにて。當社神力の尊  
のみをのせしなれば。もとより事實のとるべきことなし。たゞそれが中に天正年中出羽國よりうつして勸請せりと云ふことを載せたり。  
さあらばこの頃よりの勸請ならんか。例祭正月八日。六月十日。九月八日の三日を以て行へり。村内無量寺の持。末社 辨天社 本  
社の傍にあり。神明、天神、稻荷合社 本社の北にあり。神明及び天神はもと多磨川向ひ飛地の内にありしに。いつの頃かこゝにひ  
きうつして合殿となせり。藏王社 本社に向ひて右にあり。この傍に社守の家あり。二間に九尺。

無量寺 村の西にあり。新義眞言宗小杉村西明寺の末。瑠璃光山長壽院と號す。開山法印覺源。文祿三年七月十六日寂せり。中興開  
山頂慶。寛永元年六月五日示寂す。客殿八間に六間半。東向。本尊彌陀。立像長四尺許なるを安ぜり。



卷百三十三 村里部

橘樹郡 八 稻毛領

**上小田中村** 郡の北にあり。江戸日本橋より四里餘と云ふ。村を上、下にわかちしもさまで近きことにもあらざるにや。天文十九年の頃の書に、はや上小田中とのせたり。又此村の舊家原氏の農民傳ふる處の大ヶ谷草創記には、先祖原勘解由左衛門勝光天文年中始めて大ヶ谷戸の地を草創して則ち其地に住せり。大ヶ谷戸の名も此時より始めりと。その地は村の北の方なり。此村は字大ヶ谷戸、神地の二ヶ所にのみわかれたり。すべて村内の廣さ東西へ八町半ばかり、南北へ二十町にあまれり。四境は東の方小杉、宮内二村に隣り、南は今井村、西は新城村にて、西南の間纒に下小田中村につゞき、北は宮内村なり。此邊は田多く畑少し。すべて平地にして山なし、土性は砂真土うちまじり、用水不便にてやゝもすれば旱損の患あり。村の南の方に相模國中原道と云ふ往還あり。長さ八町餘なり。小杉村より通じて新城村にいたる。家數すべて百七軒と云ふ。御料、私領打交れり。その外寺院の領もあり。風俗等他に替ることなく、たゞ九月十六日を佳節とさだむ。此日村内神明の祭事あればなり。檢地は元祿八年織田越前守うけたまはれり。御靈屋の料は、桂昌院殿の御佛供に附せらるゝ所なり。旗下の士の領は寛文六七年度の頃遠山忠兵衛が知行にたまへり。富士市十郎に賜ひしもその頃なりや傳へず。寺院は江戸本所彌勒寺、芝真福寺の領なり。これ元祿五年にたまはれり。御入國の後神谷彌五助重勝支配せり。土人は小泉次太

夫といへどおぼつかなし。其後中野吉兵衛、伊奈兵藏あづかり奉りしとなり。正保の頃は伊奈半十郎なりともものに見ゆ。此人初め兵藏と云ひしにや。此頃までは皆御料なり。その後より私領もまじりしかど、御料も残りて伊奈半左衛門、古川武兵衛、小林勘右衛門等代々の御代官連綿として姓名も傳へたれど、略してことごとくは載せず。今は小野田三郎右衛門が支配所なり。又大野原新田とて持添の地あまたあり。この事は上菅生村の條に記せり。

**高札場** 御靈屋料の方は村の北によりてあり。其餘は昔たちてありしかど今はなし。

**小名 神地** 村の東の方を云ふ。大ヶ谷村の北の方を云ふ。今此二つの小名を土人は村名のやうに呼びなせり。

**神地橋** 小杉。小田中兩村の持なり。長さ六間。横八尺。中原小杉境用水に架す。御普請所なり。土橋 無名の橋なり。東の方

村境用水に架す。長六間。横一間なり。根方堀 水源多磨川より流出づる用水なり。東の方宮内村より當村にかゝり。長さ三十町

ばかり流れ小杉村に至る。川幅四間ばかり。此水村内數條の細流となりて田地へ沃げり。

**神明社** 村の中央にあり。小宮にして覆屋二間四方。前に鳥居あり。南向。例祭九月十六日なり。村内長福寺の持なり。末社

稻荷社 社地に入りて右の方にあり。第六天社 是も右の方にあり。神明社 村の中央なり。小祠にて西向。前に鳥居あり。

寛永の頃の勸請なり。村内寶藏寺の持なり。關明神社 村の北方にて小名大ヶ谷戸にあり。其所の鎮守なり。近江國逢坂にたてる

關明神のうつしなり。社南向。二間に一間の覆屋あり。小社。前に鳥居あり。例祭は九月十七日。寶藏寺の持なり。稻荷社 是も村

の中央にあり。尤も小祠。寶藏寺持。白山社 北の方にあり。大ヶ谷戸の内なり。社南向。原勘解由左衛門勝光の建立と云ふ。勝光

は慶長六年死したり。是も小祠にて寶藏寺の持なり。末社 稻荷社 此社は昔は今の百姓勘右衛門が屋敷の内に入りしをその後、

ここに移せりと云ふ。勘右衛門は本社を建立せし勝光が子孫なり。